

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 2

竹林寺天文台遺跡

国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

2009

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
岡山県浅口市教育委員会

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 2

竹林寺天文台遺跡

国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

2009

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
岡山県浅口市教育委員会

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 2

竹林寺天文台遺跡

国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

2009

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
岡山県浅口市教育委員会



1 浅口市鶴方町本庄地区を望む（北上空から）



2 竹林寺天文台遺跡全景（東上空から）

巻頭図版2



1 小田郡矢掛町南山田地区を望む（南上空から）



2 弥生時代の遺構全景（西上空から）

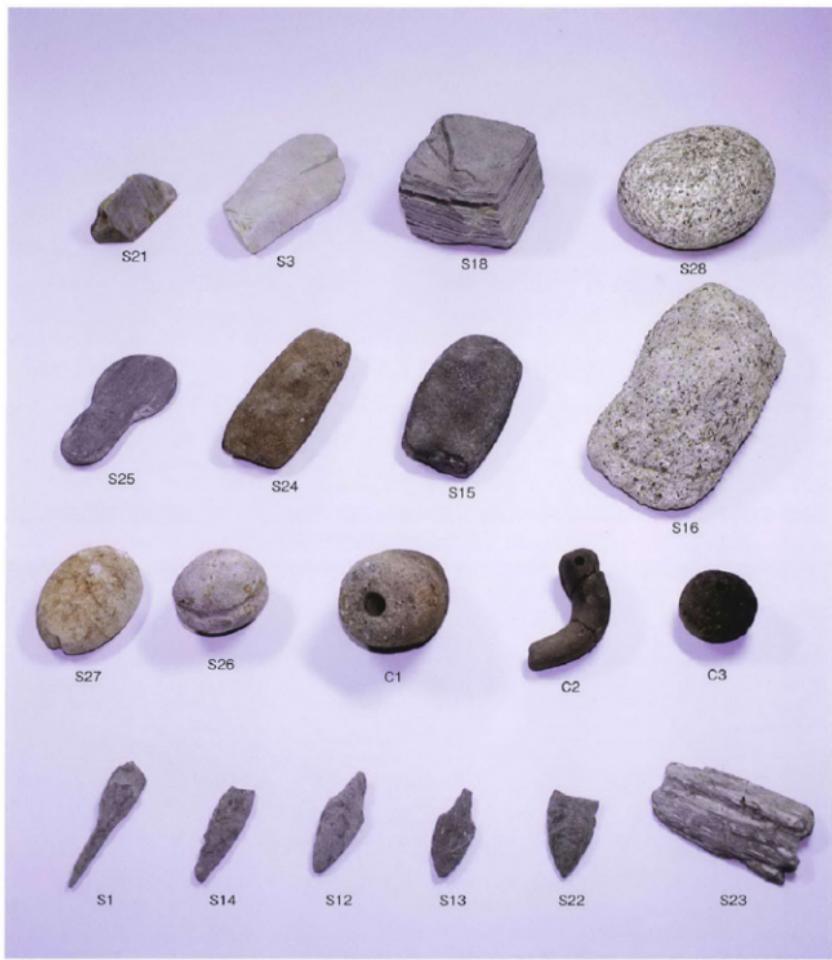


1 穂穴住居 1 (南から)



2 穂穴住居 2 (北西から)

卷頭図版 4



竹林寺天文台遺跡出土の土製品・石器・石製品

序

浅口市は、岡山県の南西部、続日本紀にも記されている元浅口郡の西端部（正確には笠岡市大島と里庄町が西端）に位置し、平成18年3月21日、金光・鴨方・寄島の3町が合併して誕生しました。南は、瀬戸内海国定公園の一角で、神功皇后の伝説に彩られた寄島の海岸線、北は山岳仏教の名残を留める遙照山、峰続きに陰陽師安倍晴明縁の阿部山、その間に現代の星の観測所である国立天文台岡山天体物理観測所のある竹林寺山等を擁する遙照山山系の山並み、中央南寄りを西から東へ里見川が流れ、それに沿って山陽本線と国道2号、そのやや北に旧鴨方往来と、自然が豊かで歴史的文化的魅力に富んだ浅口市です。

浅口市教育委員会では各種開発事業に先立って発掘調査を行い、文化財の保護と活用に努めているところです。

本報告書は、浅口市が大学共同利用機関法人自然科学研究機構から委託を受けて、平成20年度に実施した国立天文台新観測施設建設予定地内の竹林寺天文台遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。発掘調査の結果、太古の先人たちが弥生時代から中世にかけて生活を営んだ集落であることが明らかになりました。特に弥生時代については、標高340mの地点で竪穴住居や掘立柱建物、多種多様な遺物が見つかり、瀬戸内海沿岸地域の高地性集落を考える上で貴重な資料と言えます。

この報告書が今後の文化財の保護・保存とともに学術研究、郷土の歴史研究の資料、また地区住民の心の糧として活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の作成まで、諸々のご指導・ご支援を賜りました岡山県教育庁文化財課・岡山県古代吉備文化財センターはじめとする関係各位と猛暑の中にも誠心誠意発掘調査に従事してくださった皆様に、衷心より御礼申し上げます。

平成21年3月

浅口市教育委員会
教育長 工藤 進

例　言

- 1 本書は、国立天文台岡山新観測所建設に伴い、大学共同利用機関法人自然科学研究機構と浅口市の委託契約に基づき、浅口市教育委員会が平成20年度に発掘調査を実施した、竹林寺天文台遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 竹林寺天文台遺跡は岡山県浅口市鴨方町本庄3037-5および小田郡矢掛町南山田2808-27に所在する。
- 3 試掘調査は平成17年度に岡山県古代吉備文化財センターが実施し、本発掘調査は平成20年度に浅口市教育委員会が行った。調査は水田貴士、三浦孝章、藤原範子の3名が担当し、調査面積は700m²である。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては、各氏から、終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

浅倉秀昭 荒木幸治 安東康広 石田爲成 宇垣匡雅 氏平昭則 大橋雅也 岡田 博
岡本泰典 尾上元規 河合 忍 小嶋善邦 澤田秀実 島崎 東 白石 純 鈴木力郎
高田恭一郎 高田知樹 高橋進一 内藤善史 中野雅美 西野 望 信里芳紀 平井典子
平井泰男 福田正継 間壁忠彦 正木茂樹 光永真一 森岡秀人 山田浩史 米澤誠介
米田克彦 和田 剛 渡邊恵里子
岡山県教育庁文化財課 岡山県古代吉備文化財センター 矢掛町教育委員会
国立大学法人岡山大学

- 5 本書の作成は平成20年度に実施し、水田、三浦、藤原が担当した。
- 6 出土遺物の鑑定・分析については、次の諸氏・機関に依頼し有益な教示を得た。また分析結果の一部については報告文をいただき、本書付載に収録した。記して感謝の意を表する。
- | | |
|---------|----------------------|
| 石器の石材鑑定 | 鈴木茂之（岡山大学大学院自然科学研究科） |
| 炭化材 | 古環境研究所 |
- 7 本報告書の執筆は、水田貴士、三浦孝章、光永真一が分担して行い、全体の編集は水田が行った。
- 8 本報告書に関連する出土遺物および図面・写真類は、浅口市教育委員会（岡山県浅口市鴨方町鴨方2244-2）に保管している。

凡 例

1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標V系の座標北である。報告書抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。

2 遺構および遺物の挿図縮尺は図中に示したが、おおむね次のとおり統一している。

<遺構> 壁穴住居：1/80 掘立柱建物：1/60 土壙：1/30、1/40 潟：1/30 柱穴：1/30
<遺物> 土器：1/4 瓦：1/6 石器：1/2、1/3、1/6 鉄器：1/2 土製品：1/3

3 遺構全体図に示した遺構略称は、次のとおりである。

住：壁穴住居 建：掘立柱建物 墓：土壙墓 土：土壙 柱：柱穴

4 遺構番号は、遺跡ごとに通し番号とし、土器以外についてはその材質等により番号の前に次の略号を付して別番号とした。

石器・石製品：S 金属製品：M 土製品：C

5 土層断面および土器観察表における色調は、『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修)によっている。

6 本報告書に掲載した写真・地図のうち、第2図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「笠岡」「矢掛」を複製・加筆したものである。また巻頭図版1-1・第5図は国立天文台岡山天体物理観測所の提供による。

7 本報告に用いた遺構・遺物の時期区分については、一般的な政治区分に準拠したが、古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指している。

8 本報告書に掲載した遺構・遺物図においては、遺構断面図の地山、基盤層・石器・土・金属器の断面等を次に示すトーンで表現している。



遺構の地山



基盤層



石器の断面



土・金属器の断面

目 次

卷頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境 1

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯	7
第2節 発掘調査および報告書作成の経過	9
1 発掘調査	9
2 報告書	9
3 調査・整理体制	9
第3節 日誌抄	10

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査の概要	12
1 調査前の状況	12
2 調査の概要	14
第2節 弥生時代の遺構と遺物	14
1 概 要	14
2 竪穴住居	16
3 掘立柱建物	36
4 土 壤	38
5 溝	44
6 柱 穴	45
7 遺構に伴わない遺物	46
第3節 古墳時代以降の遺構と遺物	54
1 概 要	54
2 土 墓	55
3 土 壤	55

4 溝	59
5 遺構に伴わない遺物	60

第4章　まとめ

第1節　集落構造と変遷	61
第2節　周辺の弥生時代遺跡	61
第3節　竹林寺天文台遺跡からの眺望	62
第4節　竹林寺天文台遺跡出土の石器	64
第5節　水の確保の問題	65
第6節　県内出土の弥生時代後期の土玉	66

付載

天文台遺跡周辺の地形・地質	69
竹林寺天文台遺跡における自然科学分析	72

遺構一覧表

遺物観察表

図版

報告書抄録

奥付

図　目　次

第1図　遺跡位置図	1	第11図　堅穴住居1b (1/80)	18
第2図　調査地周辺の主要遺跡分布 (1/30,000)	2	第12図　堅穴住居1遺物出土状況	
第3図　伝説照山庭寺の平瓦 (1/6)	4	(1/100・1/4・1/6)	19
第4図　試掘・確認調査位置図 (1/3,000)	8	第13図　堅穴住居1出土遺物① (1/4)	20
第5図　国立天文台岡山天体物理観測所建設以前の地形 (1/10,000)	12	第14図　堅穴住居1出土遺物② (1/4・1/3)	21
第6図　現在の地形と調査地点 (1/10,000)	13	第15図　堅穴住居1出土遺物③ (1/2・1/3・1/6)	22
第7図　調査地点の調査前地形測量図 (1/400)	13	第16図　堅穴住居2 (1/80) · 堅穴住居2の変遷 (1/200)	25
第8図　弥生時代の遺構全体と地形断面図 (1/200)	15	第17図　堅穴住居2a (1/80)	26
第9図　堅穴住居1 (1/80)・堅穴住居1の変遷 (1/200)	16	第18図　堅穴住居2b (1/80)	27
第10図　堅穴住居1a (1/80)	17		

第19図	堅穴住居2c(1/80)	28	第44図	中央部岩周辺の出土遺物(1/4)	48
第20図	堅穴住居2 遺物出土状況 (1/100・1/4・1/6)	29	第45図	遺構に伴わない遺物①(1/4)	49
第21図	堅穴住居2 出土遺物①(1/4)	30	第46図	遺構に伴わない遺物②(1/4)	50
第22図	堅穴住居2 出土遺物②(1/4)	31	第47図	遺構に伴わない遺物③(1/4)	51
第23図	堅穴住居2 出土遺物③(1/4)	32	第48図	遺構に伴わない遺物④(1/4)	52
第24図	堅穴住居2 出土遺物④(1/4・1/3・1/2)	35	第49図	遺構に伴わない遺物⑤(1/2・1/3)	53
第25図	掘立柱建物1(1/60) · 出土遺物(1/4・1/3)	36	第50図	古墳時代以降の遺構全図(1/200)	54
第26図	掘立柱建物2(1/60)	37	第51図	土塙墓1(1/30)	55
第27図	上塙1~3(1/30)	38	第52図	土塙22~26(1/30)	56
第28図	上塙4(1/40)	38	第53図	土塙27~31(1/30)	57
第29図	上塙5(1/40) ·出土遺物(1/4)	39	第54図	上塙32~33(1/30)	58
第30図	土塙6(1/30)	39	第55図	講4~7(1/30)	59
第31図	土塙7(1/30)	39	第56図	遺構に伴わない遺物(1/4)	60
第32図	土塙8(1/30) ·出土遺物(1/4)	40	第57図	竹林寺天文台遺跡からの可視域	63
第33図	土塙9(1/30)	40	第58図	竹林寺天文台遺跡周辺の湧水地点	65
第34図	土塙10~12(1/30)	41			
第35図	土塙13~15(1/30)	41			
第36図	土塙16(1/30)	42			
第37図	土塙17(1/30)	42			
第38図	土塙18(1/30)	42			
第39図	土塙19(1/30)	43			
第40図	土塙20(1/30)	43			
第41図	土塙21(1/30)	43			
第42図	構1~3(1/30)	44			
第43図	柱穴1~4(1/30)	45			

卷頭図版目次

卷頭図版1	1 浅口市鴨方町本庄地区を望む(北上空から) 2 竹林寺天文台遺跡全景(東上空から)
卷頭図版2	1 小田郡矢掛町南山田地区を望む(南上空から) 2 鮎生時代の遺構全景(西上空から)

卷頭図版3	1 堅穴住居1(南から) 2 堅穴住居2(北西から)
卷頭図版4	1 竹林寺天文台遺跡出土の 土製品・石器・石製品

表 目 次

第1表 文化財保護法に基づく提出書類一覧	11	第4表 竹林寺天文台遺跡出土石製品一覧表	65
第2表 投弾の大きさと重さの分布	24	第5表 土玉分類表	66
第3表 竹林寺天文台遺跡周辺の主要弥生遺跡	62	第6表 土玉一覧表	67

写 真 目 次

写真1 現地説明会の様子	11	写真6 壁穴住居2 掘削の深さ	29
写真2 作業風景	15	写真7 壁穴住居2 作業風景	33
写真3 排水作業	15	写真8 サスカイト剝片	34
写真4 中央穴 作業風景	19	写真9 捜立柱建物1 作業風景	36
写真5 壁穴住居2 東側掘削部分	29	写真10 サスカイト剝片	37

図 版 目 次

図版1 1 天文台から備讃瀬戸を望む		図版9 1 捜立柱建物2 (北から)	
2 弥生時代の遺構全景 (上が北)		2 土壙7 (南西から)	
図版2 1 壁穴住居1 (南から)		3 土壙8 (南東から)	
2 壁穴住居1a 中央穴 (南東から)		図版10 1 上壙11 (南から)	
3 壁穴住居1 壁体溝断面 (東から)		2 上壙12 (西から)	
図版3 1 壁穴住居1 壁体溝工具痕 (南西から)		3 土壙14 (西から)	
2 壁穴住居1 中央穴切り合い状況 (北から)		図版11 1 土壙18 (南から)	
3 壁穴住居1 柱穴 (南から)		2 上壙20 (北東から)	
図版4 1 壁穴住居1b 中央穴遺物出土状況 (西から)		3 池1 (南西から)	
2 壁穴住居1b 中央穴完掘状況 (南から)		図版12 1 池3 (西から)	
3 壁穴住居1b 排水溝断面 (南西から)		2 包含層 土器(108)出土状況 (北から)	
図版5 1 壁穴住居1 土器出土状況 (西から)		3 包含層 土器(160)出土状況 (東から)	
2 壁穴住居2 (北西から)		図版13 1 古墳時代以降の遺構全景 (北西から)	
3 壁穴住居2 上層断面 (南西から)		2 土壙墓1 挖出状況 (南西から)	
図版6 1 壁穴住居2 上層断面 (西から)		3 土壙23 (南から)	
2 壁穴住居2b・c 壁体溝断面1 (西から)		図版14 1 壁穴住居1 出土遺物	
3 壁穴住居2b・c 壁体溝断面2 (西から)		2 壁穴住居2 出土遺物	
図版7 1 壁穴住居2 中央穴断面 (南から)		図版15 1 弥生時代 遺構に伴わない遺物	
2 壁穴住居2 中央穴 (南から)		2 古墳時代以降 遺構に伴わない遺物	
3 壁穴住居2 P12断面 (南東から)		3 壁穴住居1 石製品・石器・石製品	
図版8 1 壁穴住居2 P15 (北から)		図版16 1 壁穴住居2 鉄器・土製品・石器・石製品	
2 捜立柱建物1 (北から)		2 捜立柱建物1 石器	
3 捜立柱建物1 P2 (北東から)		3 遺構に伴わない遺物 土製品・石器・石製品	

第1章 地理的・歴史的環境

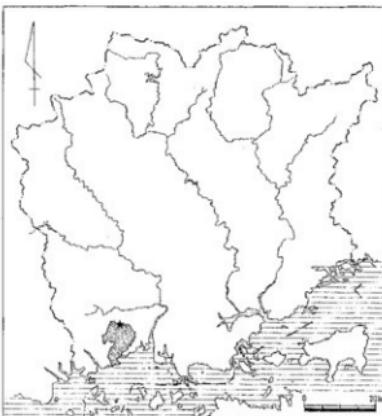
竹林寺天文台遺跡は、岡山県南西部の浅口市鴨方町本庄および小田郡矢掛町南山田に所在する。浅口市と矢掛町は、東を倉敷市、北を井原市・総社市、西を笠岡市・浅口郡里庄町と接している。浅口市と矢掛町の境界に位置する竹林寺山は、遙照山山系に属する標高384mの山で、別名市平山とも呼ばれている。この山の東側山頂標高340mの位置に本書で報告する竹林寺天文台遺跡は所在する。竹林寺山や阿部山が連なる遙照山山系は、標高250m以上の場所では白亜紀の火山活動によって堆積した流紋岩が地質基盤となり、それ以下の場所では白亜紀末に貫入した花崗岩が地質基盤となっている。遙照山山系に堆積している花崗岩は細粒花崗岩類であるが、鴨方町本庄や矢掛町南山田の台地部分に堆積している花崗岩は、やや粗い中粒花崗岩類である。また鴨方町地頭や矢掛町里山田といった低地部分は、川から運ばれた土砂の堆積による扇状地である。竹林寺天文台遺跡周辺には、本庄川・曲田川があり、この二つの川が大殿で合流し鴨方川となり、さらに南部の下名口で鴨方町の北西部を流れる杉谷川、地頭上で北東部を流れる益坂川と合流する。矢掛町では、南山田を流れる道々川が、扇状地を形成し、土生で東西に流れる小田川に合流する。

竹林寺天文台遺跡周辺の遺跡は、古くは旧石器時代から存在する。鴨方町益坂の和田遺跡からはサヌカイト製の槍先形尖頭器が出土し、阿部山ではサヌカイト製のナイフ形石器が採集されている。

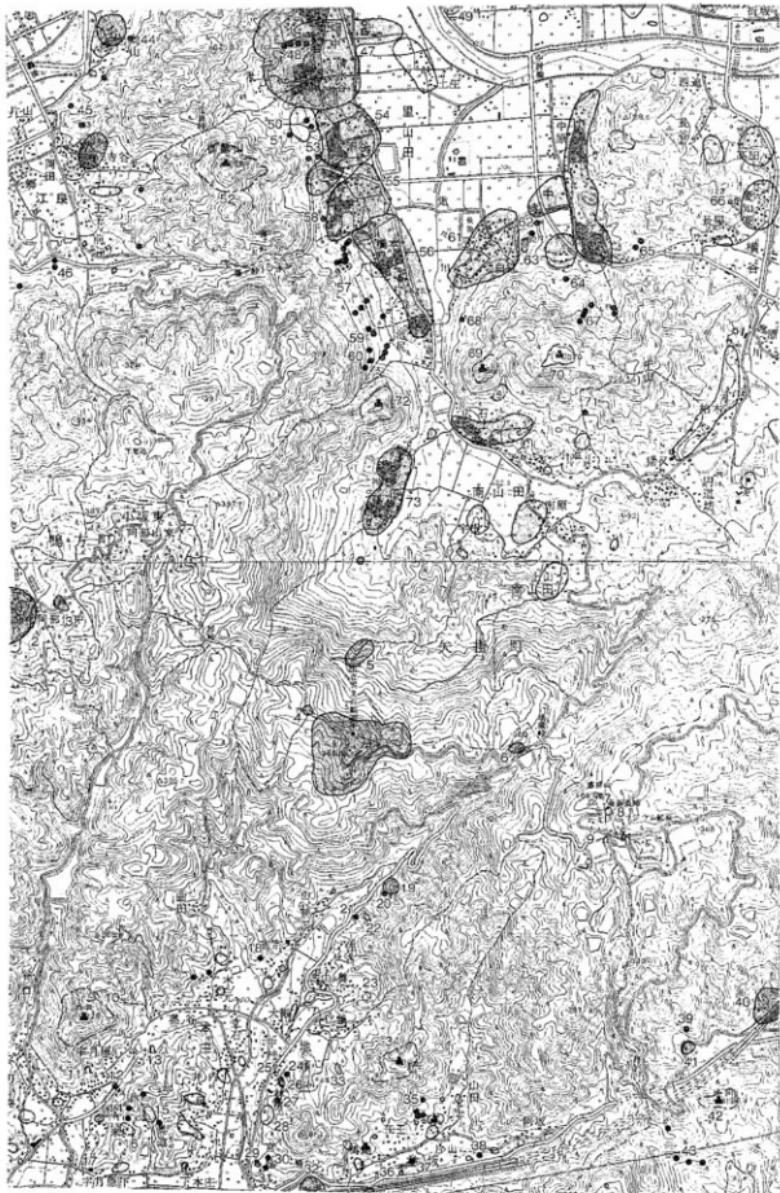
縄文時代になると、金光町占見新田の加賀池遺跡から縄文時代早期の押型文土器が出土し、矢掛町東三成の奥追遺跡では早期の押型文土器と前期の土器が出土している。また鴨方町益坂の向原遺跡で後期の深鉢が出土し、鴨方町小坂東土井谷では後期の土器が採集されている。さらに奥追遺跡・矢掛町里山田の清水谷遺跡からも後期・晩期の土器片が出土しており、竹林寺天文台遺跡周辺に分布する縄文時代の遺跡の多くが後期以降のものである。

弥生時代になると、遺跡が飛躍的に増加する。前期には、清水谷遺跡一本木地区に島状の微高地を利用した環濠集落が出現する。この環濠集落からは、6軒の竪穴住居や30棟以上の掘立柱建物・柵などが検出され、集落内における建造物の配置が明らかとなった。環濠内の竪穴住居は、平面形態が円形を呈し、中央穴を挟む2本の柱穴を有する「松葉型住居」である。微高地西側の低位部からは水田が検出されている。また鴨方町小坂東の尤倒本谷遺跡では、木葉文が施された壺が出土している。

弥生時代中期にはさらに遺跡が増加し、山間部や自然堤防上にも集落が広がる。中期の遺跡として、鴨方町と矢掛町の境界に位置する地蔵峠の地蔵峠遺跡や、竹林寺山南側に



第1図 遺跡位置図



第2図 調査地周辺の主要遺跡分布 (1/30,000)



弥生時代集落・散布地

- | | |
|--------------|-----------|
| 1 竹林寺天文台遺跡 | 2 阿部山遺跡 |
| 6 姥羅崎遺跡 | 7 遠照山廻寺 |
| 11 宇月原窓跡 | 12 宇月原窓古墳 |
| 16 肉山土器陪葬 | 17 米道跡 |
| 21 取地古墳 | 22 道面遺跡 |
| 26 地頭上八幡神社遺跡 | 27 光林坊古墳 |
| 31 日吉塚古墳 | 32 和田遺跡 |
| 36 向原遺跡 | 37 向原古墳 |
| 41 カナクロ田遺跡 | 42 城山城跡 |
| 46 郡ノ上古墳群 | 47 清水谷遺跡 |
| 51 下谷古墳 | 52 仰藍山城跡 |
| 56 倍木遺跡 | 57 倍木古墳群 |
| 61 白江遺跡 | 62 幸岡山古墳群 |
| 66 妙泉寺境内古墓群 | 67 安居寺古墳群 |
| 71 小道大塚古墳 | 72 山田古城跡 |

古墳

- | | |
|------------|-------------|
| 3 阿部山遺跡 | 4 竹林寺遺跡 |
| 8 遠照山窓跡 | 9 遠照山瓦窓跡 |
| 13 移谷城塚跡 | 14 向山古墳群 |
| 18 坪古墳 | 19 段林道跡 |
| 23 金屋遺跡 | 24 地頭上八幡塚古墳 |
| 28 光林坊遺跡 | 29 日吉神社遺跡 |
| 33 桶路跡 | 34 西知山城跡 |
| 38 阿板古墳 | 39 大石古墳 |
| 43 加賀山古墳群 | 44 向山古墳 |
| 48 雄中古墳群 | 49 茶臼山城跡 |
| 53 三田山古墳群 | 54 里山田下谷遺跡 |
| 58 倍木荒神塚古墳 | 59 雷御神社古墳群 |
| 63 上岡山古墳群 | 64 中池ノ内遺跡 |
| 68 王子の塚古墳 | 69 船が迫山城跡 |
| 73 神之島遺跡 | 74 上山遺跡 |

古墓等

山城

- | |
|-------------|
| 5 竹林寺・池藏谷遺跡 |
| 10 杉山城跡 |
| 15 奥追古墳群 |
| 20 段林古墳 |
| 25 八幡五輪塔 |
| 30 日吉神社古墳 |
| 35 片山塚古墳群 |
| 40 上竹西の坊遺跡 |
| 45 片山古墳群 |
| 50 四頭山古墳 |
| 55 里山田上谷遺跡 |
| 60 池尻古墳群 |
| 65 江木新安寺古墳群 |
| 70 中山城跡 |

位置する鶴方町地頭上の段林遺跡・金光町の上竹西の坊遺跡などが知られている。段林遺跡では分銅形土製品や土器が出土し、上竹西の坊遺跡では竪穴住居が6軒検出され、中期中葉の土器、石器や石包丁、分銅形土製品等が出土している。また矢掛町南山田の神之脇遺跡・上山遺跡、東三成の奥追遺跡、里山田の清水谷遺跡で土器が出土したほか、畑中散布地でも中期の土器が採集されている。これらの遺跡の分布から、弥生時代中期には竹林寺山山麓に集落が点在していたことが想定できる。

弥生時代後期になると、平地丘陵と高地に集落が集中する。段林遺跡は標高120m、道面遺跡は標高116mの山塊中腹に立地しており、平地丘陵と高地の中間に位置する集落といえる。段林遺跡では径7m前後の竪穴住居が検出され、鉄鎌や鍛製刀子、玉類・土器などが出土している。道面遺跡では竪穴住居2軒と柱穴列・貯蔵穴が検出されている。竪穴住居は、2軒とも平面形態が円形を呈し、径は5.4mと約7mと推定されている。竹林寺天文台遺跡は、今回の調査地点の西側標高360mの尾根上にも遺跡が広がっており、過去の確認調査において焼失住居を含む竪穴住居2軒が検出されている。矢掛町では、里山田・中・東三成を中心に丘陵部で遺跡が増加し、里山田には清水谷遺跡・里山田上谷遺跡・里山田下谷遺跡、中には中池ノ内遺跡・白江遺跡といった集落が形成された。白江遺跡では溝状の遺構から土器がまとめて出土しており、中池ノ内遺跡では平面形態が円形を呈する径約4.5mの竪穴住居が検出されている。この住居が廃絶した後、住居域の南部に土器棺を開むように土壙墓を配置した墓域がつくられている。里山田上谷遺跡では竪穴住居内から後期後半の土器が出土し、奥追遺跡では4軒の竪穴住居が重複して検出されている。また鶴方町六条院中の森山遺跡は、泉山北側から延びる低丘陵に立地する集落遺跡であり、竪穴住居2軒と大量の土器や分銅形土製品が出土している溝などが検出されている。竪穴住居は、平面形態が円形を呈する径約6mのものと3.5m以上のものが検出されている。

弥生時代後期末には、土壙墓が散見できるようになる。矢掛町中白江の芋岡山遺跡は尾根上に位置し、30基からなる土壙墓群が築かれた。土壙墓群周辺の土塚や溝からは土器が出土しており、立坂型の特殊壺・特殊器台が含まれている。また鶴方町益坂の和田遺跡でも土壙墓群が検出され、そのうち1基の土壙墓からは向木見型の特殊器台や勾玉・管玉などの玉類が出土している。

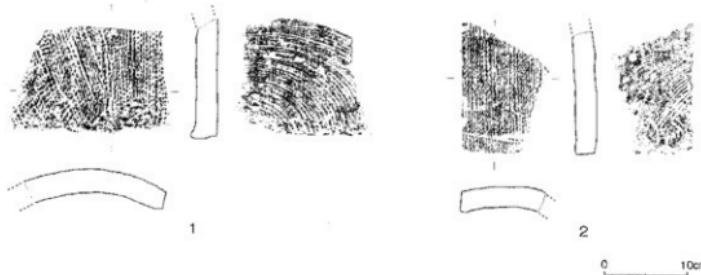
鶴方町では、古墳時代前期になると集落から離れた丘陵上に箱式石棺をもつ円墳が築かれる。小坂東の宇月原向山1号墳は盛土が消失しており墳形は不明であるが、長さ1.7m、最大幅0.45mの組合せ

箱式石棺の中から2体分の人骨と鉄剣・鎌・鏡が出土している。地頭上の光林坊古墳は丘陵頂部に位置し、長さ2.0m、幅0.4mの箱式石棺をもつ。また本庄の坪古墳からは乳文鏡が出土している。このほか、益坂から松井には前期から中期と考えられる直径10m前後の円墳3基からなる安芸守山西南古墳群が築かれている。このうち安芸守山西南2号墳には、竪穴式石室のものと考えられる石材が残存している。また明確に古墳時代中期と位置づけられる古墳は現在のところ不明である。

古墳時代後期になると、山麓や丘陵上に横穴式石室をもつ古墳が築かれる。鴨方町地頭上の段林古墳は、盛土の大半が消失しているが直径8~9mの円墳と推定されている。調査時には横穴式石室が2.7m残存しており、石室内から耳環・鉄鎌・農工具・土師器・須恵器が出土している。鴨方町地頭上の宮の脇古墳は直径約14mの円墳と推定されている。石材が抜き去られていたため、石室は残存していないが、調査によって長さ5.4m以上、最大幅1.8mの玄室をもつ横穴式石室であったと考えられている。石室部分からは、耳環・銅鏡・大刀・鉄釘や須恵器が出土している。地頭上の塚地古墳は直径約11mの円墳と推定され、長さ6.65m以上、最大幅1.8mの横穴式石室から馬具・耳環・鉄刀・鉄製刀子・鉄鎌・鉄釘・須恵器が出土している。鴨方町益坂の阿坂古墳は、直径約12mの円墳と推定され、全長7.7m、最大幅1.7mの横穴式石室内に耳環・鉄鎌・須恵器が副葬されていた。このほか鴨方町では、杉谷川沿いに小坂東谷口の杉谷古墳群・小坂東大劍の大劍古墳群・益坂川沿いには片山古墳群、鴨方川沿いには上名口古墳が築造された。このうち片山2号墳は、幅1mの無袖式の横穴式石室であることが確認されている。上名口古墳は、約15mと推定される円墳で、古墳周辺からは、土師器や須恵器が採集されている。鴨方町内では古墳時代を通して前方後円墳は築造されていない。

矢掛町では、鴨方町とは対比的に前方後円墳が築造されている。古墳時代前期には、東三成の丘陵斜面に推定長22mの前方後円墳である奥迫17号墳が築造された。東三成池内の中山2号墳は、全長30mの前方後円墳と推定されており、円筒埴輪が採集されている。茶臼山山頂の茶臼山古墳は、墳長20~23mの前方後円墳である。また、鴨方町と同様に箱式石棺をもつ古墳が築かれており、里山田土井の土井1号墳や、宮の下矢掛神社裏山の蛸ノ頭古墳が知られている。中期の古墳として、白江の芋岡山1号墳があげられる。この古墳からは老年男性の人骨と堅櫛が出土している。

後期になり、阿部山東麓に位置する池尻古墳群や橋本古墳群といった群集墳が形成される。橋本古墳群は15基の古墳から構成され、古墳群中最大規模の橋本荒神塚古墳は、約20mの円墳と推定され、



第3図 伝達照山庵寺の平瓦（1/6）

横穴式石室は7.5mが現存し、石室内には岡山県内で6例しか確認されていない石棚を有する。また古墳時代終末期には南山田の中山南麓に小迫大塚古墳が築かれる。この古墳は矢掛町の後期古墳では最大規模の東西約27m、南北約25mの方墳であり、内部主体は全長10.7m、奥壁幅2.4mの大規模な横穴式石室である。

古代には、須恵器生産に関連する遺構や仏教に関わる遺構・遺物がみられる。上竹西の坊遺跡では7世紀頃の須恵器窯が検出され、灰原からは須恵器のほか、円面鏡が出土している。この他にも製塙土器や鉄製の刀子・鍛錘車などの遺物も出土している。またこの時代に仏教が広まると、地方でも仏教寺院が建立されるようになり、金光町古見には占見廃寺が建立され、礎石と瓦が検出されている。瓦には、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、平城宮六二二五系軒丸瓦、平城宮六六六三系軒平瓦、均整唐草文軒平瓦がある。占見廃寺の東100mほどの丘陵裾にはロストル式平窯の山崎瓦窯跡群が築かれている。仏教に関わる遺物は、平地部だけでなく、高地でも採集されている。標高約400mの遙照山では蓮華文軒丸瓦や平瓦（第3図-1・2）、阿部山では土製粗輪が採集されており、遙照山の山岳宗教を示す資料となっている。また和田遺跡では、炭を製造する横口式製炭窯が検出され、窯の熱残留磁気から8世紀前半に操業していたことが判明している。矢掛町では小田川沿いに旧山陽道が整備された。矢掛町毎戸の毎戸遺跡は旧山陽道に面しており、100m四方の区画内に3棟の掘立柱建物などが配置されている。遺物には大量の瓦のほか、「馬」の文字が書かれた土師器盤が出土しており、旧山陽道の小田駅家に当たると考えられている。また里山田の清水谷遺跡楠木地区では、総柱建物や掘立柱建物が検出され、縁釉陶器や円面鏡などが出土している。

中世には、鴨方町小坂西の沖の店遺跡で土師器焼成窯が検出されており、椀や小皿のほかに瓦を生産していたことが判明している。またこの時代には、鴨方町小坂東の杉山城（標高223m）や益坂の西知山城（標高183m）、鶴山城（標高168m）、矢掛町と倉敷市真備町の境界に位置する猿掛城（標高370m）や矢掛町の茶臼山城（標高96m）、山田古城（標高210m）・船が迫山城（標高186m）・中山城（標高270m）といった中世山城が多数築かれている。このうち鶴山城は、一の段を中心に郭が北と南東にのびる連郭式山城で、石垣や堀切がみられる。また庄氏と三村氏との「猿掛合戦」の舞台となった猿掛城は、土壘に囲まれた全長約200mの山城である。猿掛城の南西に位置する御土井では庄氏館跡が発見されている。猿掛城は庄氏の居城であったが、後に毛利氏の配下となった。その後、茶臼山城が毛利氏によって猿掛城の出城として築かれている。茶臼山城は、濠や35以上の郭に囲まれた平山城で、柱穴や礎石などが検出されている。このほか、鴨方町本庄木ノ元のゆるぎ堂にまつられる花崗岩一石を丸彫にした地蔵石仏が彫成された。ゆるぎ堂地蔵石仏は、刻文から正慶元（1332）年の作と確認でき、この時代の丸彫石仏としては大変珍しく、岡山県重要文化財に指定されている。

江戸時代になると鴨方藩が成立し、支藩である鴨方藩と本藩の岡山城下を結ぶ鴨方往来が整備された。鴨方往来に面した高戸家住宅は、江戸時代前期に建築されたものと考えられており、貞享4（1687）年に修理を行ったことが棟札により判明している。高戸家住宅は、岡山県内で最も古い町家であり、現在「かもがた町家公園」として改修され、母屋が県指定重要文化財、新宅が市指定文化財となっている。また矢掛町には旧山陽道の宿駅が置かれ、宿場町として栄え、石井家が大名や幕府の役人などを宿泊させる本陣、高草家が脇本陣をつとめた。現在、本陣・脇本陣は国の重要文化財に指定されている。

（三浦孝章）

主要参考文献

- 宗澤節雄「浅口郡金光町古見瓦跡発見報告」『吉備考古』第81・2合併号 1951
- 鎌木義昌「岡山県浅口郡古見庵寺址」『日本考古学年報』2 成文堂新光社1954
- 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第1号 倉敷考古館1966
- 間壁忠彦「岡山県矢掛町幸岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第3号 倉敷考古館1967
- 間壁忠彦「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例（浅口郡鴨方町宇月原）」『倉敷考古館研究集報』第4号 倉敷考古館1968
- 伊藤見「加賀池・宮地池遺跡および益坂散布地の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2
- 岡山県教育委員会1974
- 下澤公明「毎戸遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5 岡山県教育委員会1974
- 石田寛「岡山縣の地理」福武書店1978
- 平井勝「鴨方町片山古墳群の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会1980
- 伊藤見ほか「和田遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 岡山県教育委員会1981
- 浅倉秀昭「星山田下谷遺跡・上谷遺跡確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』12 岡山県教育委員会1982
- 間壁忠彦ほか「矢掛町史」本編 矢掛町1982
- 高畠知功「奥追遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』60 岡山県教育委員会1985
- 高畠知功「茶白山城跡」『岡山県埋蔵文化財報告』16 岡山県教育委員会1986
- 岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会「歴史的町鴨方の変貌－陣屋町から近郊住宅地へ－」
- 地域研究第29集1987
- 井上弘「上竹西の坊遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 岡山県教育委員会1988
- 間壁忠彦「第二章 郷土のあけぼの」『鴨方町史』本編 鴨方町1990
- 桑田俊明「白江遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』80 岡山県教育委員会1992
- 尾上元規ほか「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』108 岡山県教育委員会1996
- 平井勝「岡山県矢掛町橋本荒神塚占墳（橋本15号墳）の測量調査」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会1997
- 鴨方町教育委員会『かもがた町家公園記録集』1998
- 小林利晴ほか「段林遺跡・段林古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132 岡山県教育委員会1998
- 杉山一雄「清水谷遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』134 岡山県教育委員会1998
- 岡本久久「道面遺跡・塚地古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』147 岡山県教育委員会1999
- 直原伸二ほか「清水谷遺跡〈一本木地区〉」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』1 矢掛町教育委員会2001
- 光永真一ほか「里山田下谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』31 岡山県教育委員会2001
- 小林利晴「神之脇遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』169 岡山県教育委員会2002
- 安倍晴明記念公園（仮称）整備計画策定委員会「安倍晴明記念公園（仮称）整備計画」2003
- 金光町史編纂委員会編「金光町史」本編 金光町2003
- 藤江望「清水谷遺跡〈楠木地区〉」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』2 矢掛町教育委員会2003
- 小林利晴「国立天文台岡山天体物理観測所望遠鏡施設建設に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』34 岡山県教育委員会2004
- 別府信吾「『櫛中國山藩』の世界－岡山本支藩の研究」 吉備人出版2008
- 水田貴士「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』1 浅口市教育委員会2008

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

竹林寺天文台遺跡に所在する自然科学研究機構国立天文台岡山天体物理観測所（以下、岡山天体物理観測所という。）と岡山県教育委員会（以下、県教委という。）との、新望遠鏡施設建設に係る協議は、平成13年度に始まる。最高所に位置する188cm反射望遠鏡ドームの北西に続く尾根上に、気象等の観測装置を設置する内容であったが、盛り土による平坦面の造成に留まり、慎重工事での対応とした。

平成14年度には、南へ続く尾根上に2基の新望遠鏡施設建設が計画され、うち1基が京都大学に係るものであった。平成15年度に県教委が実施した確認調査により、2か所とも弥生時代の竪穴住居等が所在することが明らかになり、保存協議の結果、事前の発掘調査が必要と判断された。ところが、年度末になって、いま1基を計画していた広島大学が建設地を変更したため、平成16年度に予定されていた県教委による発掘調査は、急遽中止となった。

この間に、岡山天体物理観測所は、当時は埋蔵文化財包蔵地としていなかった竹林寺天文台遺跡の東に鞍部を経て所在する山頂を造成し、観測装置を設置した。そして、その観測結果に基づいて、この位置に京都大学が新望遠鏡施設を建設することとした。

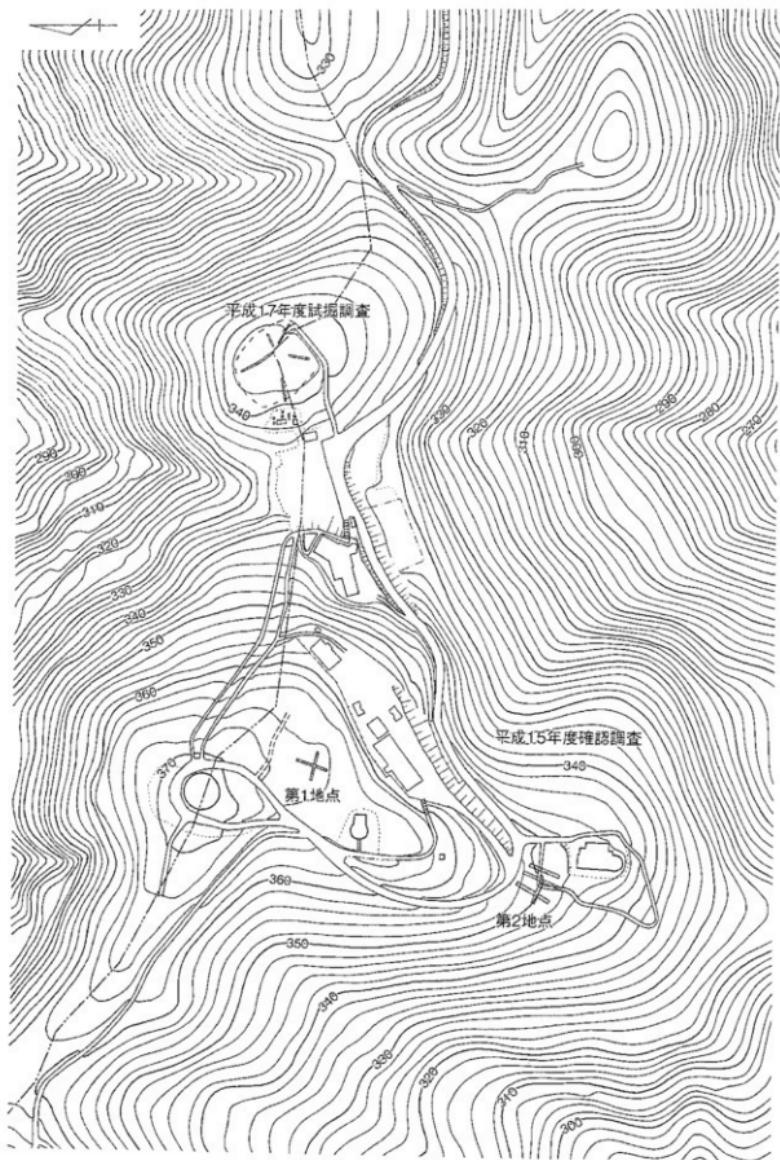
平成17年度に県教委が実施した試掘調査の結果、当該地は弥生時代以降の埋蔵文化財包蔵地と判断され、竹林寺天文台遺跡の範囲を拡大することになった。これを受けた保存協議の結果、約1,000 m²について発掘調査が必要となり、調査対象地が浅口市と矢掛町にまたがることから、県教委が国立大学法人京都大学からの委託を受けて、平成19年度に発掘調査を実施することとした。

平成18年度に入って、新望遠鏡施設は株式会社ナノオプトニクス研究所（以下、ナノオプトニクスという。）が建設し、京都大学へ寄贈する計画であることが明らかとなつたが、県教委の調査については、調査面積を約850 m²に縮小して、京都大学からの委託で行うことを再確認した。しかるに、またしても年度末に至って、ナノオプトニクスの資金計画変更と、京都大学の委託不可という原因者側の都合により、調査計画は中止された。このため県教委は、浅口市教育委員会（以下、市教委という。）及び矢掛町教育委員会（以下、町教委という。）と協議の上、以後この事業をナノオプトニクスによる民間開発事業とみなし、対応を市教委に委ねることとした。

その後、平成19年9月に、岡山天体物理観測所から市教委へ発掘調査の打診がなされたため、11月に、岡山天体物理観測所、京都大学、ナノオプトニクスと、県教委、市教委、町教委の6者が協議し、平成20年度に市教委が発掘調査を実施し、その費用をナノオプトニクスが負担することが了解された。糺余曲折は続く。調査着手1か月前の平成20年3月、ナノオプトニクスが資金を国立天文台へ寄付し、岡山天体物理観測所が新施設建設のための土地整備を行うこととなり、調査対象面積も約700 m²に縮小された。このことについては、岡山天体物理観測所、県教委、市教委及び町教委の4者が協議し、変更を了解した。

契約が整い、現地で発掘調査が開始されたのは4月末日である。

(光永真一)



第4図 試掘・確認調査位置図 (1/3,000)

第2節 発掘調査および報告書作成の経過

1 発掘調査

発掘調査は、平成20年4月24日付で文化財保護法第99条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を提出し、平成20年4月30日から本市教育委員会事務局国際文化交流課職員3名が調査にあたった。調査着手以前に調査区中央から西側部分において多くの弥生土器片を表探すことができた。調査は、調査以前の地形測量をしたのち、人力で遺構の検出・掘り下げを行い、随時、遺構の実測・写真撮影を行った。6月上旬には悪天候が続き、発掘現場での作業が中断することになり、7月中旬まで現地作業を実施することとなった。調査では、弥生時代後期の竪穴住居5軒、掘立柱建物2棟を中心とする遺構が検出され、それに伴って多くの遺物が出土した。竪穴住居が複雑に重なり合っていることも判明し、調査は困難を極めたが、最終的に多大な成果が得られた。弥生時代の調査がほぼ終了した時点で、遺構の遠景・全景の空撮をラジコンヘリにより行った。7月中旬には発掘調査を終了し、その後、調査区の埋め戻しを行い、調査事業を終了した。同年7月30日付で井原警察署長及び玉島警察署長あてに文化財保護法第100条に基づく「埋蔵文化財見通通知」を提出した。成果として、主に弥生時代後期の高地性集落跡や古墳時代以降の遺構を確認した。出土した遺物は、コンテナ箱にして17箱を数えた。

なお、発掘調査期間中に浅口市立寄島中学校生徒による職場体験で出土した土器の洗浄及び注記作業の体験学習が行われた。7月12日には、現地説明会を開催し、遺構や遺物の説明や、出土遺物・写真パネル・発掘調査道具・調査器材等の展示を行い、市内外60名を越える参加者で賑わった。

今回の調査の模様は、浅口市のホームページに「竹林寺天文台遺跡発掘調査速報」を掲載し、随時情報更新を行い、発掘現場の情報を発信した。

2 報告書

報告書作成は、平成20年7月30日から平成21年3月19日までの期間、浅口市教育委員会内(浅口市中央公民館)において行った。

発掘調査は平成20年7月29日に終了していたが、調査の最終段階まで遺構および遺物の検出作業を継続して行っていたことから、発掘調査期間中に全ての遺物の洗浄および注記、遺物整理、遺構図面整理、写真整理といった整理作業を終了することができなかった。そのため、報告書作成業務は、これらの未整理の遺物、図面、写真等の整理作業から開始することとなった。出土した遺物はコンテナ17箱であったが半数が未洗浄であったため、洗浄作業が急務となった。土器の注記・復元・抽出、石製品・金属器の抽出、遺物実測作業を進行した。調査で検出し、整理を行った遺構は、竪穴住居2軒、掘立柱建物2棟、土壙墓1基、土壙33基、溝7条、柱穴4基に及んだ。出土した遺物のうち、土器176点、石製品31点、金属器2点、土製品3点を本書に掲載している。なお、報告書に掲載した出土遺物については、報告書に掲載されている遺構名及び遺物番号で、また、他の遺物は調査時の旧遺構番号で保管している。なお、これらの遺物は図版や写真とともに、本市中央公民館および鴨方郷土資料館収蔵庫で保管している。

(水田貴士)

3 調査・整理体制

平成20年度

浅口市教育委員会

教育長 工藤 進

教育次長 桜木 忠明

国際文化交流課

課長 谷本 靖

埋蔵文化財専門員 水田 貴士（事務・調査・報告書担当）

埋蔵文化財発掘調査員 三浦 孝章（調査・報告書担当）

埋蔵文化財発掘調査員 藤原 範子（整理・報告書担当）

報告書作成協力者

山本敏夫（浅口市文化財保護委員）

定金司郎

浅口市文化財保護委員会委員

秋田征矢雄（会長） 川崎格郎（副会長） 白井洋輔 大島至孝 貝畠正巳

金光英子 西野良一 花房泰志 原田玲子 藤澤 雅 山本敏夫 弓削 崇

発掘調査作業員（社団法人浅口市シルバー人材センター派遣）

井上弘保 今井脩二 浦上宗一 太田清明 尾崎満子 吉川潤朗 栗山幸子 小林 紘

定兼清明 佐野友則 清水浩介 平田耕三 山下恵美子 山下 勝 横山昭三

遺物整理作業員（社団法人浅口市シルバー人材センター派遣）

桜木富喜子

第3節 日誌抄

日誌抄

平成20年4月4日（金）下草刈り

平成20年4月11日（金）調査前地形測量

平成20年4月25日（金）重機による表土掘削

平成20年4月28日（月）発掘資材搬入

平成20年4月30日（水）発掘調査開始

平成20年5月1日（木）古墳時代以降の遺構検出作業

平成20年5月20日（火）古墳時代以降の遺構面調査終了、弥生時代遺構検出作業

平成20年6月19日（木）浅口市立寄島中学校職場体験

平成20年7月12日（土）現地説明会（参加者：61名）

平成20年7月15日（火）航空写真撮影

平成20年7月16日（水）弥生時代遺構面調査終了

平成20年7月17日（木）発掘資材撤収

平成20年7月29日（火）重機による埋め戻し、調査終了

第1表 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（第93条）

岡山県文書番号	日付	種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	目的	主体者	期間	処理の内容・理由
教文理 第115号 H20.4.21		集落跡 竹林寺天文台遺跡	浅口市鴨方町本庄3037.5 及び小田郡矢掛町南山田 2808-27	700	その他の建物 (天文台)	大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 機構長 志村令郎	H20.4.25 ～ H20.7.29	発掘調査

発掘調査の報告（第99条）

文書番号	日付	周知・周知外	種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	原因	包蔵地の有無	主体者	担当者	期間
浅教国 第55号 H20.4.24		周知	集落跡 竹林寺天文台遺跡	浅口市鴨方町本庄3037.5 及び小田郡矢掛町南山田 2808-27	700	その他の建物 (天文台)	有	浅口市教育委員会 教育長 工藤進	水田貴士 三浦幸章 藤原範子	H20.4.25 ～ H20.7.29

遺物発見通知（第100条）

岡山県文書番号	日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保有場所
教文理 第614号 H20.7.30		弥生土器、須恵器、石製品、 金柄簪、土製品 計整理箱8箱	浅口市鴨方町本庄3037.5 竹林寺天文台遺跡	H20.4.25 H20.7.29	浅口市教育委員会 教育長 工藤進	浅口市鴨方町六条院中3050 浅口市長 田主智彦	浅口市教育委員会
教文理 第615号 H20.7.30		弥生土器、須恵器、石製品、 金柄簪、土製品 計整理箱9箱	小田郡矢掛町南山田 2808-27 竹林寺天文台遺跡	H20.4.25 ～ H20.7.29	浅口市教育委員会 教育長 工藤進	小田郡矢掛町矢掛3018 矢掛町長 山野通彦	浅口市教育委員会



写真1 現地説明会の様子

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査の概要

1 調査前の状況

竹林寺天文台遺跡は、標高約380mの竹林寺山から東側へ派生する尾根上に立地する。天文台遺跡という名称のとおり遺跡の大部分が国立天文台岡山天体物理観測所の敷地内に位置する。竹林寺天文台遺跡は、今回の発掘調査により現在3基のドームが設置された標高約360～370mの丘陵頂部平坦地（西側）と今回発掘調査を実施した標高約340mの丘陵頂部平坦地（東側）を中心に遺跡が拡がるものと思われる。

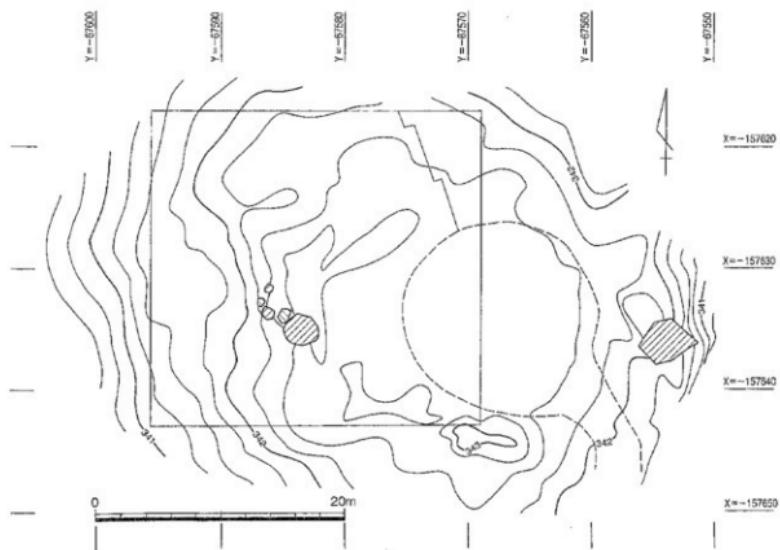
昭和30年代の天文台建設に伴う造成工事により大規模な地形変化を受けていると考えられる。昭和41年に西側の丘陵南端に位置する65cmクーテ型太陽望遠鏡ドームの建設工事中に弥生土器・石鎚・石包丁等が出土している。また、同時に箱式石棺も不時発見されている。平成15年度に行われた確認調査ではこの場所の北側隣接地で円形を呈する竪穴住居が検出されている。現在は西側と東側は駐車場建設により地形的に断絶しているが、天文台建設以前の地図では西側頂部平坦地から東側へ急斜面となり鞍部を通じて東側頂部平坦地の西側緩斜面へ連なっている。また、当調査地点は昭和30年代の西側造成工事と同時期に頂部の造成工事が実施され、この段階で頂部は大部分が削平を受けているとみられる。頂部には巨大な岩が複数露出している状況である。頂部の円形を呈しているものは観測装置設置に伴うコンクリート造成である。発掘調査着手以前には、調査区内の北側及び西側で地形的に窪む箇所を2箇所確認し、また、調査区内の西側緩斜面では多くの弥生土器を表探すことができた。



第5図 国立天文台岡山天体物理観測所建設以前の地形（1/10,000）



第6図 現在の地形と調査地点 (1/10,000)



第7図 調査地点の調査前地形測量図 (1/400)

2 調査の概要

竹林寺天文台遺跡の当調査区は、標高343mを最高所とする東西70m、南北90mの丘陵頂部に位置する。この丘陵頂部約700 m²の全面調査を実施した。調査区は、丘陵頂部の北側及び西側に延びる緩斜面地が対象となった。頂部は造成工事時の削平により平坦面が広がりをみせる。周辺山麓の水田との比高差は、浅口市鴨方町本庄側で約290m、矢掛町南山田側で約300mを測る。

平成17年度の試掘調査では、75 m²の調査面積で、弥生時代後期の土壙6基・溝3条を確認している。遺物では弥生時代後期の土器やサスカイト製の石器が出土している。

発掘調査は、梅雨時期が從来よりも早く、また山上の天気は変化しやすいことから天候には悩まされた。また、包含層掘削作業時には、硬質な覆土と樹痕の除去に困難を極めた。しかし、時折みせる瀬戸内海の絶景は、作業によって蓄積された疲労の回復へと繋がった。

調査の結果、弥生時代後期の集落跡・古墳時代以降の遺構を検出した。弥生時代後期は丘陵頂部周辺までに遺構が及び、竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・数基の柱穴を検出している。古墳時代以降は頂部の削平の影響を受けているとみられるが、調査区の中央部から西側で土壙墓・土壙・溝・数基の柱穴を検出している。

特に弥生時代後期の遺構は調査区の広範囲にわたっており、丘陵頂部全体が弥生時代後期の集落遺跡であることが判明した。今回の調査や踏査の状況等から同丘陵全域に弥生時代の遺跡の広がりが想定される。

弥生時代の後期の遺構相互では、顕著な切り合い関係をもっておらず、丘陵上の地形利用に一定の規制が存在するようであると考えられる。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1 概要

弥生時代の遺構は本遺跡において遺構数が最も多く、その配置は調査区全体で認められた。今回の調査で確認した弥生時代の遺構は、円形の竪穴住居5軒・掘立柱建物2棟・土壙21基・溝3条・数基の柱穴である。弥生時代の竪穴住居・掘立柱建物の遺構は、強固な岩盤を掘削して構築されている。

竪穴住居は調査区北側と西側に配置される。北側の竪穴住居は標高342m前後の等高線に平行する。2軒分が重複しており、切り合い関係から竪穴住居の規模が縮小しているものとみられる。西側の竪穴住居は標高341.5m前後の等高線に平行する。3軒分が重複しており、切り合い関係から規模が拡張しているものとみられる。掘立柱建物は北側と南側に配置される。北側の掘立柱建物は、標高342.25m前後の頂部平坦地に築かれ、竪穴住居と隣接する。南側の掘立柱建物は、標高341.5m前後の西側斜面地に築かれている。土壙は、丘陵頂部から西側緩斜面にかけて調査区内に散在している。また、袋状土壙は未確認である。柱穴の中には柱痕跡が確認できるものもあったが、掘立柱建物を構成するものではない。調査区中央部の自然露岩周辺の調査では、調査着手以前から岩磐を想定していた。慎重に精査を行ったが、弥生土器や石錐が出土するに留まった。結果、この露岩は弥生時代当時からの風景の一部であると考えられる。

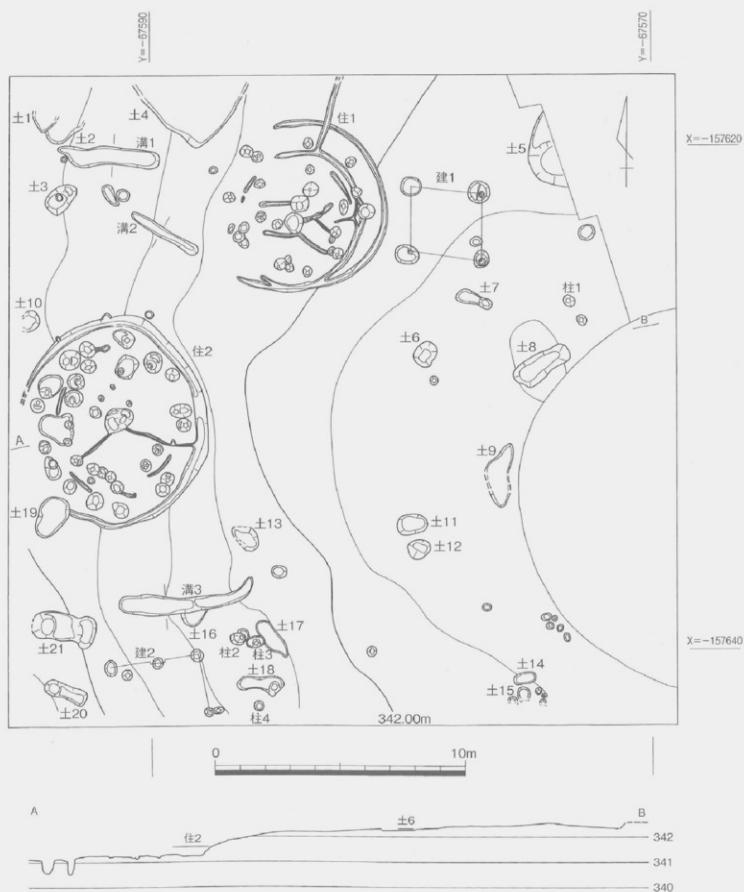
出土遺物は、弥生土器のほか土錐・土玉・土製勾玉・石錐・石斧・石包丁・石錐・石錐等の石器、鉈とみられる鐵器などがある。弥生土器の多くは赤色顔料で塗布されたものである。



写真2 作業風景



写真3 排水作業



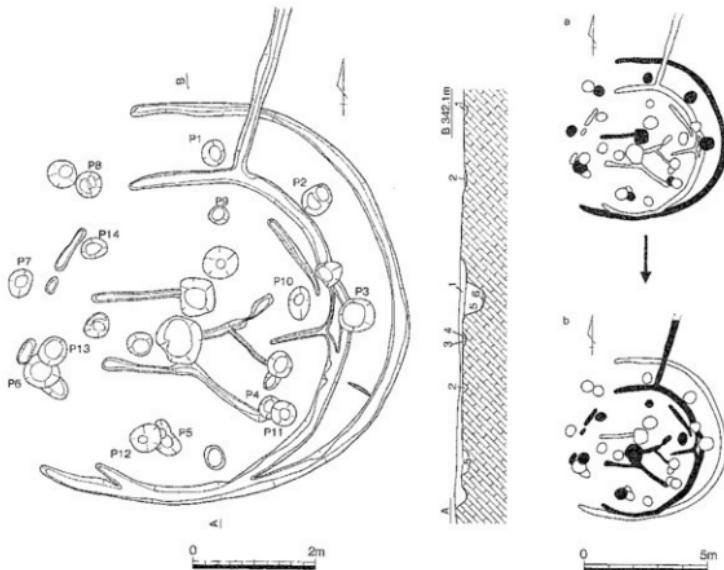
第8図 弥生時代の遺構全体と地形断面図 (1/200)

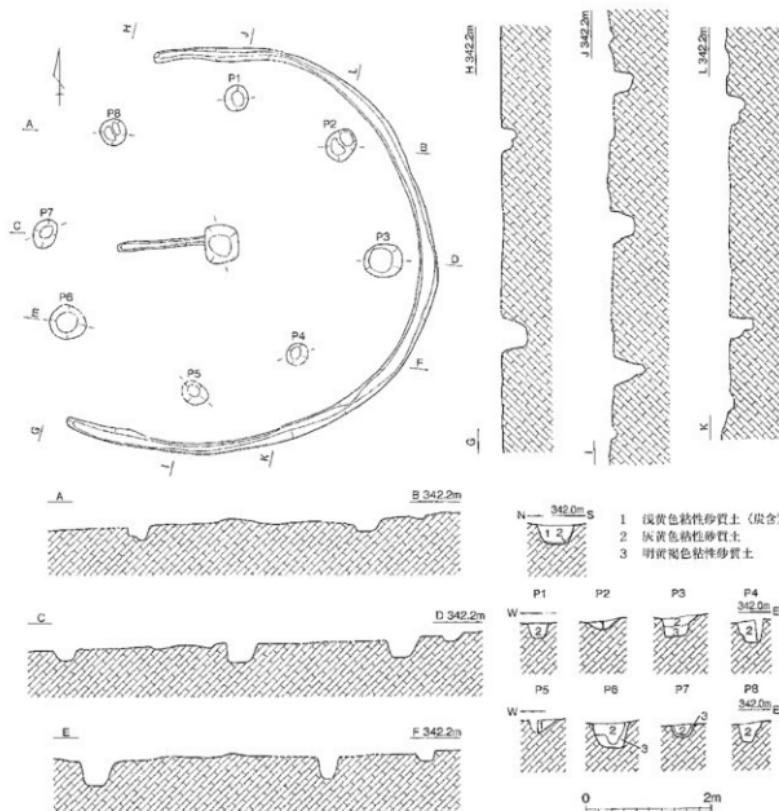
2 堪穴住居

堪穴住居 1 a (第8~15図、巻頭図版 3-1、図版 2~5)

調査区北側、掘立柱建物 1 の西約 1 m に位置し、西側の緩斜面上に立地する。尾根線上の緩斜面上部を掘削し、低位部を埋め立てて床面を整形したものと考えられる。堪穴住居 2 と床面で標高差は約 70 cm を測る。斜面下方に当たる部分は流失しており、全体像は明らかではない。検出した遺構は、壁体溝が 2 条、柱穴 25 本、溝数条を確認した。検出した遺構からみて、2 軒分の堪穴住居が考えられた。

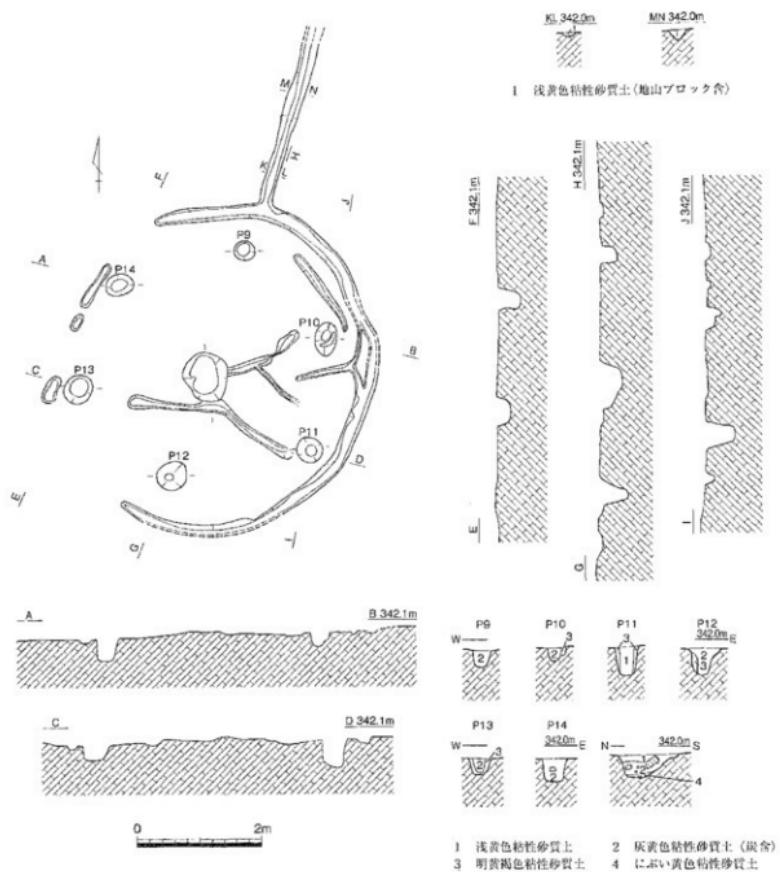
堪穴住居 1 a の規模は長軸約 660 cm、短軸 650 cm を測り、円形を呈していたと思われる。溝内の床面積は約 34.19 m² を測る。埋土は、炭を多く含有する灰黄褐色粘性砂質土である。壁体溝は現状で上幅 16~25 cm、下幅 9~13 cm、検出面からの深さは 6~20 cm を測る。堪穴住居の中央部分には、長軸 64 cm、短軸 55 cm、床面からの深さ 31 cm を測る土壙がある。埋土は 2 層に分層でき、第 1 層は浅黄色粘性砂質土に炭粒を多く含み、第 2 層は灰黄色粘性砂質土が堆積している。主柱穴の中心に配置されることから、土壙は中央穴と考えられる。また、中央穴から西側へ延びる溝 1 条を検出している。検出した長さは 140 cm、規模は上幅 15 cm、下幅 7 cm、検出面からの深さは 9 cm を測る。埋土は地山ブロックが混入する浅黄色粘性砂質土である。柱穴は P 1~P 8 の 8 本を検出した。柱穴の掘り方はい





第10図 積穴住居 1a (1/80)

ずれも円形を呈し、直径39～60cm、検出面からの深さは20～41cmを測る。柱間はP1-P2で190cm、P2-P3で200cm、P3-P4で205cm、P4-P5で180cm、P5-P6で230cm、P6-P7で155cm、P7-P8で200cm、P8-P1で205cmを測る。遺物は、後述する積穴住居1bに削平されたいためにほとんどなく、壁体溝や柱穴から弥生土器の壺4、高杯23・25が出土している。他にも柱穴から弥生土器の小片やサヌカイト剥片総重量4gが出土している。壺4は口縁端部を欠いている。外面はタテ方向のハケメ、内面はユビオサエを施す。外面には煤がみられる。高杯23は北東部から出土している。口縁部が杯部から上方に拡張し、口径は18.8cmを測る。高杯25は脚部端部を肥厚させ、2条の凹線文を施し、底径12.2cmを測る。胎土中に角閃石が多く含有され、内外面に赤色顔料を塗布している。本積穴住居の時期は後述する積穴住居1bよりは古く、出土遺物から弥生時代の後期前葉に位置づけられる。

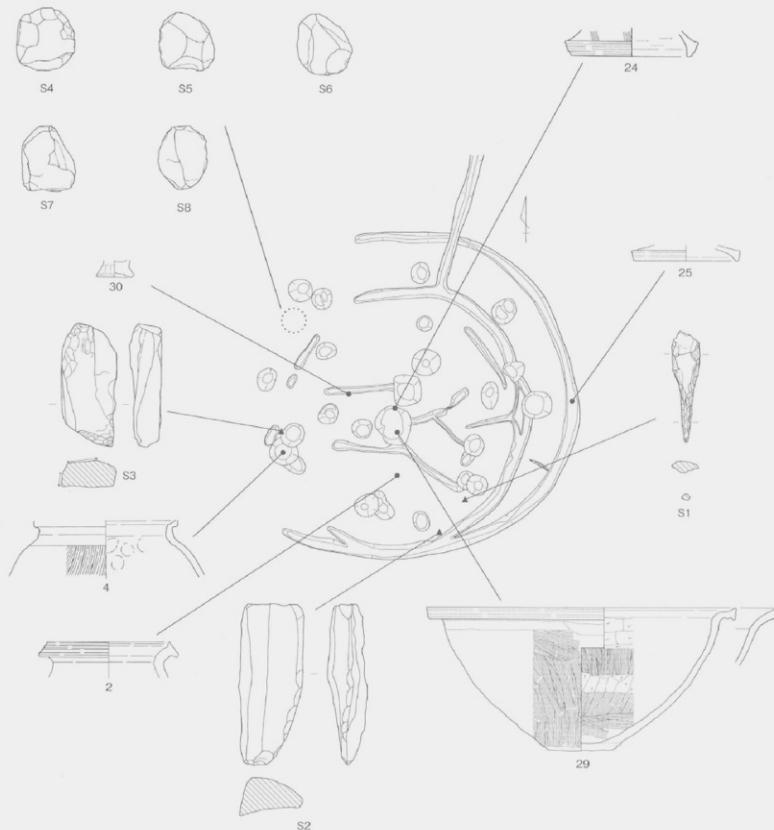


第11図 壁穴住居 1 b (1/80)

壁穴住居 1 b (第9・11図、巻頭図版3~1、図版2~5)

調査区北側、掘立柱建物1の西約2mに位置し、西側の緩斜面上に位置し、壁穴住居1aを切っている。また、壁穴住居1aと同様に尾根線上の緩斜面上部を掘削し、低位部を埋め立てて床面を整形したものと考えられる。斜面下方に当たる大部分は流失しており、全体像は明らかではない。西側の下方部において断続的に壁体溝を検出している。

壁穴住居1bの規模は長軸約540cm、短軸485cmを測り、円形を呈していたと思われる。検出面から床面までの深さは10cm、溝内の床面積は22.89m²を測る。床面の海拔高は341.8mであり、貼り床は認められなかった。埋土は炭を多く含有する灰黄褐色粘性砂質土である。壁体溝は現状で上幅2~

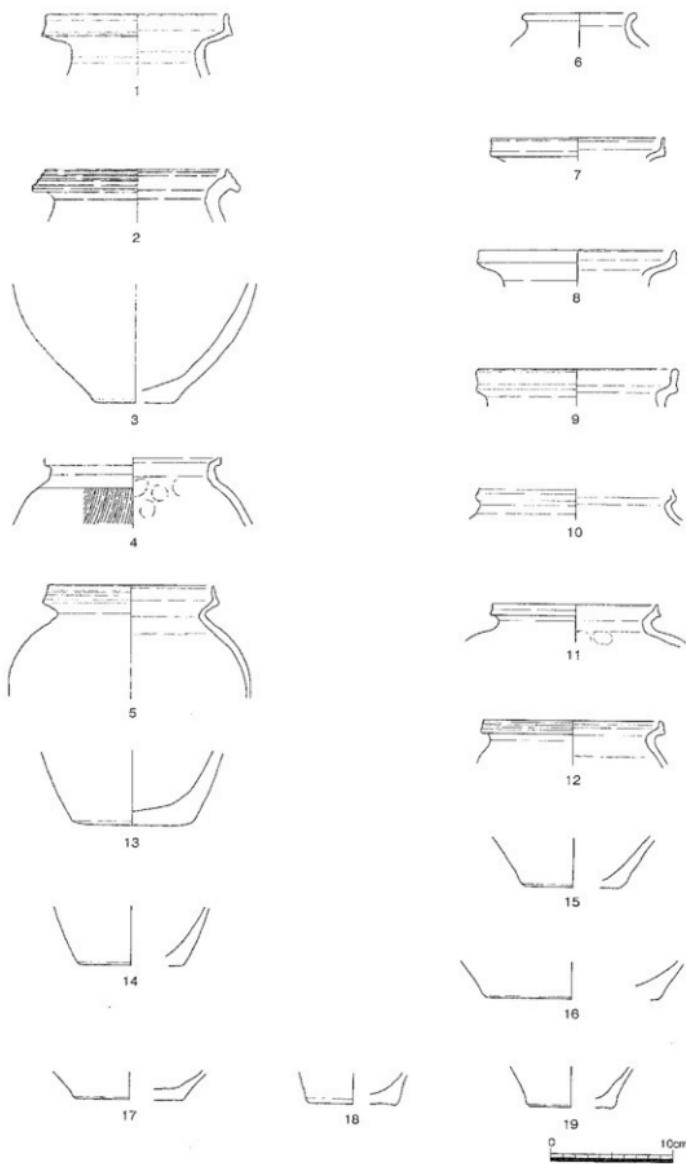


第12図 積穴住居1遺物出土状況 (1/100・1/4・1/6)

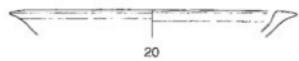
26 cm、下幅13～17 cm、検出面からの深さは8～13 cmを測る。南東側の壁体溝の底面には溝条の掘り窪みがみられる。積穴住居の中央部分には、長軸83 cm、短軸73 cm、検出面からの深さ36 cmを測る土壙がある。埋土は3層に分層でき、第1層は浅黄色粘性砂質土、第2層は灰黄色粘性砂質土に炭粒が多く含み、第3層はにぶい黄色粘性砂質土が堆積している。主柱穴の中心に配置されることから、土壙は



写真4 中央穴 作業風景



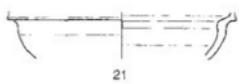
第13図 積穴住居1出土遺物① (1 / 4)



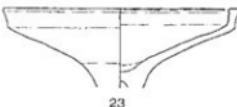
20



22



21



23



24



26



25



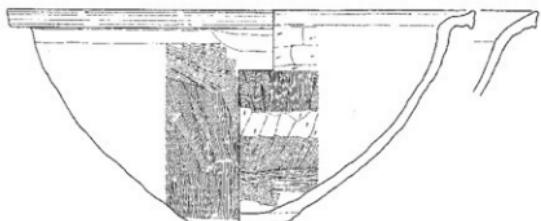
27



28

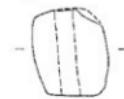


30



29

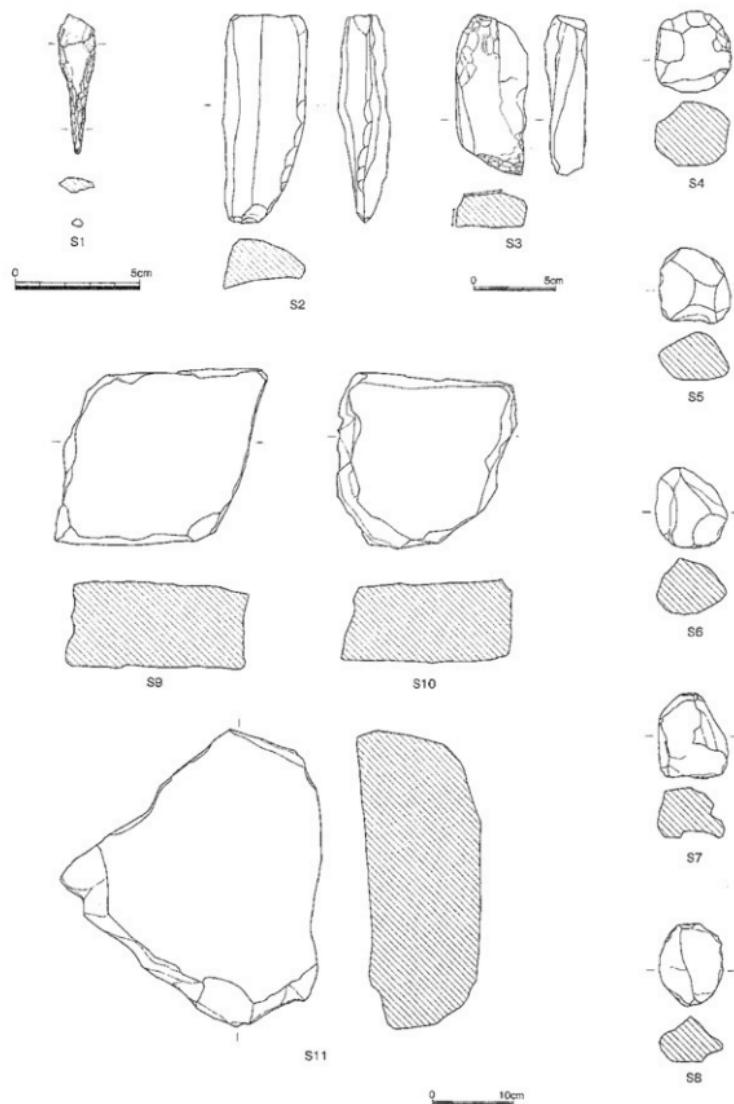
0 10cm



C1

0 6cm

第14図 積穴住居1出土遺物② (1/4・1/3)



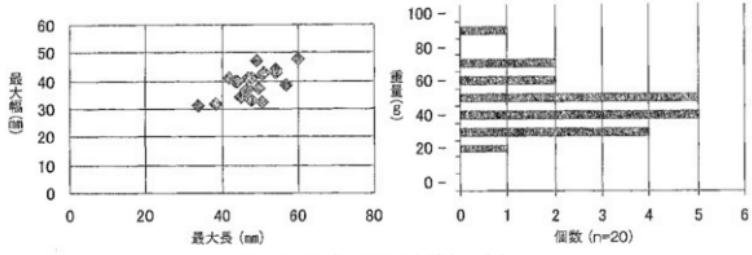
第15図 整穴住居1出土遺物③ (1/2・1/3・1/6)

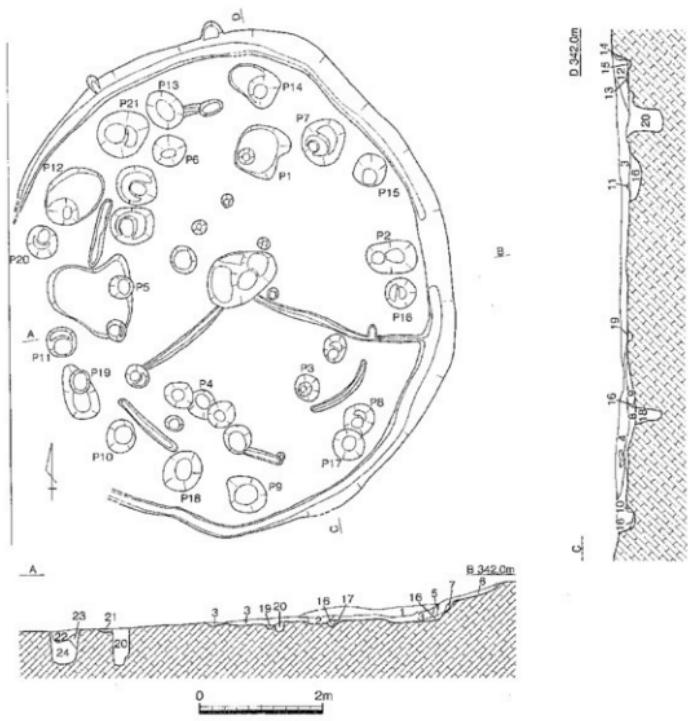
中央穴と考えられる。また、中央穴から東側へ延びる溝1条を検出している。検出した長さは190cm、規模は上幅20cm、下幅8cm、検出面からの深さは5cmを測る。堅穴住居1aと同様の構造であるが、性格は不明である。柱穴はP9～P14の6本を検出した。柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径21～25cm、検出面からの深さは21～47cmを測る。柱間はP9～P10で190cm、P10～P11で190cm、P11～P12で235cm、P12～P13で210cm、P13～P14で180cm、P14～P9で210cmを測る。住居の北側で壁体溝から北東側へ延びる排水溝を検出した。検出した長さは270cm、規模は上幅27cm、下幅10cm、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は地山ブロックが混入する浅黄色粘性砂質土が堆積している。排水溝が位置する場所は、地形的には平坦な箇所であり、本来なら西側の緩斜面地へ流走するのが妥当だと考えられる。排水溝の底面海拔高は整體溝側で341.8m、調査区段で341.73mを測る。整體溝内では4条の溝を検出している。埋土は地山ブロックが混入する浅黄色粘性砂質土が堆積している。北東側の壁体溝に併走する溝は、残存長150cm、上幅10cm、下幅5cm、検出面からの深さは10cmを測る。中央穴の南側の溝は、残存長約280cm、上幅14～16cm、下幅5～9cm、検出面からの深さは3cmを測る。先述した中央穴から延びる溝から派生する溝は、残存長85cm、上幅6cm、下幅5cm、検出面からの深さは5cmを測る。東側の溝は、二股に分かれ壁体溝に合流する。上幅11cm、下幅5cm、検出面からの深さは3cmを測る。北側へ取り付く溝は残存長65cm、上幅9cm、下幅4cm、検出面からの深さは4cmを測る。南側の溝は残存長40cm、上幅13cm、下幅5cm、検出面からの深さは8cmを測る。壁体溝の内側で4条の溝を検出したが、堅穴住居1aとの切り合い関係等とは考えにくく、性格は不明である。

遺物は、弥生土器の壺1～3、甕4～19、高杯20～26、器台27、鉢28・29、製塙土器30、土錐C1、S1石錐、石斧S2、砥石S3、投擲S4～8、台石S9～11が出土している。このほか、サヌカイト片は総重量5gが出土している。壺1は口縁端部が上方に拡張する。口径は14.5cmを測る。赤色顔料を塗布する土器である。壺2は口縁端部に凹線文を3条施す。内外面に赤色顔料を塗布する。壺3は底部であり、底径は6.2cmを測る。甕5は口縁部を上方へ拡張し、口縁端部には2条の凹線文を施す。口径は13.4cmを測る。甕6は口縁部を肥厚させて丸く納める。口径は9cmを測る。甕7～12は口縁端部を肥厚し、凹線文、沈線を施す。甕9・10は胎土中に角閃石を多く含有し、赤色顔料を塗布している。甕13～19の底部は平底で、体部外面最下部に指頭痕を施すことにより、底部を明瞭にしている。甕13・15は外面に黒斑がみられる。高杯20は口縁端部を外方に拡張する。高杯21は杯部から外方に屈曲し、端部を拡張する。井原市の高越遺跡や矢掛町の芋岡山遺跡で出土している形態に類似する。高杯22は杯部の下部にヘラガキ沈線を施す。高杯24は脚部端部を肥厚させ2条の凹線文、裡にヘラを深めに用いたタテの沈線を施す。底径は11.8cmを測る。26は高杯の脚柱部である。27は器台の脚端部であり、底径29cmを測る。高杯20～22・24・26・27は外面に赤色顔料が塗布されている。鉢28は口径30.0cmを測り、外面にヨコ方向のハケメを施す。鉢29の口縁部は僅かに張り出しが認められ、片口となる。外面調整は、下半はタテ方向のハケメ、上半はヨコ方向のハケメ、内面はヘラケズリの後にタテ方向のハケメを施す。口径38.6cmを測る。30は製塙土器の脚部である。脚部外面には指頭圧痕・指ナデ、脚端部は丸く成形が施されている。残存高は2.1cm、底径は4.4cmを測る。製塙土器はこの1点のみである。

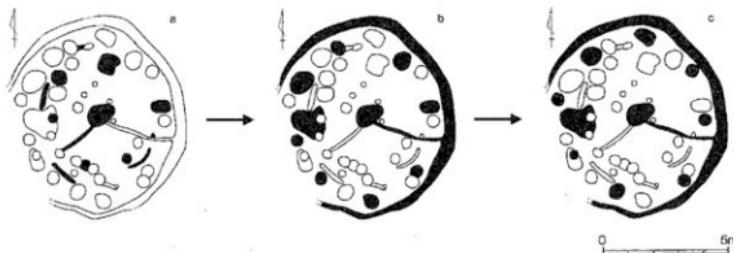
C1は円柱形を呈する管状土錐である。重さは87g、穿孔幅は1.1cmを測る。外面には、黒斑や破裂痕がみられる。S1は長さ55mm、幅14mm、厚さ6mm、重さ3gを測るサヌカイト製の石錐である。

S 2 は壁体溝の埋土中から出土した流紋岩製の石斧で、各部に敲打痕が顕著に残る。長さ127 mm、幅51 mm、厚さ31 mm、重さ239 gを測る。S 3 は長さ90 mm、幅43.5 mm、厚さ26 mm、重さ144.5 gを測る流紋岩製の砥石である。S 4～S 8 は竪穴住居の北西部の埋土中から出土した流紋岩製の円形標であり、投弾と考えている。出土状況は、まとまった状態で20個出土している。その内ここでは5個を掲載する。出土した石は表面が滑らかな面ではなく、凹凸が顕著である。大きさは長径33～60 mm、短径31～48 mmであり、重量は29～96 gを測り、この範囲で収まる。長径45～55 mm、短径35～45 mm、重さは40～50 gの範囲のものが全体の半数を占める。これらの結果から投弾は、大きさや重さ等が極めて類似したものが選択された可能性が考えられる。S 9～11 は竪穴住居 1 b の中央穴から出土している流紋岩製の台石である。S 9 は長さ21.6 cm、幅21.6 cm、厚さ10.5 cm、重量5.6 kgである。S 10 は長さ22.4 cm、幅21.2 cm、厚さ10.6 cm、重量6.8 kgである。S 11 は長さ36.6 cm、幅31.2 cm、厚さ15.2 cm、重量19.4 kgである。遺構の時期は、出土遺物等から弥生時代後期中葉～後葉に位置づけられる。

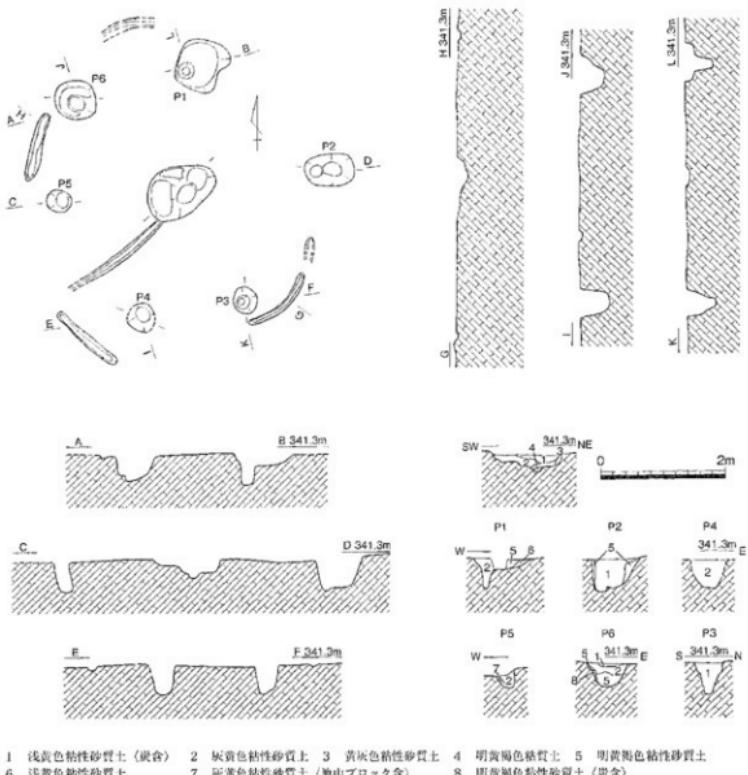




- | | | |
|-------------------|----------------------|---------------------|
| 1 にせい黄色粘性砂質土(炭化) | 2 淡黄色粘性砂質土 | 3 灰黄色粘性砂質土(炭化) |
| 4 淡黄色粘性砂質土(炭化) | 5 淡黄色粘性砂質土(地山ブロック含) | 6 淡黄色粘性砂質土(地山ブロック含) |
| 7 灰黄色粘性砂質土 | 8 淡黄色粘性砂質土(地山ブロック含) | 9 明黄色粘性砂質土(地山ブロック含) |
| 10 明黄色粘性砂質土 | 11 灰黄色粘性砂質土(地山ブロック含) | 12 淡黄色粘性砂質土(選多く含) |
| 13 にせい黄色粘性砂質土(炭化) | 14 淡黄色粘性砂質土(地山ブロック含) | 15 淡黄色粘性砂質土 |
| 16 明黄色粘性砂質土 | 17 淡黄色粘性砂質土 | 16 黄色粘性砂質土 |
| 19 灰黄色粘性砂質土(炭化) | 20 淡黄色粘性砂質土(地山ブロック含) | 18 淡黄色粘性砂質土 |
| 22 にせい黄色粘性砂質土 | 23 明黄色粘性砂質土(炭化) | 21 淡黄色粘性砂質土 |
| 24 | 24 灰黄色粘性砂質土 | 22 灰黄色粘性砂質土 |



第16図 深穴住居2 (1/80)・深穴住居2の変遷 (1/200)



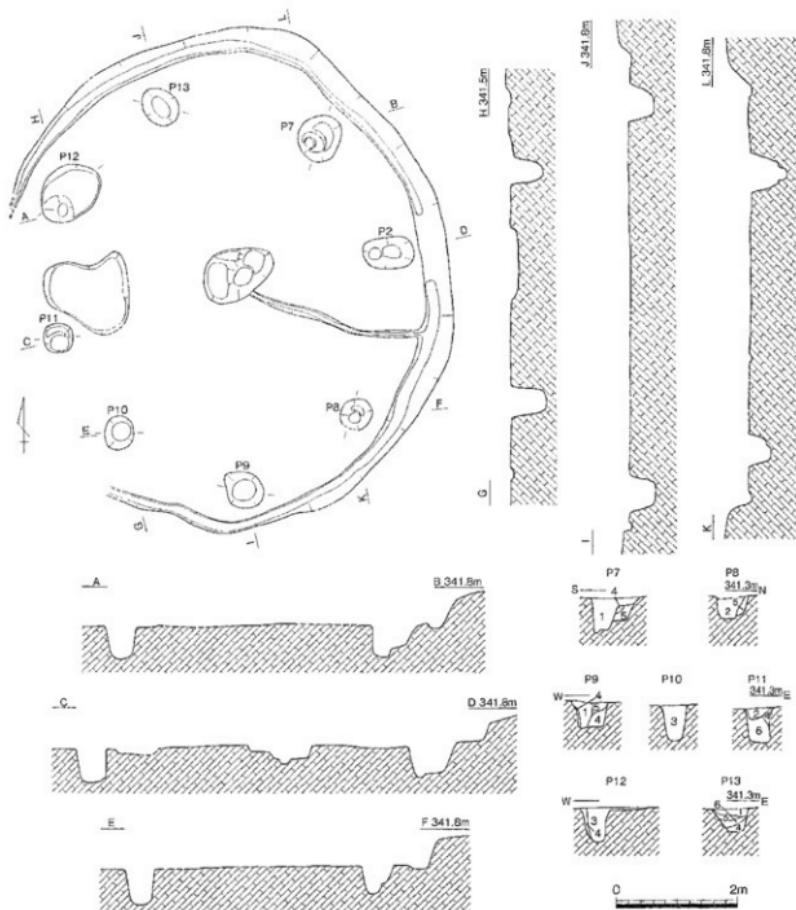
第17図 壇穴住居2a (1/80)

柱根跡が確認でき、直徑約15 cmの材を使用していたとみられる。柱間はP 1 - P 2で270 cm、P 2 - P 3で245 cm、P 3 - P 4で165 cm、P 4 - P 5で225 cm、P 5 - P 6で160 cm、P 6 - P 1で185 cmを測る。

遺物は、P 5からサスカイト片が出土している。

壇穴住居2b (第8・16~24図・巻頭図版3-2・図版5~8)

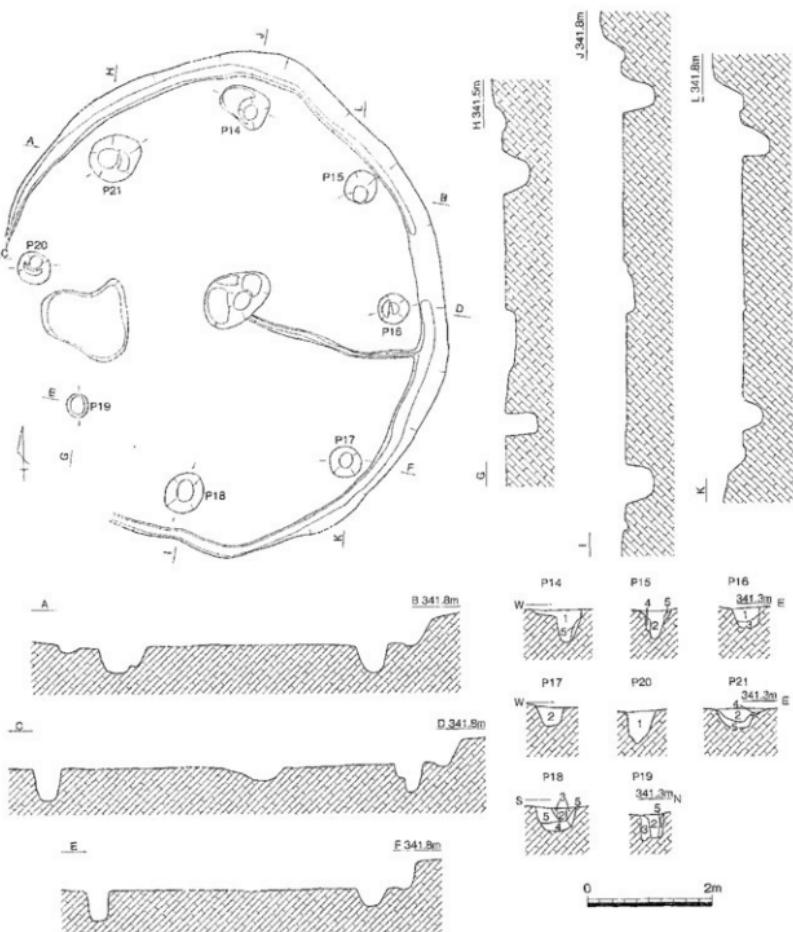
壇穴住居2bの規模は、長軸800 cm、短軸約700 cmを測り、円形を呈する。西側の一部は、調査区外へ続く。先述したが、壇穴住居2aからは規則的に拡張している。東側では断面形態は床面からやや外方に斜面地上部の基盤層をL字形に掘削しており、検出面から床面までの深さは64 cmを測る。東側の斜面地上部で住居と併行するように巡るテラスを検出した。テラスの幅は65~80 cmを測り、東側の壁際部分が広くなっている。内側に向かって傾斜しており、住居に伴うものと判断する。溝内の床面積は約50.24 m²を測る。床面の海拔高は314.19mであり、床面の貼り床はみられなかった。中



1 浅黄色粘性砂質土（炭合） 2 にじむい黄色粘性砂質土（炭合） 3 灰色粘性砂質土（混合） 4 明黄色粘性砂質土
5 浅黄色粘性砂質土（地山ブロック合） 6 反黄色粘性砂質土

第18図 穫穴住居2b (1/80)

中央穴から東側の壁体溝へ延びる溝1条を検出しており、前段階の2aの溝とは方向が異なる。このことから中央穴を再度使用していると考えられる。検出した長さは287cm、規模は上幅16cm、下幅7cm、検出面からの深さは5cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土である。底面の海拔高は東側の壁体溝側で341.22m、西側の中央穴側で341.08mと14cmの差が生じている。柱穴はP2・P7～P13の8本を検出した。柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径47～72cm、検出面からの深さは37～58cmを測る。P7・8・9・12は直径約10～13cmの柱痕跡が確認できる。柱間はP7～

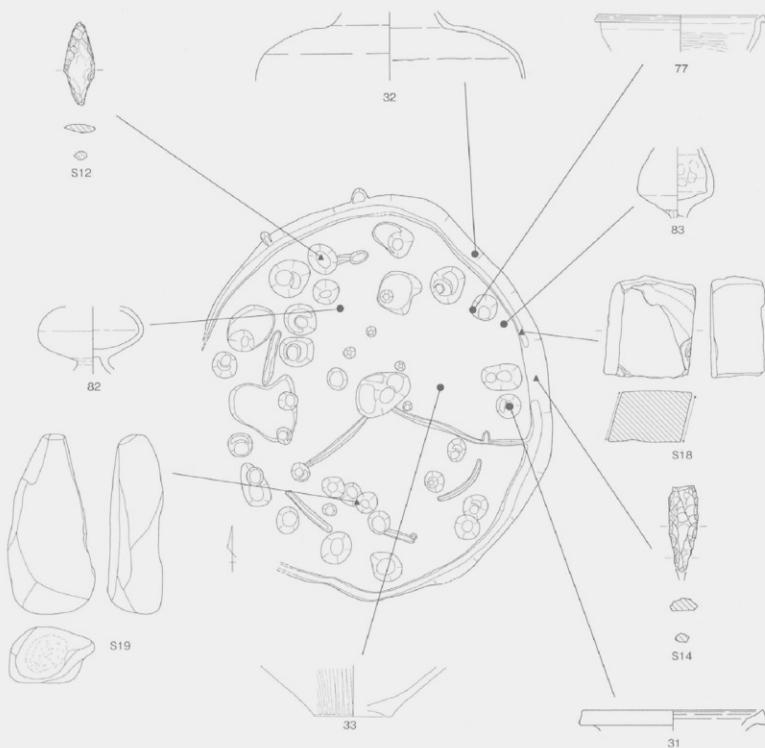


1 浅黄色粘性砂質土(炭化) 2 灰黄色粘性砂質土(炭化) 3 灰黄色粘性砂質土(地山ブロック含)
4 灰黄色粘性砂質土(地山ブロック含) 5 明黄褐色粘性砂質土

第19図 堪穴住居2c (1/80)

P 2 で220 cm、P 2-P 8 で275 cm、P 8-P 9 で215 cm、P 10-P 11 で230 cm、P 11-P 12 で220 cm、
P 12-P 13 で230 cm、P 13-P 7 で250 cmを測る。

遺物は、P 13からサスカイト製の石錐S 12やP 10からサスカイト片が出土している。石錐S 12は
凸基式で、長さ43.5 mm、幅46 mm、厚さ18 mm、重さ130.5 gを測る。



第20図 堪穴住居2遺物出土状況 (1/100・1/4・1/6)

堪穴住居2c (第8・16~24図・巻頭図版3-2・図版5~8)

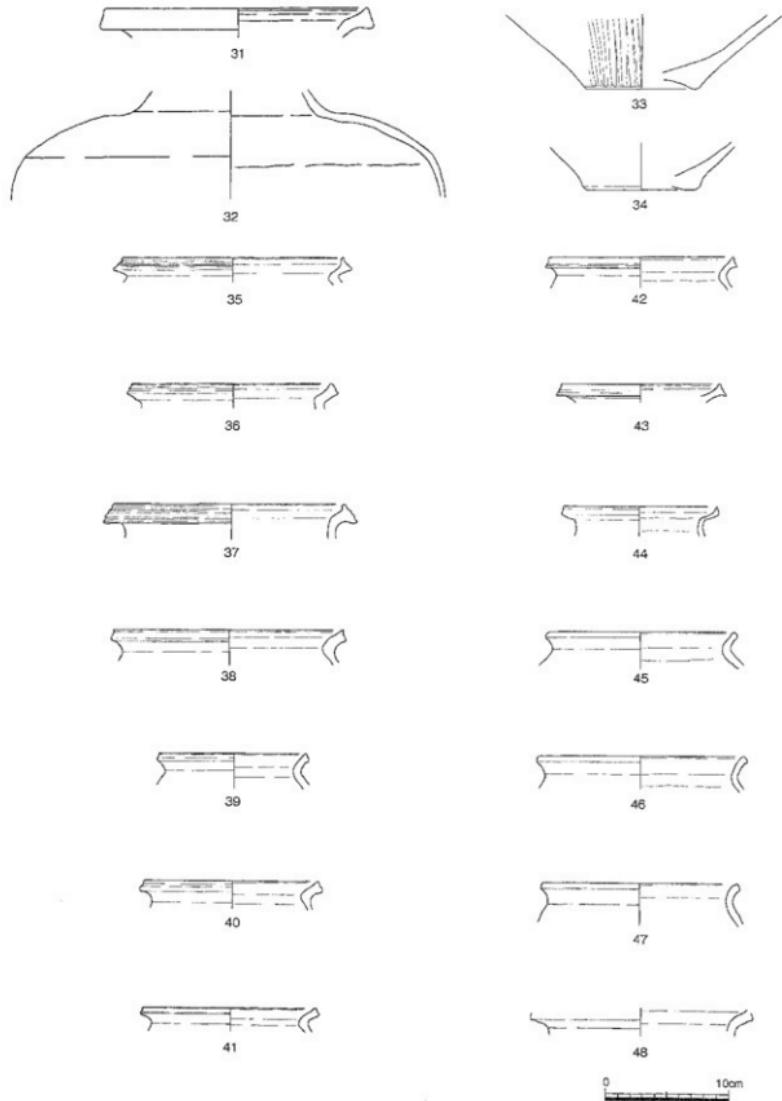
堪穴住居2cの規模は、堪穴住居2bと同規模の長軸800cm、短軸約700cmを測り、円形を呈する。柱穴は堪穴住居2bと同じく8本を検出しておらず、前段階から建て替えと考えられる。尾根線上の緩斜面上部を等高線に沿って掘削し、西側の低位部にあたる側壁は盛土造成で構築しているものとみられる。



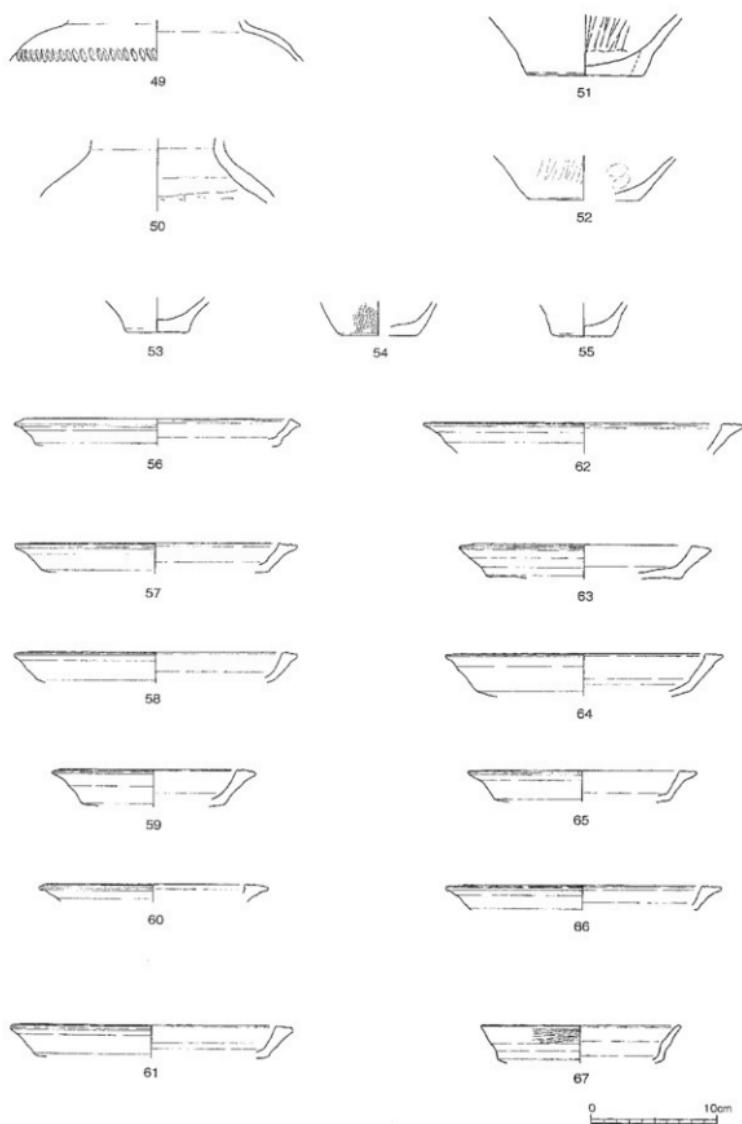
写真5 堪穴住居2 東側掘削部分



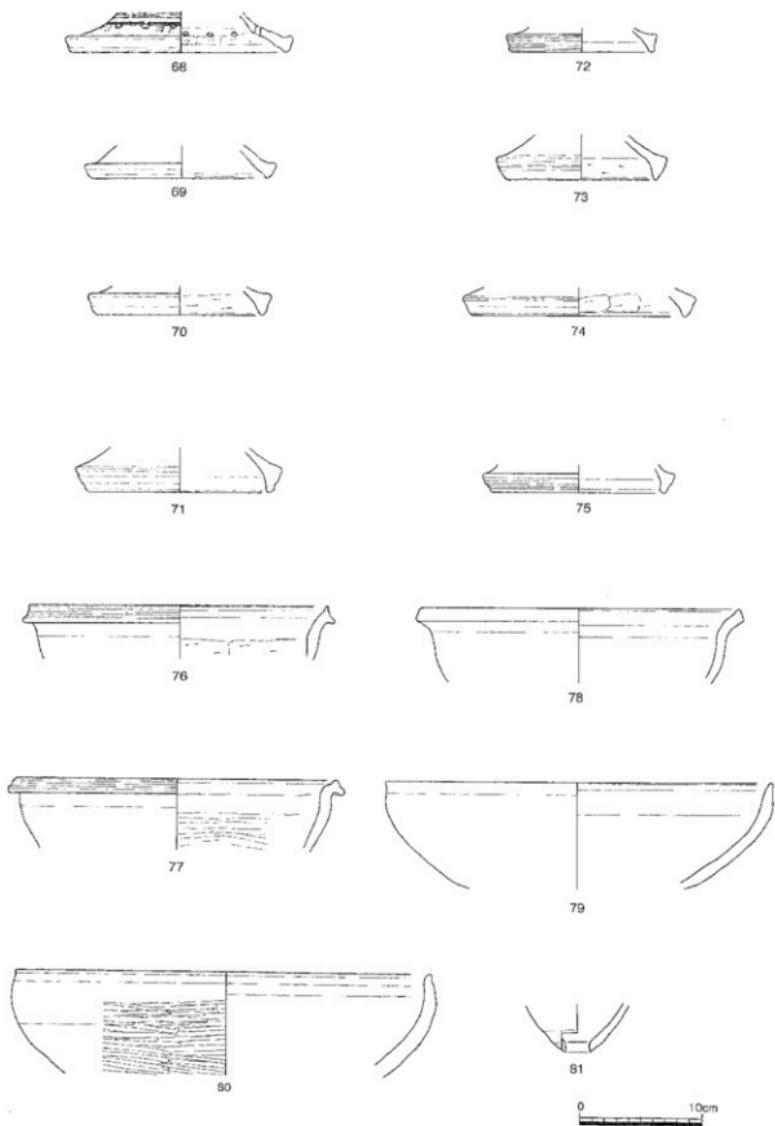
写真6 堪穴住居2 掘削の深さ



第21図 積穴住居2出土遺物① (1 / 4)



第22図 竪穴住居2出土遺物② (1 / 4)



第23図 穂穴住居2出土遺物③ (1 / 4)

南北トレーナーの観察から壁体溝の規模は上幅20～30 cm、下幅10～25 cm、検出面からの深さは7～12 cmを測る。また、東側では壁体溝の断絶がみられる。中央穴及び中央穴から壁体溝に付隨する溝はこの段階においても機能したものとみられる。柱穴はP14～P21の8本を検出した。柱穴の掘り方はいずれも円形を呈し、直径39～85 cm、検出面からの深さは30～80 cmを測る。P14・15・18・19は直径約11～14 cmの柱痕跡

が確認できる。柱間はP7-P2で220 cm、P2-P8で275 cm、P8-P9で215 cm、P10-P11で230 cm、P11-P12で220 cm、P12-P13で230 cm、P13-P7で250 cmを測る。

住居内の西側で土壌を検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸151 cm、短軸130 cm、検出面からの深さは17 cmを測る。埋土は炭粒を含む灰黄色粘性砂質土が1層堆積しており、サスカイト片が出土している。この遺構の掘り下げで、竪穴住居2aのP5を検出している。また、竪穴住居2aの壁体溝がこの土壌に切られており、竪穴住居2aよりは新しい時期に掘削されている。竪穴住居2bに伴うものと考えられるが性格は不明である。

竪穴住居の北側での壁体の2箇所で柱穴状の穴を検出した。西側の柱穴の規模は長軸30 cm、短軸17 cm、検出面からの深さは14 cm、海拔高は341.14 mを測る。東側の柱穴の規模は長軸32 cm、短軸25 cm、検出面からの深さは17 cm、海拔高は341.24 mを測る。柱間は西側と東側では210 cmを測る。

遺物は、弥生土器の壺31～34、甕35～55、高杯56～75、鉢76～81、台付直口壺82・83、ミニチュア土器84・85、鎧M1・2、土製勾玉C2、石錐S13、石錐S14、石斧S15・16、砥石S17・18、敲石S19・20が出土している。このほかサスカイト片は総重量90 gが出土している。

壺31はP16から出土している。口縁端部を肥厚し上方へ摘み上げ、ヨコナデによる条線が認められる。壺32の器面調整は剥離のため不詳である。また頸部には一部赤色顔料が残存している。壺33・34は底部である。33は外面にタテ方向のヘラミガキを施し、底径は9.4 cmを測る。甕は口縁端部の特徴から3分類できる。口縁端部を肥厚し、上方へ摘み上げ凹線文を施す35～37、上方へ摘み上げ沈線を施す38～44、口縁端部の拡張部が無い45～48がある。甕35は口縁端部に凹線文3条を施し、胎土中に角閃石を多く含有し、赤色顔料を塗布している。甕36は口縁端部に凹線文2条を施し、口径は16 cmを測る。甕37は口縁端部に凹線文3条を施している。甕41は内面上部までヘラケズリを施している。甕49の体部上半には工具による列点文が施される。甕50の内面はヨコ方向のヘラケズリが施されている。51～55は甕の底部である。甕51の断面では粘土紐の接合痕、外面には黒斑がみられる。底径は9 cmを測る。甕52の外面はタテ方向のヘラミガキが施されており、煤が付着している。甕54の外面はタテ方向のハケメが施されている。甕55は重厚な底部であり、底径は4.1 cmを測る。高杯56～66は杯部であり、口縁端部を肥厚させ拡張させているものである。高杯56は口縁部が外方に開き、端部を肥厚させヨコナデを施し、口径は21.7 cmを測る。調整は剥離により不明瞭である。高杯57は口縁端部を肥厚させ、凹線文3条を施す。高杯58は口径20.6 cmを測る。高杯59は口縁端部に凹



写真7 竪穴住居2 作業風景

線文2条を施す。口径は13.6 cmと小形である。高杯60は口縁端部に凹線文5条を施す。高杯61は口径20.2 cmを測る。高杯62は口縁端部に凹線文4条、内面にはヘラミガキを施す。口径は22.6 cmを測る。高杯67は口縁部が上方へ立ち上がるものであり、ヨコナデにより稜をもつ。口縁部外面にはヨコ方向のヘラミガキを施している。内外面には赤色顔料を塗布している。口径は15.8 cmを測る。68～75は高杯の脚部である。脚端部を肥厚し、凹線文及び沈線を施す。高杯68はヘラガキ沈線と裾にヘラを用いたタテの沈線で施し、円形透かしは内面に抜ける。高杯69・73・74は内面にヘラケズリを施す。高杯57～65・68～75は、胎土中に角閃石を含有し、内外面には赤色顔料を塗布している。鉢76～78は口縁端部を肥厚し、2条～3条の凹線文や沈線を施す。鉢76は口径24.2 cmを測り、内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。内外面に赤色顔料が残存し、口縁部外面の一部に黒斑がみられる。鉢77は口径26.4 cmを測り、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。内外面に赤色顔料が塗布されている。鉢78は口径25.8 cmを測る。鉢79・80は屈曲する頸部を持たないものである。鉢79は口径31.6 cmを測る。鉢80は口径34 cmを測り、外面はヨコ方向のヘラミガキを施している。外面には煤が顯著に付着を認められる。有孔鉢81は底部に径2 cmの穿孔があり、胎土は精良な粘土が使用されている。台付直口壺82は精製された粘土を使用作成されたものである。頸部は欠損しているが長く立ち上がる口縁部を有し、下部は低脚が付くとみられる。台付壺83は胴部が無くなり受部と口頸部が接合した形態を呈する。体部が強い算盤玉状を呈し、内面はユビオサエが顯著である。82とは胎土が異なり、精製された粘土ではない。84・85はミニチュア土器の底部であり、内面は押圧痕が顯著に残す。底径は1.5 cm、1.8 cmを測る。84の外側には黒斑がみられる。

M 1・2は鉈の先端部とみられる。M 1は長さ26 mm、幅8 mm、厚さ6 mm、重さ2.5 gを測る。M 2は長さ52 mm、幅23 mm、厚さ6 mm、重さ9.0 gを測る。

土製勾玉C 3は完形で重量は19 gを測る。中央の屈曲が大きく、上部に5 mmの穿孔が施される。

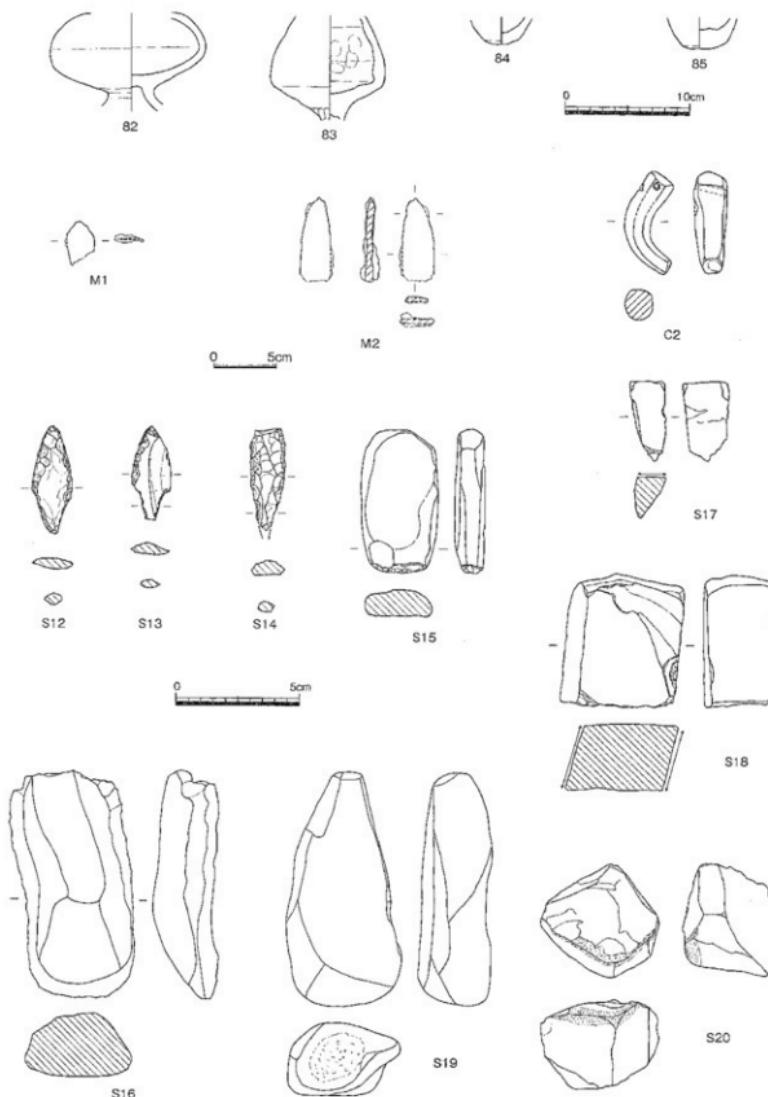
S 13は長さ38 mm、幅16 mm、厚さ5 mm、重さ2.5 gを測るサヌカイト製の有茎式の石鎌である。S 14は長さ40.5 mm、幅14 mm、厚さ5.5 mm、重さ3.5 gを測るサヌカイト製の石錐であり、先端部が折損している。S 15は長さ87 mm、幅46 mm、厚さ18 mm、重さ130.5 gを測る泥岩製の石斧であり、基部周辺に敲打痕がみられる。S 16は長さ139 mm、幅70 mm、厚さ38.5 mm、重さ477 gを測る流紋岩製の扁平片刃石斧である。S 17は長さ49 mm、幅21.5 mm、厚さ28 mm、重さ25 gを測る流紋岩製の砥石である。S 18は長さ81 mm、幅68.5 mm、厚さ43 mm、重さ444 gを測る泥岩製の砥石である。S 19は長さ143 mm、幅68 mm、厚さ44 mm、重さ545 gを測る砂岩製の敲石であり、基部周辺に敲打痕がみられる。S 20は長さ72 mm、幅63 mm、厚さ58 mm、重さ289 gを測る流紋岩製の敲石である。また、中央穴、P 15、P 21からはサヌカイト片が出土している。竪穴住居2から出土したサヌカイト片の総重量は91.5 gである。

また、埋土中からは炭化材が出土しており、放射性炭素年代測定では 1880 ± 40 年、樹種同定ではコナラ属アカガシ亜属という結果を得た。

時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉に構築され始め、後期後葉に廃絶したと位置づけられる。



写真8 サヌカイト剝片



第24図 窪穴住居2出土遺物④ (1/4・1/3・1/2)

3 挖立柱建物

掘立柱建物1（第8・25図、図版8-2・3）

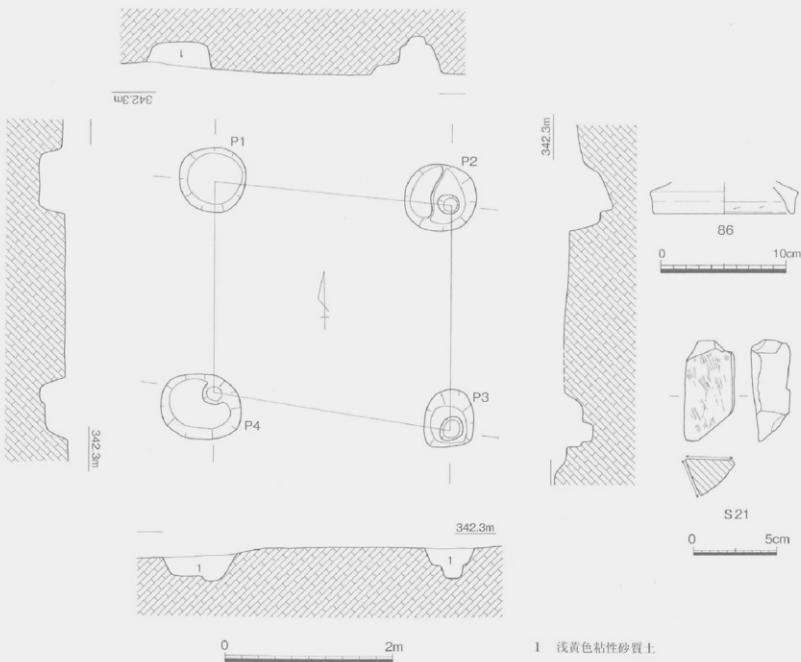
調査区の北東部、竪穴住居1の東1m、土壙5の南西2m、土壙7の北1mに位置する1×1間の掘立柱建物である。P2は平成17年度に実施された試掘調査の際に土壙として確認されていたものであるが、周辺に柱穴が認められ、柱としてまとめたため、掘立柱建物と認識した。

建物の規模は、桁部の柱間距離がP1-P2で283cm、P3-P4で285cm、梁部の柱間距離がP1-P4で252cm、P2-P3で269cmを測り、平面形は正方形に近い形を呈している。建坪は7.29 m²で、棟方向はN-1°-Wである。柱穴掘り方は、P1・P2は円形、P3はやや不整な楕円形、P4は楕円形を呈す。P1は径

80cm前後、検出面からの深さ30cmを測る。P2



写真9 堀立柱建物1 作業風景



第25図 掘立柱建物1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

は岩盤を掘削しており、径80cm前後、検出面からの深さ45cmを測る。P3は長軸70cm、短軸60cm、検出面からの深さ32cmを測る。P4は長軸96cm、短軸80cm、検出面からの深さ30cmを測る。P2～P4では柱痕跡を検出しており、25～30cmの柱材が使用されていたと考えられる。柱穴の底面はおよそ同じ標高である。また柱穴の埋土はいずれも浅黄色粘性砂質土の單層である。柱穴や柱間の距離ともに1×1間の掘立柱建物としては規模の大きな建物と言えるだろう。

遺物はP1・P2・P4から弥生上器の小片と砥石が出土している。S6・S21とともにP1からの出土である。S6は高杯の脚部であり、脚端部を肥厚し強いナデが施されている。内面にはヨコ方向のヘラケズリを施している。外面には赤色顔料が塗布されており、胎土は角閃石を多く含有する。特徴から弥生時代後期の範疇でとらえることができる。S21は最大長59mm、最大幅29.5mm、重さ42gの流紋岩質凝灰岩の砥石であり、多くの面に擦痕が認められる。今回の調査において流紋岩質凝灰岩が出土したのは、掘立柱建物1のみである。

出土遺物から、時期は弥生時代後期の範疇に位置づけられる。

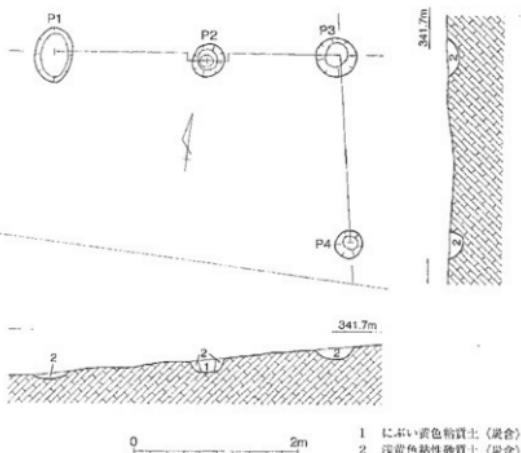
掘立柱建物2（第8・26図、図版9～1）

調査区の南西部、土壙20・21の東1m、溝3・土壙16の南1mに位置する2×1間以上の掘立柱建物である。調査区外の南側へとつづく可能性があるため、2×1間以上としておく。

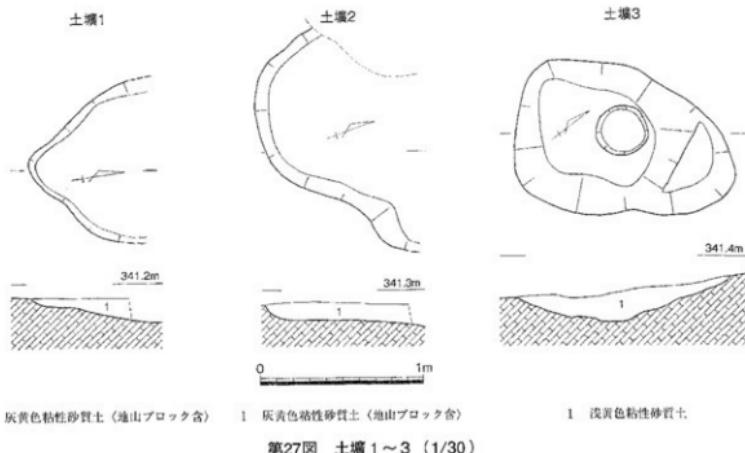
建物の規模は、桁行全長が345cm、柱間距離はP1-P2で181cm、P2-P3で164cm、梁部の柱間距離はP3-P4で230cmを測る。建坪は7.94 m²で、棟方向はN-82°-Wである。柱穴掘り方は、P1が楕円形、P2～P4は円形を呈している。P1は長軸70cm、短軸45cm、検出面からの深さ10cmを測る。P2は径40cm、検出面からの深さ15cmを測る。またP2では径15cmの柱痕跡が認められた。P3は径50cm前後、検出面からの深さ15cmを測る。P4は径30cm前後で、検出面からの深さ17cmを測る。柱穴の底面は西へ向かって低くなっている。柱穴の埋土はP2の柱痕部分がにぶい黄色粘土であり、その他は浅黄色粘性砂質土である。いずれの土層も炭を含有している。検出面からの深さが東から西へ向かって浅くなることから、後世に削平された可能性が考えられる。

出土遺物はP3・P4から弥生土器片が出土しているが、小片のため図化できるものではない。

出土遺物、堆土等から時期は弥生時代後期の範疇でとらえることができる。



第26図 掘立柱建物2 (1/60)



4 土壌

土壤1 (第8・27図)

調査区の北西隅、土壤2の西側に位置する。土壤2を切っている。平面形が不整な橢円形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸102cm、短軸70cm、検出面からの深さは15cmを測る。埋土は地山ブロックを含む灰黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壤2 (第8・27図)

調査区の北西隅、土壤1と溝1の間に位置する。土壤1に切られている。平面形は不整な橢円形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸103cm、短軸93cm、検出面からの深さは12cmを測る。埋土は地山ブロックを含む灰黄色粘性砂質土の単層である。

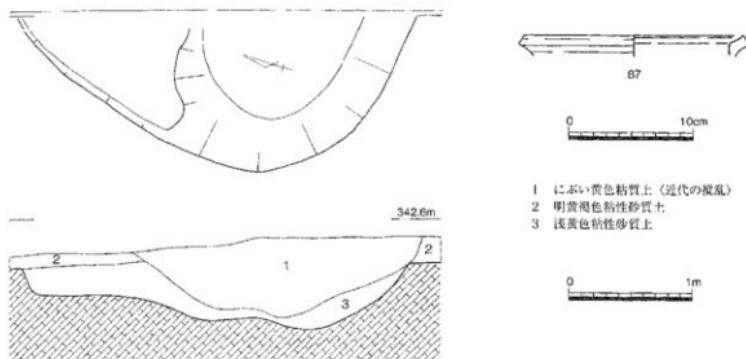
時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壤3 (第8・27図)

調査区の北西部、溝1の南0.7mに位置する。平面形は橢円形を呈しており、規模は長軸135cm、短軸94cmを測る。また断面形は段状を呈しており、3段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で19cmを測る。埋土は淡黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。





第29図 土壌5 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壤4 (第8・28図)

調査区の北西部、竪穴住居1の北西2.5mに位置する。北側は調査区の外へと延びる。平面形は不整形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸200cm、短軸105cm、検出面からの深さは9cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

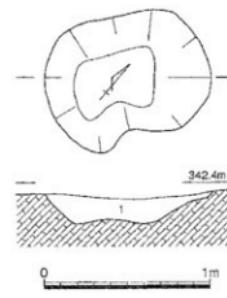
土壤5 (第8・29図)

調査区の北東部、掘立柱建物1の北東1.8mに位置する。東側は調査区の外へと延びるとみられる。平面形は楕円形を呈している。規模は現存長であるが、長軸302cm、短軸110cmを測る。断面形は段状を呈しており、2段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で74cmを測る。埋土は3層からなる。2・3層が弥生時代の土壤に伴う埋土であり、1層は近代の擾乱である。埋土は明黄褐色粘性砂質土と浅黄色粘性砂質土である。

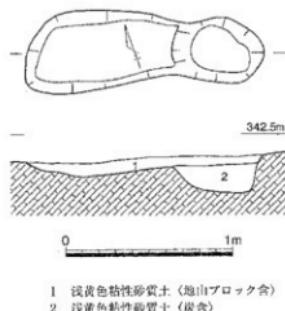
出土遺物は、弥生時代後期の土器が1点出土している。87は甕の口縁部であり、内外面ともにヨコナデで調整されている。内外面に赤色顔料が塗布されており、胎土は角閃石を含有する。

土壤6 (第8・30図)

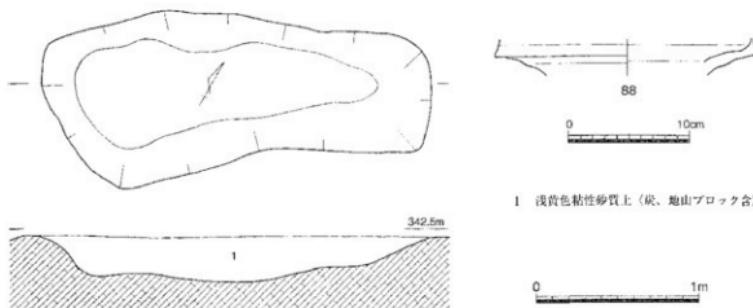
調査区の北東部、掘立柱建物1の南3.4m、土壤7の南西1.9mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈



第30図 土壌6 (1/30)



第31図 土壌7 (1/30)



第32図 土壌8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

している。規模は長軸100 cm、短軸82 cm、検出面からの深さは18 cmを測る。埋土は灰黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壌7 (第8・31図・図版9-2)

調査区の北東部、掘立柱建物1の南1 mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は長軸144 cm、短軸50 cmを測る。断面形は段状を呈しており、2段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で23 cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土と炭を含む浅黄色粘性砂質土からなり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壌8 (第8・32図・図版9-3)

調査区の北東部、土壌6の東3.4mに位置する。平面形は楕円形を呈しており、規模は長軸238 cm、短軸103 cm、検出面からの深さは21 cmを測る。埋土は炭粒と地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

遺物は、弥生土器が1点出土している。88は壺の口縁部であり、口縁端部は上方へつまみ上げられている。胎土は角閃石を含む。

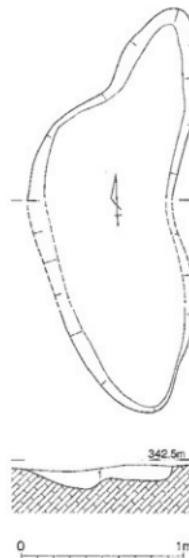
時期は弥生時代後期の範疇に位置づけられる。

土壌9 (第8・33図)

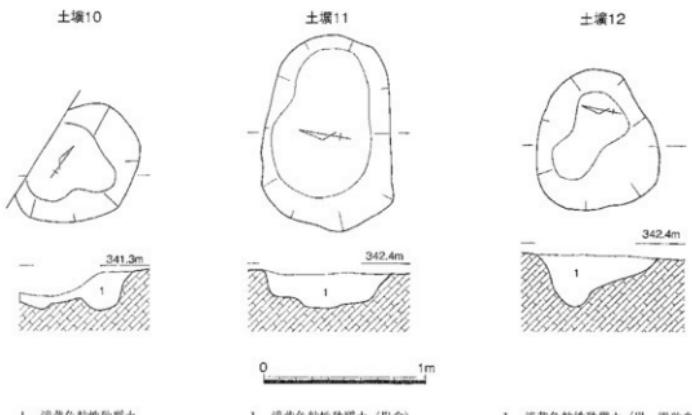
調査区の南東部に位置する。平面形は不整形を呈しており、南側が広く、北側が狭くなっている。規模は長軸249 cm、短軸91 cm、検出面からの深さは12 cmを測る。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壌10 (第8・34図)

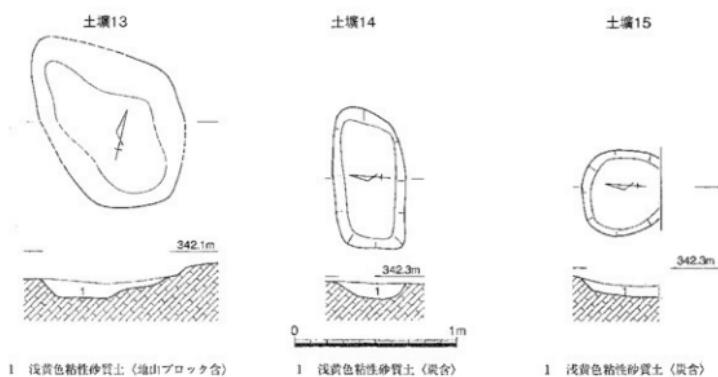
調査区の西側中央部、竪穴住居2の北0.9mに位置する。西側は調査区の外へと延びる。平面形は



第33図 土壌9 (1/30)



第34図 土壠10～12 (1/30)



第35図 土壠13～15 (1/30)

円形を呈しており、規模は現存長であるが、直径70cm、検出面からの深さは24cmを測る。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

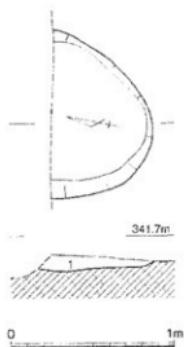
土壤11(第8・34図・図版10-1)

調査区の南東部、土壤12の北0.25mに位置する。平面形は梢円形を呈しており、規模は長軸120cm、短軸80cm、検出面からの深さは21cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

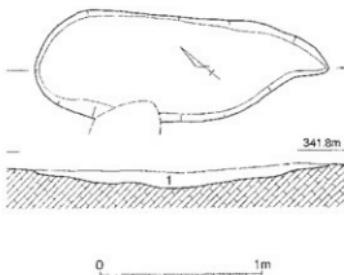
土壤12(第8・34図・図版10-2)

調査区の南東部、土壤11の南0.25mに位置する。平面形は不整な梢円形を呈しており、規模は長軸86cm、短軸74cm、検出面からの深さは32cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、



1 浅黄色粘性砂質土（地山ブロック含）

第36図 土壌16 (1/30)



1 浅黄色粘性砂質土（炭含）

第37図 土壌17 (1/30)

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壌13 (第8・35図)

調査区の南西部、溝3の北1mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈している。基盤層の岩盤を掘り込んでおり、北側はやや不明瞭である。規模は長軸125cm、短軸91cm、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壌14 (第8・35図・図版10-3)

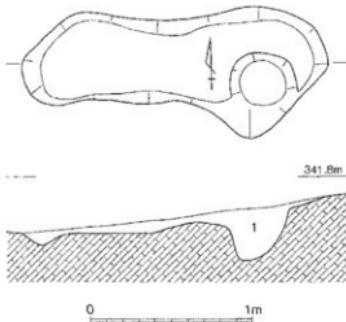
調査区の南東部、土壌15の北0.1mに位置する。平面形は楕円形を呈しており、規模は長軸81cm、短軸44cm、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壌15 (第8・35図)

調査区の南東部、土壌14の南0.1mに位置する。南側は調査区の外へと延びる。平面形は不整な円形を呈しており、規模は現存長であるが、長軸53cm、短軸48cm、検出面からの深さは8cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

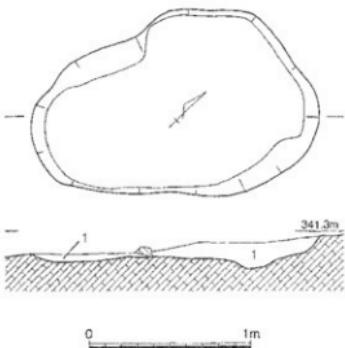
土壌16 (第8・36図)

調査区の南西部、掘立柱建物2の北0.85mに位置する。溝3に切られている。平面形は不整な円形を呈していたと考えられる。規模は現存長であるが、長軸105cm、短軸62cm、検出面からの深さは10cmである。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。



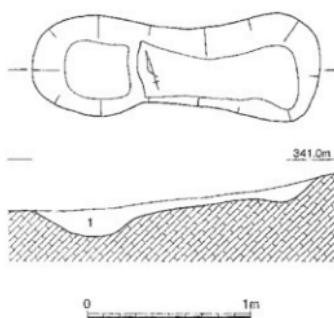
1 浅黄色粘性砂質土（炭、地山ブロック含）

第38図 土壌18 (1/30)



1 浅黄色粘性砂質土（埴山ブロック含）

第39図 土壌19 (1/30)



1 浅黄色粘性砂質土（埴山ブロック含）

第40図 土壌20 (1/30)

けられる。

土壤17（第8・37図）

調査区の南西部に位置する。柱穴3に切られている。平面形はやや不整な楕円形を呈しており、規模は長軸182cm、短軸65cm、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壤18

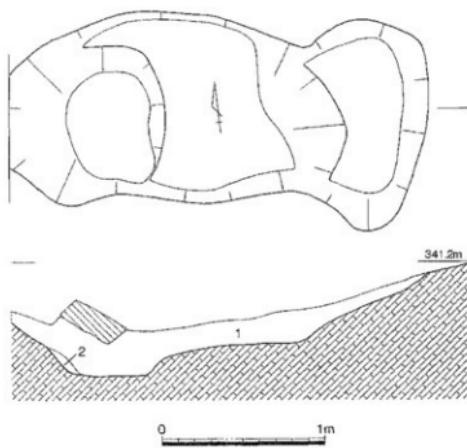
（第8・38図・図版11-1）

調査区の南西部、掘立柱建物2の東1.2m、土壤17の南1.1mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈しており、規模は長軸188cm、短軸81cmを測る。また断面形は段状を呈しており、2

段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で32cmを測る。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壤19（第8・39図）

調査区の南西部に位置する。竪穴住居2を切っている。平面形は楕円形を呈している。西側は基盤層の岩盤を掘り込んでいる。規模は長軸178cm、短軸114cm、検出面からの深さは16cmを測る。遺物

1 浅黄色粘性砂質土（含）
2 明黄褐色粘性砂質土（埴山ブロック含）

第41図 土壌21 (1/30)

は出土していないが、埋土が地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壤20（第8・40図・図版11-2）

調査区の南西隅、土壤21の南1.6m、掘立柱建物2の西1mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は長軸175cm、短軸66cmを測る。断面形は段状を呈しており、2段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で16cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

土壤21（第8・41図）

調査区の南西部、土壤20の北1.6m、掘立柱建物2の北西0.8mに位置する。西側は調査区の外へと延びる。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は残存長であるが、長軸256cm、短軸130cmを測る。また断面形は段状を呈しており、3段に掘り込まれている。検出面からの深さは最深部で28cmである。埋土は2層からなり、1層上面で50cm程度の礫を検出した。礫は自然石であり、加工痕、使用痕等は確認できなかった。埋土は炭を含む浅黄色粘性砂質土と明黄褐色粘性砂質土である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。

5 溝

溝1（第8・42図・図版11-3）

調査区の北西部、土壤2と土壤3の間に位置し、東から西へと流走する溝である。全長は4.1mであり、上端幅69cm、底面幅65cm、検出面からの深さは7cmを測る。埋土は地山ブロックを含む灰黄色粘性砂質土の単層であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

溝2（第8・42図）

調査区の北西部、竪穴住居2の北3.5mに位置し、南東から北西へと流走する溝である。溝の西側において一度途切れているが、一連の溝であると考えられる。

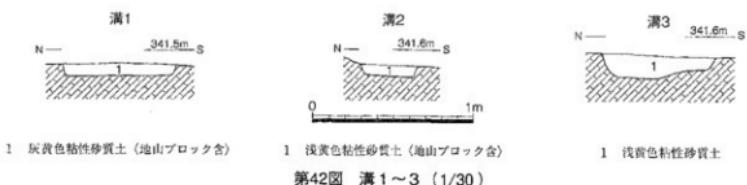
全長は3.9mであり、上端幅35cm、底面幅30cm、検出面からの深さは7cmを測る。埋土は地山ブロックを含む浅黄色粘性砂質土であり、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

溝3（第8・42図・図版12-1）

調査区の南西部、竪穴住居2の南2.8m、掘立柱建物2の北1.7mに位置し、東から西へと流走する溝であり、土壤16を切っている。東側の離部において、北へと渦曲する。

全長は5.5mであり、上端幅68cm、底面幅23cm、検出面からの深さは15cmを測る。溝の中央部において底面に段が存在し、西側が一段低くなる。埋土は浅黄色粘性砂質土の単層である。

時期は弥生時代後期に位置づけられる。竪穴住居2に付随する溝の可能性もある。



6 柱穴

柱穴1（第8・43図）

調査区の北東部、土壌8の北東1.5m、掘立柱建物1の南東4mに位置する。今回の調査において、標高の最も高い場所で検出した遺構である。また、この柱穴は平成17年度に実施された試掘調査の際に検出されていたものである。

平面形は円形を呈している。規模は長軸55cm、短軸42cm、検出面からの深さ28cmを測る。埋土は黄灰色粘性砂質土、地山ブロックを含む明黄褐色粘性砂質土、浅黄色粘性砂質土の3層からなり、第1層の黄灰色粘性砂質土は柱痕跡であると考えられる。柱痕跡の直径は約25cmである。

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期の範疇と考えられる。

柱穴2（第8・43図）

調査区の南西部、土壌16の南東1.3mに位置する。他の柱穴と切り合い関係にある。平面形は不整な円形を呈している。規模は長軸61cm、短軸48cm、検出面からの深さ45cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘性砂質土、浅黄色粘性砂質土、明黄褐色粘性砂質土の3層からなり、いずれの層も炭粒を含んでいる。

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期の範疇と考えられる。

柱穴3（第8・43図）

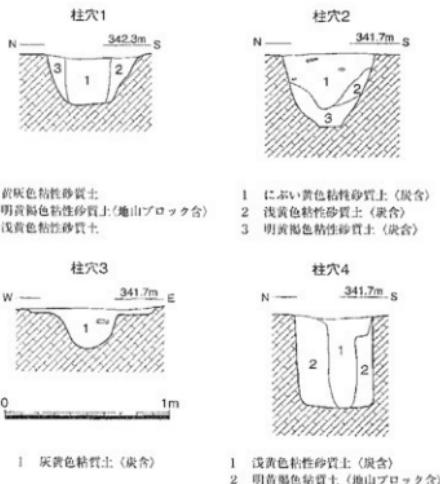
調査区の南西部、土壌18の北1mに位置し、土壌17を切っている。平面形は梢円形を呈している。規模は長軸78cm、短軸46cm、検出面からの深さは25cmを測る。検出面から4cmのところから深く掘りこまれており、断面形は段状を呈している。埋土は炭粒を多く含む灰黄色粘性砂質土の単層からなる。

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期のものと考えられる。

柱穴4（第8・43図）

調査区の南西部、土壌18の南0.6mに位置する。平面形は円形を呈している。規模は径40cm、検出面からの深さ56cmを測る。埋土は炭粒を多く含む浅黄色粘性砂質土と地山ブロックを含む明黄褐色粘性砂質土の2層からなり、浅黄色粘性砂質土は柱痕跡であると考えられる。柱痕跡の直径は上端約30cm、下端約10cmである。

遺物は出土していないが、埋土の色調等から弥生時代後期のものと考えられる。



第43図 柱穴1～4 (1/30)

7 遺構に伴わない遺物

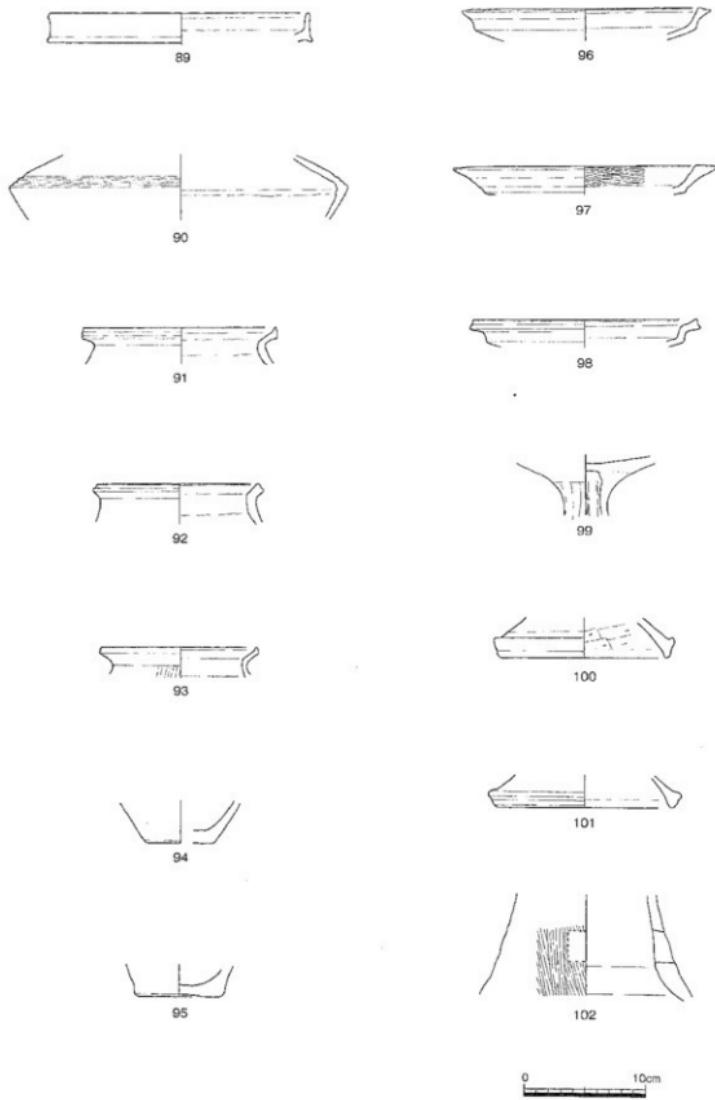
遺構に伴わない遺物（第44～49図、図版12・16）

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器を取り上げる。このようにして出土した土器の大半は弥生時代後期に属する遺物であり、遺跡の消長を反映している。ここでは当該期の遺物の中から、残存状況のよいもの、特徴的な要素がみられるものを中心に取り上げている。弥生土器89～102は調査区中央部の露岩周辺出土のものであり、これ以外は表土中及び遺構検出中出土のものである。壺89は口縁部を上方へ拡張する。90は算盤玉形を呈する胴部をもつ直口壺である。外面には3条の沈線を施す。91～95は甕である。甕91・93は口縁端部を上方へわずかに摘みあげ、沈線を施す。甕92は口径13.2cmを測る。甕93の外面にはタテ方向のハケメを施す。甕94・95は底部であり、95は底径2.6cmを測る。96～101は高杯である。高杯96は口縁部が外方に開き、端部を肥厚させる。高杯97は口縁端部を外方へ拡張し、四線文4条を施す。内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。高杯98は杯部から外方へ屈曲し、口縁端部を拡張し、沈線を施す。高杯99は脚柱部である。外面はタテ方向のナデ調整を施す。高杯100は脚端部を肥厚し、外方へ張り出す。内面はヘラケズリを施す。高杯101は脚端部を肥厚させ凹線文を施す。102は器台の脚柱部から脚部にかけての破片である。外面調整はタテ方向のハケメを施す。調整後に長方形の透かし孔が穿たれる。岩周辺部の包含層出土遺物は甕91～95以外は胎土中に角閃石を含み、外面には赤色顔料を塗布する土器である。103～109は壺である。103は口縁端部に沈線を施す。壺104は口径15.4cmを測る。壺105は口縁端部を上方へ摘み上げ、ヨコナデで成形をする。胎土には角閃石を含み、赤色顔料を塗布している。壺106は口縁端部を肥厚し、内面には赤色顔料が残着する。壺107は口縁端部を上方へわずかに摘み上げる。108は竪穴住居2の北側付近で出土した短い頸部をもつ甕である。口縁部から胴部上半部にかけて残存している。口縁端部は肥厚し、沈線を施す。調整は器壁の剥離が著しく不明瞭である。胎土中に角閃石は含有しないが、赤色顔料を塗布している。壺109は底部であり、外面はタテ方向のハケメ、内面はタテ方向のヘラケズリを施す。110～145は甕である。甕110～113は口縁端部を肥厚し、2～4条の凹線文を施す。甕111は外面にタテ方向のハケメを施す。甕113の外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。口径21.8cmを測る。甕114～118は口縁端部を上方へ摘み上げ、ヨコナデで凹部を成形する。甕114の内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。口径は16.2cmを測る。甕116の内面はヘラケズリを施す。甕119は口縁部を上方へ拡張する。口径は13cmを測る。甕120は口縁部を肥厚し、四線文2条を施す。甕121は口縁部を肥厚し、ヨコナデにより端部を成形する。甕122は口縁端部を上方へわずかに摘み上げる。内面は胴部上半までヨコ方向のヘラケズリを施している。口径は17cmを測る。甕123の口縁部は外方に短く直線的に延ばす形態をとる。甕126は口縁部を上方へ摘みあげ拡張し、内面はヘラケズリを施す。甕127は口径12.4cmを測り、短く外方に延びる形態をとり、逆「ハ」字形の肥厚した口縁端部をもつ。外面の調整は不明瞭であるが、内面は胴部上半までヘラケズリを施す。胎土は暗褐色を呈し、金雲母が顯著である。この土器は県南部での出土例は少なく、山陰地域の影響を受けた県北部の山間地域からの搬入品と考えられるものであり、これ1点のみである。甕128の断面は「く」の字状の形態を呈し、口縁端部の拡張がないものである。口径は14.4cmを測る。甕129の内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。外面には梢円形を呈する黒斑がみられる。130～145は甕の底部である。甕131の外面はタテ方向のハケメ、内面はナナメ方向のヘラケズリを

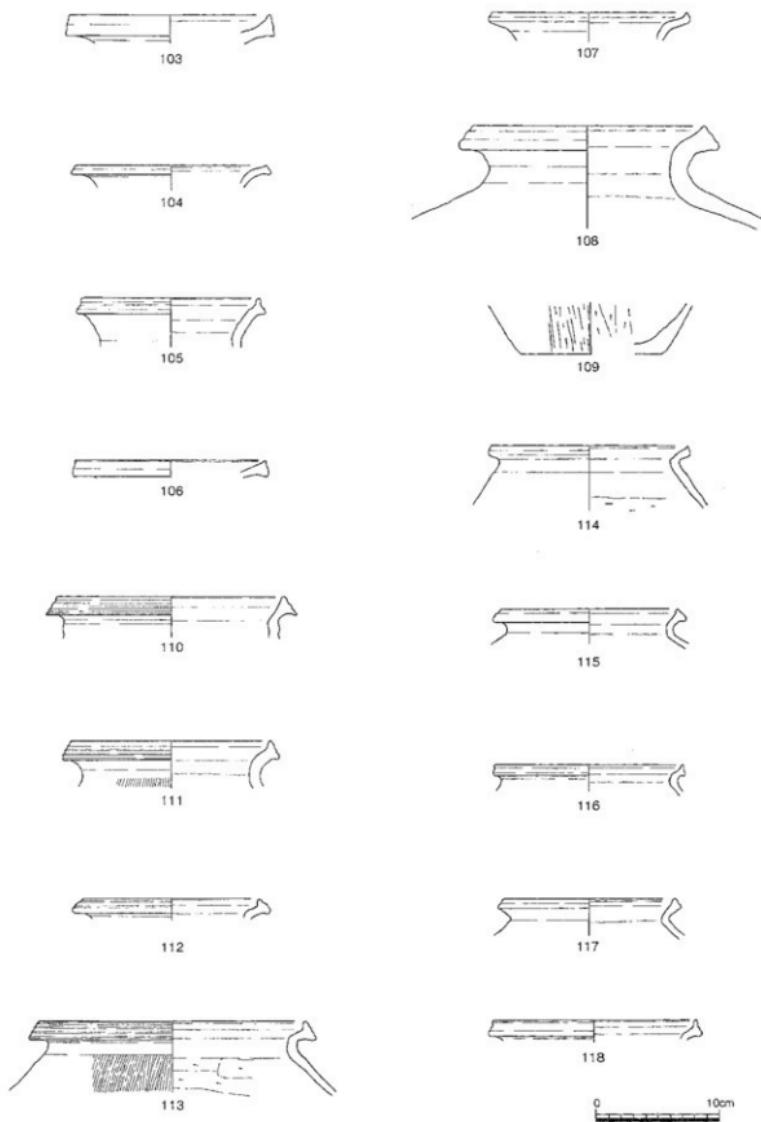
施す。甕132は底径5.5 cmを測る。外面はタテ方向のハケメを施し、外面には黒斑がみられる。甕135の外面はタテ方向のナデを施す。甕136の底径は5.2cmを測る。甕141・145は焼成後の穿孔がみられる。甕143外面には黒斑がみられる。甕144の内面はヘラケズリを施す。甕110～113・115・116・118・120・121・123・128・129・137・139は胎土中に角閃石を含み、内外面に赤色顔料の残着がみられる。146～165は高杯である。146～152は口縁端部を肥厚または拡張せるものである。高杯146は口縁端部を肥厚し、外面に凹線文を施文する。高杯152は口縁端部を外方へ拡張し、凹線文3条を施文する。内外面の調整はタテ方向のヘラミガキを施す。153～158は、杯部から脚柱部にかけてのものである。中には円盤充填が認められる。高杯159は脚柱部に櫛描きの沈線文を巡らす。高杯160は北側の調査区境で出土し、裾端部を内傾して肥厚させ、凹線文を施す。脚柱部の文様は螺旋の櫛描き沈線と裾にタテ方向の沈線を施文する。円形の透かし孔を4個もつが貫通はしていない。円盤充填が認められる。高杯161は裾端部が外方へ張り出し、円形の透かし孔は内面に抜ける。タテ方向の沈線を施す。高杯163は外面に櫛描沈線を施文する。内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。高杯164は、裾端部を肥厚し凹線文2条、脚柱部には櫛描き沈線を施文する。内面は脚柱部にヨコ方向のヘラミガキ、脚柱部にタテ方向のナデを施す。高杯165は裾端部を肥厚させる。高杯158以外は胎土に角閃石を含み、赤色顔料を塗布しているものである。166～168は鉢である。鉢166は口径18.8 cmを測る。内外面に赤色顔料がみられる。鉢167は口縁端部を肥厚させ、上方へ少し拡張をする。鉢168は口縁端部を肥厚し四部を形成する。内外面に赤色顔料が残着している。S 22は長さ36 mm、幅19 mm、厚さ4 mm、重さ3 gを測るサスカイト製の平基式の石鎌である。S 23は南側の調査区境で出土した粘板岩製の石包丁で長さ60 mm、幅35 mm、厚さ9 mm、重さ21.5 gを測る。他にも平成17年度の試掘調査ではサスカイト製の石包丁が出土している。S 24は長さ89.5 cm、幅39 cm、厚さ20 cmを測る安山岩製の蛤刃石斧である。S 25は用途不明石製品である。長さ79 mm、41 mm、厚さ9 mm、重さ32.5 gを測る。石材は粘板岩を使用しており、中央部側面の括れ部は両端に抉り調整を施し、一見左右対称となっている。表面・側面ともに丁寧な研磨調整が施されている。天地は不明であるが横軸の幅が大きい方を任意で天としている。形態的に類似するものでは、岡山市の百間川兼基遺跡大上田調査区土器溜り3出土の人物土製品が挙げられる。S 26・S 27は流紋岩製の石錘である。やや稍円形の円礫を使用し、繩掛け用の溝を施す。S 26は長さ41 mm、幅36.5 mm、厚さ31 mmを測る。S 27は半分が欠損した状態で出土している。残存長は、56.5 mm、残存幅43 mm、厚さ19 mm、重さ62 gを測る。S 28は花崗岩製の敲石であり、外周には敲打痕がみられる。長さは104 mm、幅81.5 mm、厚さ44 mm、重さ556 gを測る。S 29～31は砥石である。S 29は長さ59 mm、幅39 mm、厚さ25 mm、重さ86.5 gを測り、石材は泥岩である。S 30は長さ71 mm、幅31 mm、厚さ29 mm、重さ95 gを測り、石材は砂岩である。S 31は長さ104.5 mm、幅68 mm、厚さ28 mm、重さ250 gを測り、石材は泥岩である。C 3は球形の土玉で穿孔があり貫通している。表面には規則的な20個の刺突文を施しているが貫通はしていない。包含層のサスカイト片は総重量367.5 gを測る。



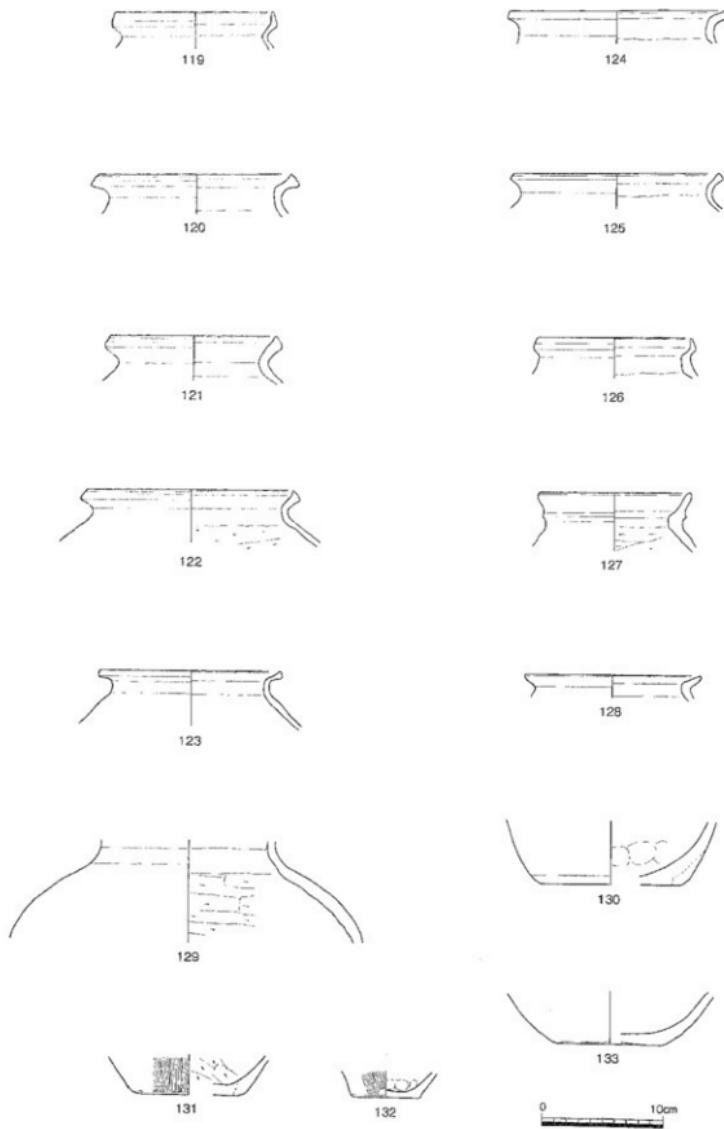
写真10 サスカイト剝片



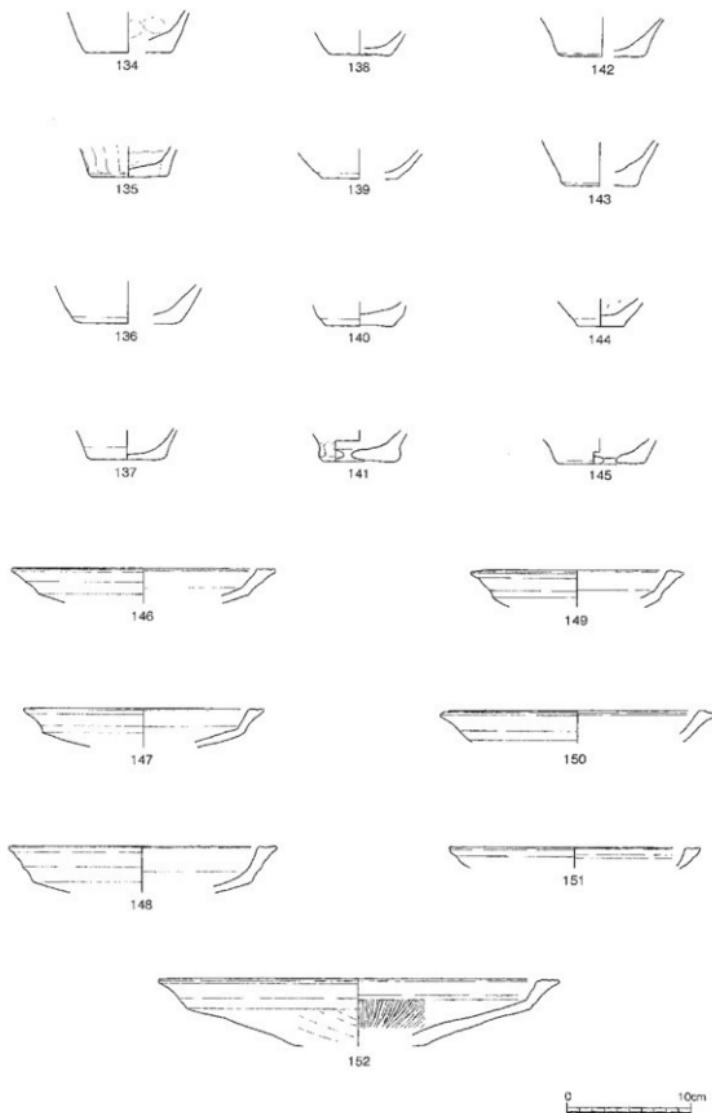
第44図 中央部岩周辺の出土遺物（1 / 4）



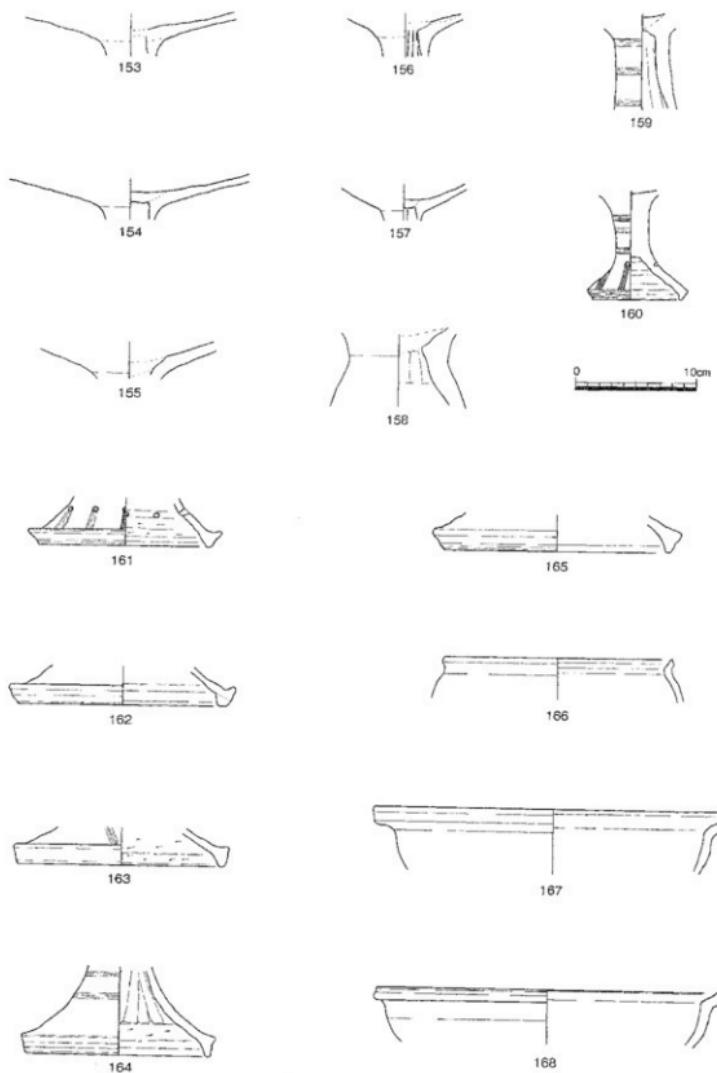
第45図 遺構に伴わない遺物① (1 / 4)



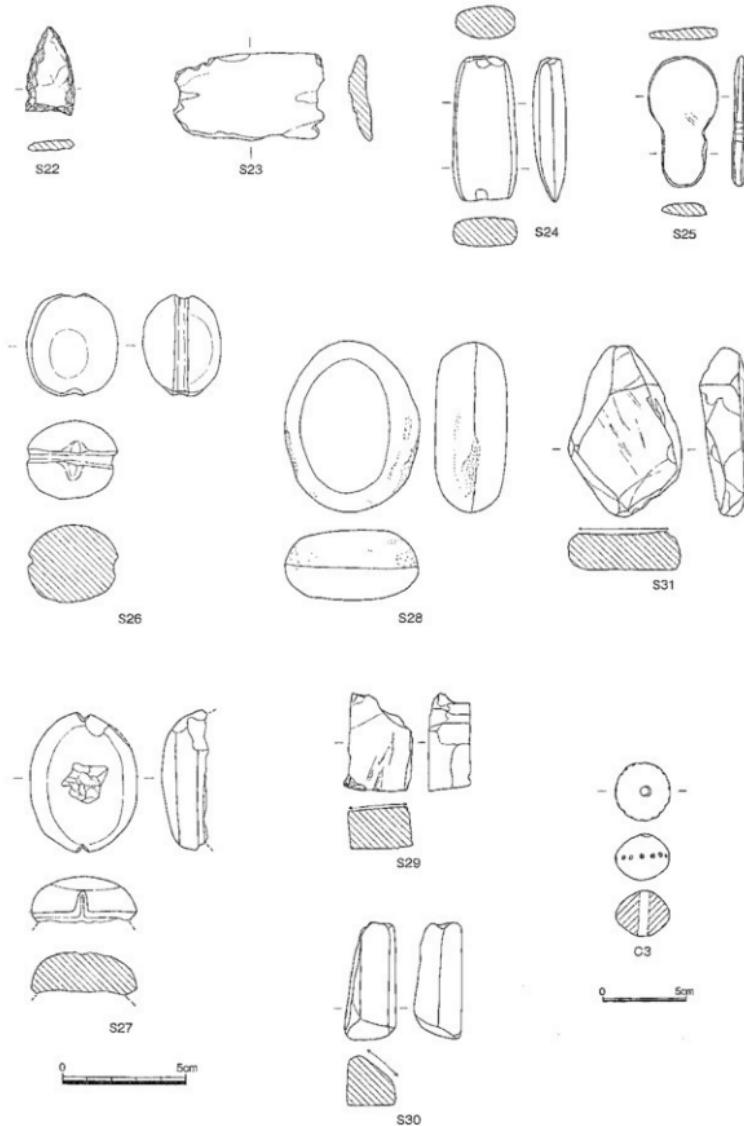
第46図 遺構に伴わない遺物② (1 / 4)



第47図 遺構に伴わない遺物③ (1 / 4)

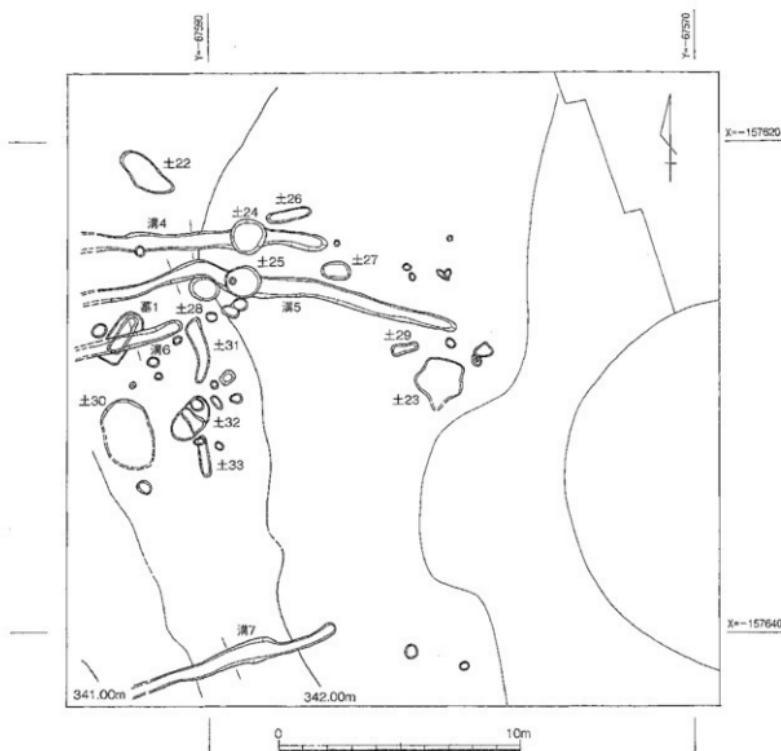


第48図 遺構に伴わない遺物④ (1 / 4)



第49図 遺構に伴わない遺物⑤ (1/2・1/3)

第3節 古墳時代以降の遺構と遺物



第50図 古墳時代以降の遺構全体図 (1/200)

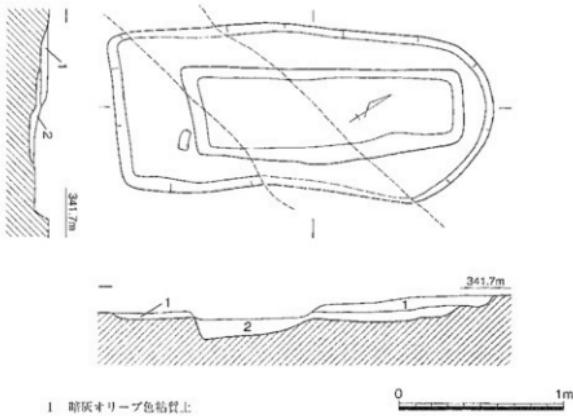
1 概要

表土層除去の後、検出した遺構である。古墳時代以降の遺構としては、土塙墓1基、土塙12基、溝4条及び柱穴である。標高342.5mの等高線よりも以下の西側緩斜面において遺構を検出している。先述したが、尾根頂部周辺で遺構が検出されない理由は、気象観測機器設置に伴うコンクリート造成や昭和30年代の造成工事の際に地形変更がなされているために遺構が削平を受けている可能性が考えられる。平成17年度の試掘調査では、古代の土器片が出土しているが当該期の遺構は検出されていない。検出した遺構では、弥生時代の包含層を掘削しており弥生土器やサスカイト片が出土しているが遺物は皆無である。包含層から8点の土器が出土したのみである。そのために時期の位置づけを古墳時代以降としている。

2 土塚墓

土塚墓1 (第50・51図、図版13-2)

調査区西側の中央、土塚30の北約1.5mにおいて検出した。遺構の中央部分を溝6によって切られている。掘り方の平面形は長椭円形を呈し、規模は長軸231cm、短軸103cm、検出面からの深さは19cmを測る。当初、土塚と考えて調査をしていたが、精査を重ねるにあたり、内側に長方形を呈する掘り方を検出した。埋土は外側の掘り方には、混入しない炭が含有されており、区別することができた。規模は長軸164cm、短軸64cmを測る。小口の幅は北東側で43cm、南西側で54cmを測り、南西側が11cm広くなる。断面形は、検出面から4cmで平坦となり、さらに南側で15cm下がる。断面形では二段掘り状になっている。塚内からは長さ11cmの流紋岩が検出されたが、遺物は確認されなかった。



第51図 土塚墓1 (1/30)

3 土塚

土塚22 (第50・52図)

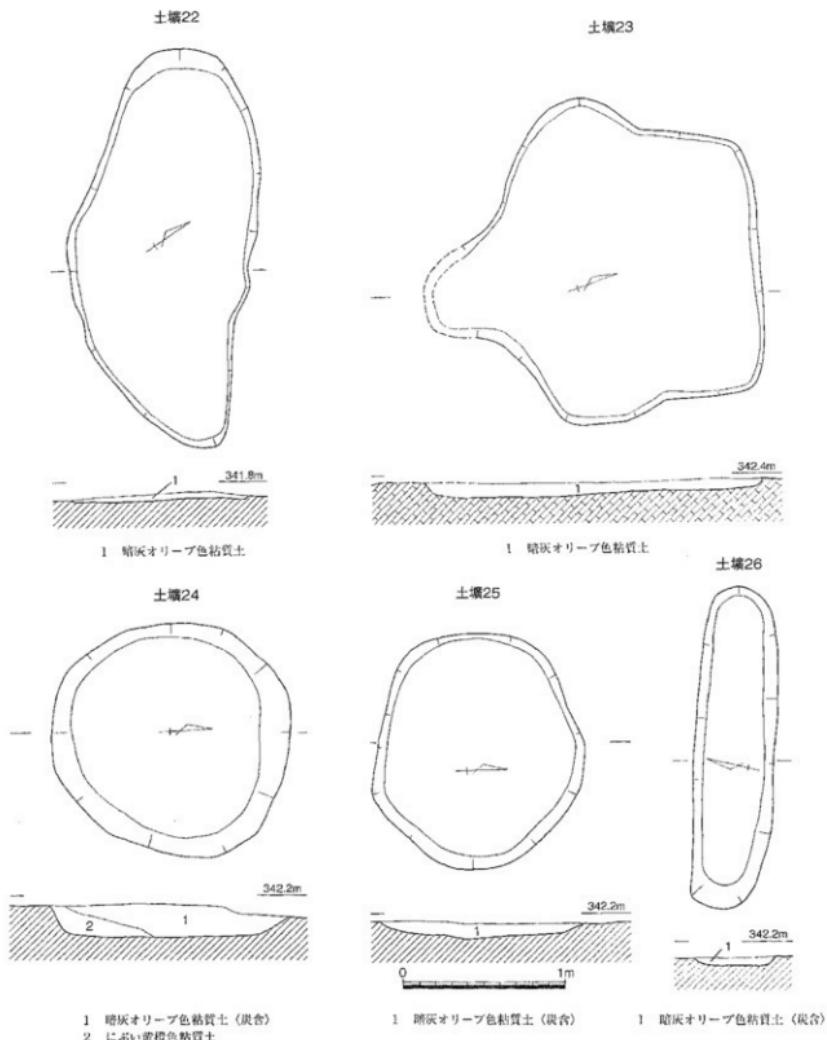
調査区の北西部に位置する。平面形は、不整な楕円形を呈しており、規模は長軸245cm、短軸114cm、検出面からの深さは4cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

遺物は出土していない。

土塚23 (第50・52図、図版13-3)

調査区の中央に位置する。平面形は不整形を呈しており、規模は長軸207cm、短軸200cm、検出面からの深さは9cmを測る。基盤層を掘り込んでいる。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

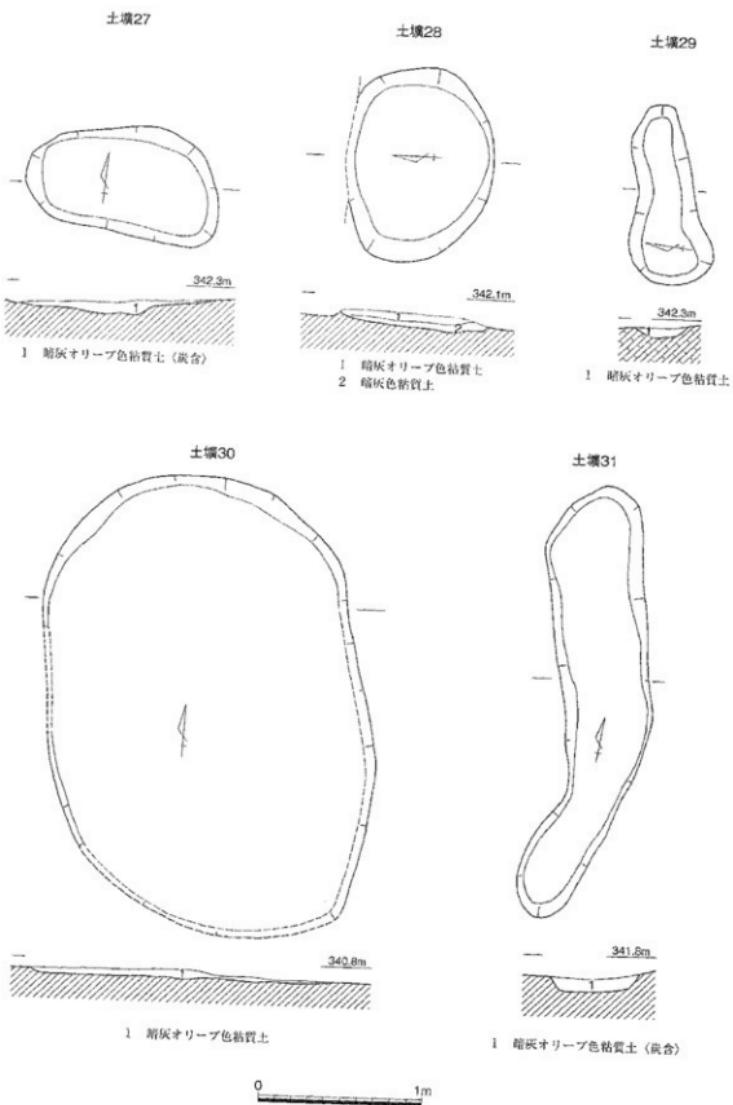
遺物は出土していない。



第52図 土壌22～26 (1/30)

土壤24 (第50・52図)

調査区の北西部に位置する。溝4を切っている。平面形は円形を呈し、規模は長軸145cm、短軸143cm、検出面からの深さは21cmであり、古墳時代以降の土壤の中では最も深いものである。埋土は、



第53図 土壙27～31 (1/30)

上層が炭を含む暗灰オリーブ色粘質土であり、下層がにぶい黄褐色粘質土である。

土壤25(第50・52図)

調査区の北西部に位置する。溝5を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸144cm、短軸127cm、検出面からの深さは9cmを測る。埋土は炭を含む暗灰オリーブ色粘質土である。

遺物は出土していない。

土壤26(第50・52図)

調査区の北西部、溝4の北側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸197cm、短軸48cm、検出面からの深さは5cmを測る。埋土は炭を含む暗灰オリーブ色粘質土である。

土壤27(第50・53図)

調査区の北西部、溝4と溝5の間に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸116cm、短軸70cm、検出面からの深さは9cmを測る。埋土は炭を含む暗灰オリーブ色粘質土である。

土壤28(第50・53図)

調査区の北西部、溝5の南側に位置する。溝5に北側を切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸119cm、短軸90cm、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は上層が暗灰オリーブ色粘質土であり、下層が暗灰色粘質土である。遺物は出土していない。

土壤29(第50・53図)

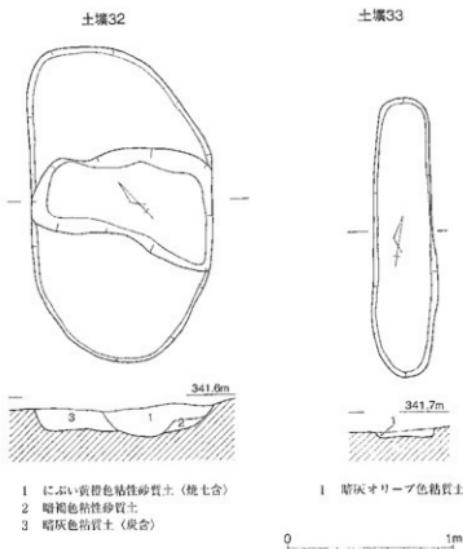
調査区の中央、土壤23の北西側に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸51cm、検出面からの深さは6cmを測る。基盤層を掘り込んでいる。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

土壤30(第50・53図)

調査区の西側中央部に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は現存長であるが、長軸280cm、短軸185cm、検出面からの深さは6cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

土壤31(第50・53図)

調査区の北西部、溝6の東側に位置する。平面形は長楕円形を呈するが、南側においてやや西へ渋曲している。溝状を呈しているが、溝6と連結していないことや底面に傾斜が認められないことから、本書では土壤として扱うこととする。規模は長軸264cm、短軸59cm、検出面からの深さは10cmを測



第54図 土壌32・33(1/30)

る。埋土は炭粒を含む暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

土壙32(第50・54図)

調査区の西側中央部、土壙31と土壙33の間に位置する。平面形は梢円形を呈し、中央において段をなし、一段低くなる。規模は長軸193cm、短軸112cm、検出面からの深さは最深部で19cmを測る。埋土は3層あり、にぶい黄橙色粘性砂質土には若干、焼土が混じる。また暗灰色粘質土には炭が混じる。

遺物は出土していない。

土壙33(第50・54図)

調査区の西側中央部、土壙32の南側に位置する。平面形は長梢円形を呈し、規模は長軸170cm、短軸39cm、検出面からの深さは5cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。

4 溝

溝4(第50・55図)

調査区の北西部に位置し、東から西へと流走する溝である。土壙24と柱穴に切られている。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は9.3mであり、上端幅64cm、底面幅46cm、検出面からの深さは3cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

溝5(第50・55図)

調査区の北西部、溝4と溝6の間に位置する。土壙25に切られており、土壙28を切っている。東から西へと流走する溝である。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は14.7mであり、上端幅40cm、底面幅30cm、検出面からの深さは7cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

溝6(第50・55図)

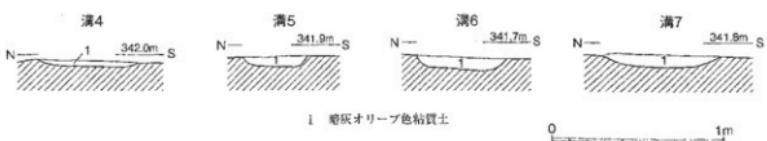
調査区の西側中央部、溝5の南に位置し、土壙墓1を切っている。東から西へと流走する溝である。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は4mであり、上端幅54cm、底面幅35cm、検出面からの深さは7cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。

溝7(第50・55図)

調査区の南西部に位置する、東から西へと流走する溝である。西側は調査区の外へと延びる。

現存長は8.1mであり、上端幅71cm、底面幅47cm、検出面からの深さは8cmを測る。埋土は暗灰オリーブ色粘質土である。遺物は出土していない。



第55図 溝4～7 (1/30)

5 遺構に伴わない遺物

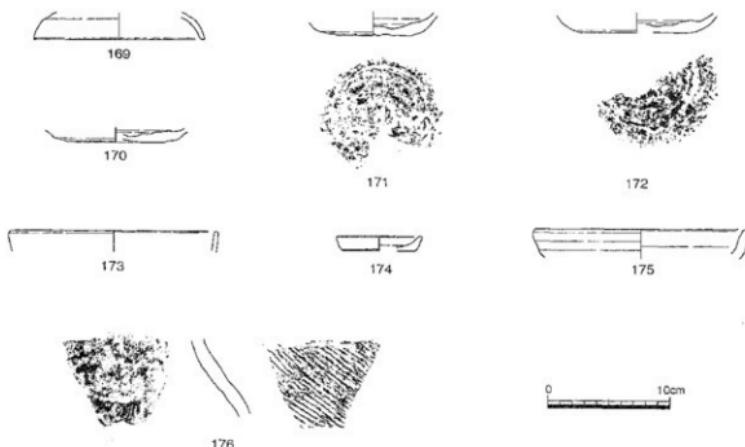
遺構に伴わない遺物（第56図・図版15-2）

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器のうち図示可能遺物、特徴的な要素がみられるものを中心に取り上げる。

169は須恵器の杯蓋の口縁部である。口縁部の端部は丸く仕上げられており、肩部はナデによって若干の段がみられる。古墳時代後期と考えられる。170～172は須恵器の杯身の底部である。復元径は7.4～9.0cmであり、底面外面はヘラキリが行われ、その後整形は省略されている。内面はナデにより整形されている。胎土には0.2cm程度の白色礫を多く含有している。ヘラキリがみられることから古墳時代後期から古代にかけての時期が考えられる。173は須恵器の杯身または椀の口縁部である。端部は丸く仕上げられている。小片のため、時期は不明である。174は須恵器の小皿である。口縁部の復元径は7.4cmである。内外面ともにナデにより整形が行われており、胎土は比較的精緻なものである。古代末から中世の範疇でとらえることができよう。175は瓦質土器の椀の口縁部と考えられる。端部は丸く仕上げられており、内面は工具によるナデの痕跡が認められる。胎土には1～5mm程度の赤色粒が混在する。176は亀山焼の甕である。破片上方において、外へと屈曲する様相が観察されることから、頸部であると考える。外面には右下がりの平行タタキ、内面にはナデ調整が行われている。外面に平行タタキが施されていることから、12世紀末から13世紀前半のものと考えられる⁽¹⁾。

註

(1)岡田博「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 岡山県教育委員会1988



第56図 遺構に伴わない遺物（1/4）

第4章 まとめ

第1節 集落構造と変遷

今回の竹林寺天文台遺跡の調査では、弥生時代の集落跡や古墳時代以降の遺構を確認した。なかでも弥生時代の遺構が大半を占め、調査区の広範囲に認められることから、丘陵頂部全体が弥生時代の集落跡を中心とした遺跡であることが判明した。弥生時代の遺構は、円形の竪穴住居5軒、掘立柱建物2棟で構成されており、全て弥生時代後期の範疇に収まる。

平成15年度に西側丘陵頂部の確認調査が実施されている（第4図参照）。調査の結果、第1地点から多角形の竪穴住居1軒が検出されており、弥生時代後期前葉～中葉の土器が出土している。第2地点から焼失住居と推定される円形の竪穴住居1軒が検出されており、弥生時代中期後葉の土器が出土している。第2地点の南側では、昭和42年に観測施設建設時に箱式石棺が不時発見されている。その際に多くの弥生土器、サスカイト製の石鏃・石包丁などが出土している。このことから、当調査区と対峙する西側丘陵頂部平坦地にも一部墓域を含めた集落が丘陵全体に広がっていると推定できる。

当調査区で集落が形成されるのは、弥生時代後期前葉になってからであり、後期後葉まで営まれる（第8図参照）。後期前葉では、竪穴住居1aと竪穴住居2aを配置している。竪穴住居1と掘立柱建物1の関係は、竪穴住居1aの壁体溝から約1mの控えと周堤や垂木等の存在から併存は厳しいと考えられる。竪穴住居1b段階では壁体溝から約2mの控えがあり、前段階と比較すると併存は想定できる。掘立柱建物2の時期については詳細な時期は特定できていない。後期後葉段階では、竪穴住居2a→b→cへと拡張並びに建て替えが認められる。出土した弥生土器からこの段階で東側丘陵頂部での集落機能が停止しているものと考える。

(水田)

註

間壁 忠彦「3 山上の弥生遺跡」『鴨方町史 本編』 鴨方町 1990

小林 利晴「竹林寺天文台遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』34 岡山県教育委員会 2004

第2節 周辺の弥生時代遺跡

竹林寺天文台遺跡は、標高約340～360mに位置する弥生時代の高地性集落である。竹林寺山山麓地域には、弥生時代の集落及び散布地が存在する（第2図参照）。当遺跡の山麓は、南北地域において地形が異なる。北側の矢掛町は小田川水系で、支流である道々川による扇状地が広がる。南側の浅口市は里見川水系で、支流である本庄川による河岸段丘となっている。

南側の本庄川周辺の山腹標高約120mには段林遺跡・道面遺跡が立地しており、弥生時代後期後葉の竪穴住居が両遺跡から検出され、特異な立地状況をみせる。内平遺跡は標高約70mの丘陵上に立地し、調査の結果、弥生時代後期の集落遺跡とみられる。和田遺跡は標高約40mの丘陵の先端部に立地し、弥生時代後期後葉の袋状土壌が検出されている。当遺跡から約6km南側に位置する森山遺跡では

低丘陵に立地し、弥生時代後期前葉の竪穴住居を検出し、南側の山麓一帯に集落の広がりが想定される。

北麓地域は、道々川西岸の山裾の里山田には弥生時代中期から後期の遺跡が広がりをみせる。東岸の中山の裾部に位置する白江遺跡では弥生時代後期前葉と後期末葉の多量の土器が出土している。また、中池ノ内遺跡は弥生時代後期後葉の竪穴住居を検出しており、この一帯に大規模な集落の存在が想定できる。道々川下流域に位置する清水谷遺跡は、弥生時代後期には水田城への土地利用の変化が認められる。小田川北岸の奥追遺跡では弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。

後期末葉になると南麓では和田遺跡、北麓では茅岡山遺跡や中池ノ内遺跡で土壙墓や土器棺を中心とした墓域が形成され、特殊壺や特殊器台が共伴する。

両地域において弥生時代後期の集落が展開していることを概観してきた。なお、当遺跡からは小田川流域の方を広範囲に確認することができることから、北麓地域と双方向の視認関係にある。

当遺跡は、瀬戸内海沿岸部特有の高地性集落の臨海性と同時に遼照山系によって隔絶された小田川流域と瀬戸内海沿岸部とを連携する集落としての機能を兼備していると考えられる。 (水田)

註

各発掘調査報告書の成果による。

第3表 竹林寺天文台遺跡周辺的主要弥生遺跡

番号	遺跡名	立地	弥生時代中期			弥生時代後期			遺構	備考
			中期初期	中期中葉	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉		
1	森山遺跡	丘陵	■■■■■	■■■■■					竪穴住居・土壙・塗・上器副	
2	和田遺跡	丘陵				■■■■■	■■■■■	■■■■■	表状土壙・土壙墓	好望苔古 毛船
3	内平遺跡	丘陵				■■■■■			塗	
4	向原遺跡	丘陵	■■■■■							
5	段林遺跡	丘陵	■■■■■				■■■■■		竪穴住居・土壙・斜路	島嶼 管玉
6	道原若野	丘陵				■■■■■			竪穴住居・柱穴跡・柱礎穴・柱穴群・上器副	
7	早山田下谷遺跡	平地				■■■■■	■■■■■		土壙・塗	特徴
8	神之島遺跡	丘陵	■■■■■						柱穴・塗	
9	上山遺跡	平地	■■■■■						塗	
10	奥泊遺跡	丘陵	■■■■■	■■■■■					竪穴住居・土壙・塗	
11	白石遺跡	平地	■■■■■	■■■■■					土壙・塗	
12	中池ノ内遺跡	平地	■■■■■	■■■■■					竪穴住居・土壙・柱・土壙・土壙・柱穴	
13	平山田遺跡	丘陵				■■■■■	■■■■■		土壙墓	好望苔古 管玉
14	清水谷遺跡	平地			■■■■■	■■■■■	■■■■■		柱穴・塗・水田・溝・込み	

■ 遺跡が認められる

■ ■ 上器のみが出土

第3節 竹林寺天文台遺跡からの眺望

竹林寺天文台遺跡は、標高約340～360mに位置する弥生時代後期を中心とする高地性集落である。その立地の性格から眺望は非常に良好である。当遺跡は中央の鞍部を境にして、天文台の所在する西側頂部平坦地と当調査区の東側頂部平坦地から構成されているものと現時点では考えられる。当遺跡の東側約1.5kmには、当地域での最高峰である遼照山（標高405m）がそびえる。当調査区は標高約340mにあり、西側頂部平坦地との比高差は約20mを測ることから眺望が規制されている。この節で述べる眺望とは、西側頂部平坦地からの肉眼観察による可視範囲であることを意味する。

東方向は、遙照山の北側を通じて中国山地最南端に位置する鬼城山や旭川水系である岡山平野の中北部や操山丘陵西端を望む。南東方向は、遙照山から南側に派生する尾根の影響により兎島や塩飽諸島の北側島嶼部の視界が遮られる。しかし、瀬戸大橋の岩黒島大橋から南側を目視することは可能である。備讃瀬戸南岸地域では、五色台・烏帽子山・サスカイトの産出地である金山・城山・飯野山・大高見峰・象頭山・丸亀平野、そして奥側に讃岐山脈を望む。真南には、直線距離で約40km先に芸雲出山遺跡の位置する莊内半島、その奥側には四国山地を望むことができる。燧灘沿岸地域では宇摩平野・飯岡台地・高繩半島の北東地域を望む。備後灘沿岸では、松永湾の東側の丘陵に遮られ、芸予諸島は目視できない。西方向は約20km先の山の切れ目に神辺平野を望む。その方向から北側にかけては吉備高原となり、気象条件が整えば約80km先に大山を目指すことができる。

当遺跡から肉眼で眺望可能な範囲を指摘したが、これには瀬戸内海式気候の影響により當時鮮明に目視することは不可能である。実際、4～7月の発掘調査期間中において対岸地域を確實に目視できた日数は僅かである。

当遺跡の立地的特徴から瀬戸内海及び沿岸地域を広域的に可視しており、瀬戸内海の眺望的掌握を担っていたと考えられる。
(水田)

註

目視範囲は、現代の気候条件下によるものであり、当時の環境を反映しているとは限らない。



☆ 竹林寺天文台遺跡 ■ データ及び肉眼による可視域 □ 山地及び丘陵部

第57図 竹林寺天文台遺跡からの可視域

第4節 竹林寺天文台遺跡出土の石器

今回の竹林寺天文台遺跡の発掘調査では、遺構及び包含層から本書未掲載資料を含め、53点の石器が出土した。これらの石器について、その使用石材を器種別にまとめたものが第4表である。また、調査中には製品のほかに遺構・包含層から多数のサスカイト片が出土している。特に堅穴住居の中には微細なサスカイト片が多量に混入しており、住居内の埋土については現場においてふるいをかけて選別を行った。ここでは弥生時代を中心に、竹林寺天文台遺跡出土石器の内容について述べたい。

器種別では、打製石包丁2点（サスカイト1点・粘板岩1点）、石斧4点（流紋岩2点・泥岩1点・安山岩1点）、石錐3点（サスカイト3点）、楔形石器1点（サスカイト1点）、スクレイバー2点（サスカイト2点）、石鎌5点（サスカイト5点）、投弾20点（流紋岩20点）、石錘2点（流紋岩2点）、敲石3点（流紋岩1点・砂岩1点・花崗岩1点）、砥石7点（流紋岩2点・泥岩3点・流紋岩質凝灰岩1点・砂岩1点）、台石3点（流紋岩3点）、器種不明1点（粘板岩1点）となる。

重量比別では、流紋岩製品が多く2591.5 g (48.53 %)、次いで砂岩640 g (11.99 %)、花崗岩556 g (10.41 %)、サスカイト425.51 g (7.97 %)、安山岩119.5 g (2.24 %)、粘板岩54 g (1.01 %)、流紋岩質凝灰岩42 g (0.79 %)である。この重量比別では、安山岩製の台石3点（総重量31,800 g）は除いた数字である。また、当遺跡のサスカイト製石器の総重量は58.01 g、サスカイト剥片が遺構出土で129 g、包含層出土で238.5 gあり、今回の調査区では総重量425.51 gを測る。この数字は平成17年度試掘調査での出土品も含まれている。

サスカイト製石器は、打製石包丁1点・石鎌5点・石錐3点・楔形石器1点・スクレイバー1点であった。サスカイト剥片は出土しているが、石核や残核は出土していない。

当調査区で石器の主要石材である流紋岩製石器は、石斧・投弾・石錘・敲石・砥石・台石と多器種にわたり使用されている点は特徴といえよう。流紋岩は、竹林寺天文台遺跡周辺では普遍的にみられる石材であり、また、弥生時代の基盤層も流紋岩である。石錘に使用された円錐の流紋岩は、新生代洪積世に形成された山砂利層から産出されたもので、周辺地では、倉敷市真備町岡田・箭田地区～倉敷市船穂町～倉敷市玉島長尾・富地区～浅口市金光町八重・大谷・須恵・佐方地区、鴨方町六条院東・六条院中地区～浅口郡里庄町見地区にかけて広く分布している。当遺跡からでは、直線距離6 km圏内で入手することが可能である。泥岩は、遙照山山系とくに当遺跡から西側約1.5 km離れた小坂東の杉谷地区で産出されることが判っており、在地産石器の可能性が考えられる。

最後に当遺跡では、流紋岩を使用した石器が多く出土している。一見すると粗雑であるため石器としての認識が難しい。そのため、遙照山山系周辺地域での発掘調査の際には粗雑な石材には、取り扱いに留意していただきたい。

(水田)

註

- 平井 肇「弥生時代の石器」考古学ライブラリー64 ニューサイエンス社 1991
- 河合 忍「竹林寺天文台遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』36 岡山県教育委員会 2006
- 鈴木 茂之氏（岡山大学）の御教授による。
- 定金 司郎氏（浅口市かもがた町家公園）の御教授による。

第4表 竹林寺天文台遺跡出土石製品一覧表

石材 器種	サスカイト	流紋岩	粘板岩	泥岩	安山岩	流紋岩質 凝灰岩	砂岩	花崗岩	合計
石包丁	1		1						2
石斧		2		1	1				4
石錐	3								3
楔	1								1
スクレイパー	2								2
石鏟	5								5
投擲		20							20
石錐		2							2
敲石	1						1	1	3
砥石	2			3		1	1		7
台石		3							3
不明			1						1
合計	12	28	2	4	1	1	2	1	53

第5節 水の確保の問題

竹林寺天文台遺跡の今回の調査区は、標高約340mの高地に位置する弥生時代後期の集落遺跡である。ここでは生活環境で必要不可欠な存在である水の確保について述べたい。

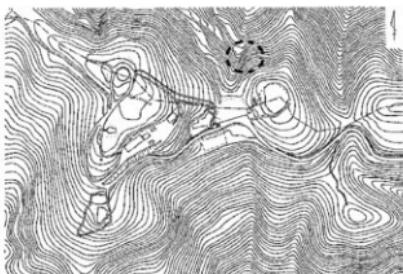
弥生時代の同時期において近隣の岡山平野や神辺平野の沖積地の集落において井戸が掘削される傾向にある。井戸は、集落内から遠隔地にある河川等の水を確保に比べると集落内で安定的に需要に対して柔軟に対応ができる。当遺跡の位置している遼照山山系の周辺の矢掛町、井原市や浅口市では、発掘調査が少例であるためか弥生時代の時に掘削された井戸の検出例はない。

竹林寺天文台遺跡の場合では、基盤層が硬質な流紋岩であり、湧水層まで井戸を掘削することは困難である。国立天文台岡山天体物理観測所が本遺跡地内に存在するが、この地まで上水道が敷設されてしまおらず、現状では井戸を掘削して水を取得している状況にある。

当調査区の西側の鞍部（現在の駐車場）から北側の矢掛町へ散策道が整備されている。調査区から20m下った箇所の標高約310～320m付近では、湧水地点が数ヶ所確認することが出来ている。水温は夏期でも低温を保っており、水量も豊富である。湧水地点の周辺には、湿地性植物であるヤマアゼズゲが生育している環境である。このような地点を弥生時代の高地性集落の水源地の候補として想定できるものと考えている。（水田）

註

山本 敏夫氏（浅口市文化財保護委員）の御教授による。



第58図 竹林寺天文台遺跡周辺の湧水地点

第6節　県内出土の弥生時代後期の土玉

1　はじめに

今回の調査において、弥生時代後期の包含層から球状の土製品（C3）が1点出土している。この土製品は棱線上に刺突による装飾が施されているのが特徴的である。これまでの発掘調査報告書では、球状を呈する土製品は、装飾のあるものや穿孔のないものを「土玉」「土製丸玉」、それら以外のものをおおよそ「土錘」として報告している状況であり、明確に分けられているわけではない。そうした土製品の類例を集成し、県内における出土例から若干の検討を試みる。

2　分類

ここでは、断面形が円形、横長の楕円形を呈する土製品を対象とし、用語としては「土玉」を使用することとした。なお、最大長が最大幅よりも10mm以上長い縦長の楕円形を呈するものと孔径が8mm以上のものは、土錘の可能性が高いと思われるため、対象から除外した。対象とする土玉は、和田昭吾氏の管状土錘e類（断面が円形に近い、いわゆる「球形土錘」）⁽¹⁾、乘松真也氏の球状土錘（球状を呈し、貫通する孔をもつもの）⁽²⁾を一部含む。

県内においては、30遺跡64点の土玉が出土している。分類は、孔・断面形態・装飾を基準に行う。孔が貫通するものを有孔土玉、貫通しないものを無孔土玉とする。また断面形によって、断面円形のものをI類、楕円形のものをII類とする。さらに装飾の有無により、装飾のないものをA、あるものをBとし、有孔IA、無孔IBと表記する。

3　傾向

類型別

類型別では、有孔IAが26点（41%）、有孔IBが1点（1%）、無孔IAが8点（11%）、無孔IBが0点、無孔IIAが2点（4%）、無孔IIBが1点（1%）出土している。また分類の基準別では、有孔が84%、無孔が16%であり、有孔のものが大多数を占めている。また断面形では、円形が53%、楕円形が47%であり、ほぼ半数である。さらに装飾では、装飾なしが82%、装飾ありが18%であり、装飾のあるものは少数であることがわかる。大きな傾向としては、有孔で装飾のないものが多数を占めるということが言える。

装飾

装飾については、断面円形のものが1点であるのに対し、断面楕円形のものが11点と多数を占めており、装飾は断面楕円形のものに施す傾向が顕著である。装飾の内容は、刺突と線刻が認められる。装飾の部位は全体に及ぶものと最も張り出した部分に施すものがあり、線刻による装飾は全体に及ぶもののみである。

第5表　土玉分類表

孔	断面形態	装飾	類型
○	円	○	有孔IA
	楕円	×	有孔IB
×	円	○	有孔IIA
	楕円	×	有孔IIB
○	円	○	無孔IA
	楕円	×	無孔IB
×	円	○	無孔IIA
	楕円	×	無孔IIB

出土遺構

出土遺構別では、竪穴住居が57.8%、土壙・袋状土壙が10.9%、溝・河道が9.4%、土器窯が3.1%、包含層が18.8%である。遺構ではない包含層からの出土が比較的高い比率を示しているが、竪穴住居からの出土が約6割を占めており、竪穴住居に伴うという傾向は重要な傾向であろう。

4 おわりに

今回、これまであまり取り上げられることのなかつた土玉を対象に県内における出土事例を集め、それらから分類を行い、いくつかの傾向について指摘を行ってきた。その結果、県内では有孔I Aが多数を占め、遺構では竪穴住居からの出土が比較的多く、装飾については断面形態との一定の関係性があるという傾向が認められた。

県外の事例として、1000点以上の土玉が出土している鳥取県青谷上寺地遺跡が挙げられる。出土状態も良好であり、1つの土玉にヒノキの細枝を通して輪状とし、樹皮を巻いて縛縛した状態で出土している。青谷上寺地遺跡の場合、溝からの出土が大多数を占めてい

第6表 土玉一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	計測値			類型	諸説	報告書 記載番号	文献
				最大周囲直径 (mm)	孔径 (mm)	厚度 (mm)				
1	西江遺跡	新見市音西町	竪穴住居	23.0	24.0	-	無孔I A	-	11	1
2			壁穴住居	22.0	21.0	-	有孔I A	-	C2	
3			壁穴住居	29.0	33.0	2.0	有孔I A	-	C3	
4	山田遺跡	高庭市(久世町)	竪穴住居	21.0	23.0	4.0	有孔I A	-	C4	
5			包装物	30.0	38.0	6.0	有孔I B	利光	C6	
6			包装物	22.0	31.0	5.0	有孔I A	-	C7	
7	鷹谷遺跡	高庭市(久世町)	壁穴住居	28.0	42.0	7.0	有孔I A	-	C1	
8			壁穴住居	25.0	35.0	5.0	有孔I A	-	C3	
9	野邊遺跡	高庭市(久世町)	壁穴住居	24.0	30.0	4.0	有孔I A	-	C2	
10	下山遺跡	高庭市(落合町)	包装物	23.0	28.7	4.6	有孔I A	-	9	3
11	宮の森遺跡	高庭市(落合町)	壁穴住居	28.0	28.0	4.0	有孔I A	-	2	4
12	二宮遺跡	津山市	壁穴住居	25.0	34.0	6.0	有孔I A	-	26	5
13			壁穴住居	20.0	22.5	2.3	有孔I A	-	C1	
14	小中遺跡	勝山市郡家町	壁穴住居	20.7	23.0	-	無孔I A	-	C1	6
15			壁穴住居	20.0	25.0	-	無孔I A	-	C1	
16	木山遺跡	赤磐市(山陽町)	壁穴住居	17.7	18.7	-	無孔I A	-	18	7
17	鷺山田遺跡	赤磐市(山陽町)	土壙	30.0	19.0	6.0	有孔I A	-	C3	8
18	原遺跡	岡山市(御津町)	壁穴住居	21.0	28.0	2.0	有孔I B	利光	95	9
19			壁穴住居	22.0	28.0	2.0	有孔I B	利光	96	
20	藤原跡	岡山市	壁穴住居	22.0	21.0	3.0	有孔I A	-	15	10
21			壁穴住居	17.0	21.0	4.0	有孔I A	-	5	
22	百間川堀尾遺跡	岡山市	土壙壁	21.0	21.0	3.0	有孔I A	-	6	11
23			土壙壁	43.0	38.0	3.0	有孔I B	綱綱	C10	12
24			壁穴住居	24.0	30.0	3.0	有孔I B	利光	1	13
25			土壙	36.0	35.0	6.0	有孔I A	-	C4	14
26			土壙壁	24.0	35.0	4.0	有孔I A	-	C12	15
27	百間川堀尾島遺跡	岡山市	壁穴住居	17.9	22.7	3.0	有孔I B	利光	C4	
28			壁穴住居	26.0	35.0	4.5	有孔I A	-	C7	16
29			土壙	25.0	24.0	4.5	有孔I A	-	C18	
30			土壙	28.0	33.5	2.0	有孔I A	-	C25	
31			壁穴住居	26.0	29.0	-	無孔I A	-	C2	
32	津島遺跡	岡山市	河道	15.0	18.0	-	無孔I A	-	C22	17
33			包装物	28.5	32.0	-	無孔I A	-	C15	18
34	立田遺跡	岡山市	壁穴住居	28.0	29.0	3.0	有孔I A	-	C1	19
35			壁穴住居	21.0	25.5	-	無孔I A	-	C78	
36			壁穴住居	14.0	23.0	3.0	有孔I B	利光	C79	
37	稻佐森遺跡	岡山市	壁穴住居	34.0	33.0	2.0	有孔I A	-	C82	
38			包装物	28.0	28.0	4.0	有孔I A	-	C90	
39			土壙	19.0	21.0	3.0	有孔I B	綱綱	C92	
40			包装物	22.0	22.0	3.0	有孔I A	-	C101	
41	津守遺跡	岡山市	壁穴住居	22.0	24.0	2.0	有孔I A	-	C26	
42			包装物	22.0	23.0	2.0	有孔I A	-	C29	
43	津守三木本道跡	岡山市	壁穴住居	21.0	24.0	2.0	有孔I A	-	C1	22
44			土壙	16.0	19.5	3.0	有孔I B	利光	C82	
45			包装物	22.0	36.0	4.5	有孔I A	-	C87	
46	高塚遺跡	岡山市	包装物	25.0	30.0	4.0	有孔I A	-	C88	
47			壁穴住居	26.0	31.0	4.0	有孔I B	-	C129	
48			壁穴住居	19.5	34.0	2.0	有孔I B	綱綱	C133	
49			壁穴住居	25.0	28.0	2.0	有孔I A	-	C4	
50			壁穴住居	30.0	32.0	2.0	有孔I A	-	C5	
51	足守川堀尾島遺跡	岡山市	壁穴住居	25.0	26.0	4.0	有孔I A	-	C6	
52			壁穴住居	14.0	17.0	4.0	有孔I B	-	C18	
53	足守川堀尾南側	倉敷市	壁穴住居	23.0	23.0	4.0	有孔I B	-	C9	
54	寺跡		土壙	17.5	17.2	-	無孔I A	-	C33	
55	矢部城遺跡	倉敷市	土壙	19.0	18.0	2.0	有孔I A	-	C1	21
56			壁穴住居	20.0	30.0	3.0	有孔I A	-	8	25
57	上東遺跡	倉敷市	包装物	23.0	24.0	2.0	有孔I A	-	C23	
58			河道	24.0	29.0	-	無孔I B	利光	C30	
59	南浦手遺跡	倉敷市	壁穴住居	21.2	27.2	2.0	有孔I A	-	C134	27
60	赤木山遺跡	倉敷市	壁穴住居	22.5	25.5	4.5	有孔I A	-	C1	28
61	赤木山遺跡	倉敷市	包装物	22.0	23.0	4.0	有孔I A	-	C3	29
62	赤木山遺跡	赤堀町	包装物	22.0	23.0	4.0	有孔I A	-	C16	20
63	森山遺跡	浅井町(方所町)	包装物	36.0	35.0	7.0	有孔I A	-	C5	31
64	竹林寺天文台遺跡	浅井町(方所町)	包装物	27.5	33.0	6.0	有孔I B	利光	C3	32

る^③。土玉の機能や用途を考えるうえでは非常に良好な資料であろう。

今回は県内出土のものを中心にしてきたが、出土事例が少なく、土玉の機能や用途について検討することはできなかった。この点に関しては、周辺地域における出土事例や共伴遺物など広い視点から比較検討していくことが今後必要となってくるだろう。

(三浦)

註

- (1) 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』小林行雄先生古希記念論文集 小林行雄先生古希記念論文集刊行委員会編 平凡社 1982
- (2) 乗松真也「漁業用の鍬からみた地域間交流」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会 2006
- (3) 北浦弘人ほか「青谷上寺地遺跡3」鳥取県教育文化財団調査報告書72 財団法人鳥取県教育文化財団 2001

文献

- 1 国山県教育委員会「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20 1977
- 2 国山県教育委員会「旦山遺跡・惣台遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 1999
- 3 国山県教育委員会「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3 1974
- 4 国山県教育委員会「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12 1976
- 5 国山県教育委員会「二宮遺跡」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告』28 1978
- 6 国山県教育委員会「小中遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 1997
- 7 山陽町教育委員会「用木遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』4 1978
- 8 邑久町教育委員会「熊山田遺跡」『邑久町埋蔵文化財発掘調査報告』1 2004
- 9 御津町教育委員会「原遺跡」『御津町埋蔵文化財報告』3 1988
- 10 岡山県教育委員会「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 1972
- 11 岡山縣教育委員会「百間川兼基遺跡1ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 1982
- 12 岡山県教育委員会「百間川兼基遺跡4ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』208 2007
- 13 岡山県教育委員会「百間川原尾鳥遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1984
- 14 岡山県教育委員会「百間川原尾鳥遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 1994
- 15 岡山県教育委員会「百間川原尾鳥遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97 1995
- 16 岡山県教育委員会「百間川原尾鳥遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179 2004
- 17 岡山県教育委員会「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 2003
- 18 岡山県教育委員会「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 2004
- 19 岡山県教育委員会「加茂政所遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 1999
- 20 岡山県教育委員会「足守川加茂A遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1995
- 21 岡山県教育委員会「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98 1995
- 22 岡山県教育委員会「津寺三本松遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』142 1999
- 23 岡山県教育委員会「高塚遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 1999
- 24 岡山県教育委員会「矢部堀越遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993
- 25 岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 1974
- 26 岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158 2001
- 27 岡山県教育委員会「南津手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 1996
- 28 岡山県教育委員会「諫木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120 1997
- 29 岡山県教育委員会「井手見延遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156 2000
- 30 井原市教育委員会「高越遺跡」『井原市埋蔵文化財発掘調査報告』2 2004
- 31 浅口市教育委員会「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』1 2008
- 32 本書

竹林寺天文台遺跡周辺の地形・地質

定金司郎

1 位置・地形

岡山県の南西部に位置する浅口市は、県南部を東西に括る瀬戸内沿岸山地・丘陵地と瀬戸内沿岸平野の地形域に属する。市の南縁は瀬戸内海に面し、北縁は阿部山・遙照山系の稜線上で矢掛町と境を面している。

市内の中南部は大部分が花崗岩であるため浸食が進み、標高50m前後の丘陵地と100～200mの山地となっているが、北部の阿部山・遙照山系の稜部は流紋岩類で覆われているために浸食が遅れ、300～400mの高度を保っている。また、平野部のほとんどが繩文海進時に進入した海底に堆積した沖積層で、10～30mの標高で丘陵地や山地の凹部を埋めて括がっている。

阿部山・遙照山系は西の笠岡市吉田付近の谷部に端を発し、笠岡ゴルフ場（365m）を経て浅口市に入り、阿部山（397m）、天文台（366m）、遙照山（405m）と続き、更に東へ高度をやや下げながら玉島北部の弥高山（307m）へと続き、船穂町柳井原で高梁川に没する。山系の北斜面はやや急峻で小田川に至り、南側はややゆるやかな傾斜で、玉島から笠岡の平野部に裾野を括げている。東西約25km、南北幅5～7kmに及ぶ山地である。山系の稜線部は、吉備高原の連続面ではないかと思われる程平坦で、ゆるやかな起伏の頂部が連なっている。また、稜線部分の窪地には湿地帯やため池が多数点在している（近年は湿地帯は減少している）。

山系中間部の竹林寺山（366m）には国立天文台岡山天体物理観測所が設置されている。天文台の東側の頂部（355m）が今回の竹林寺天文台遺跡の発掘現場である。

2 地質

前記山系の山麓部あるいは中腹部から頂部にかけては、白亜紀中～後期に活動したと考えられる流紋岩類が覆い（阿部山付近の流紋岩の放射性年代測定で69Maの値が得られている：岡山大・鈴木）、その下位には白亜紀末～新生代初期にかけて进入したと考えられる花崗岩が山系の裾野から平野部の丘陵地や山地にかけて広く分布している。則ち、流紋岩類が屋根のような形で花崗岩の上に乗かるルーフベンダント構造（屋根状構造）となっている。両者の接触部付近では流紋岩類が花崗岩の熱作用を受けて接触変成岩となっている。丘陵地や山地を埋める平野部は海底に堆積した沖積層である。瀬戸内海に浮かんでいた三郎島は近年の干拓で陸続きとなった。

竹林寺天文台遺跡付近の流紋岩類は、下位より流紋岩質凝灰岩、泥質岩（砂質岩）、流紋岩質火山礫凝灰岩（一部には火碎流石質凝灰岩）の順に累積し、最上位を流紋岩質溶岩が覆っている。

下位の凝灰岩・泥質岩（砂質岩）は帶状に広く分布しており、杉谷池の上付近から地蔵峰下・遙照山下から富付近に連続し、北斜面の山田付近に顕を覗かせている。走向は東西～南北系で10～25°中心に傾斜するベースン構造（盆状構造）となっている。また、これらは湖沼成の堆積物で層理が発達し、杉谷池上の泥質岩からは多數の植物化石を産出する。

火山礫凝灰岩は溶岩の下位に分布している。径1～数cmの火山礫を凝灰岩が埋めており、湖沼成の

ものと火碎流による石質凝灰岩のものとが認められる。

溶岩は竹林寺山や遙照山などの山系の頂部に分布している。天文台や遺跡付近のものには長石・石英・黒雲母の班晶が観察され緻密で硬い。またこの付近の溶岩にはタマネギ状構造が見られ、遙照山の溶岩では流理構造が認められる。

流紋岩類の累積構造や岩質、産出する化石等から、当地域の火山は活動の静止期に大きなカルデラ湖ができ、湖の周辺には豊かな森が出現、湖には周りから土砂が流入したり、活動を再開した火山から火山灰や火山礫が降り注いでいたのではないかと想像される。

花崗岩は流紋岩の火山活動の後に流紋岩類の下位に進入したもので、山系稜線部には流紋岩類が残されているが、山系の北側と南側では流紋岩類が浸食されたために、花崗岩が地表に表れたものである。杉谷池左岸に流紋岩類と花崗岩との接触部が露出しており、花崗岩が40°の傾斜で流紋岩類の下から进入している構造が観察される。また、接触部付近の流紋岩質凝灰岩は花崗岩マグマの熱作用を受けて変質しており、ロウゼキ鉱床も胚胎されている。かつてはロウゼキを採掘する鉱山があった。

花崗岩进入後の地殻変動時には断層ができたり、岩石の割れ目などに岩脈が貫入したりした。域内には2本の断層が認められる。地蔵峠を走る断層は北東～南西方向に伸びており、矢掛町横谷から地頭下を通り金山峠に至っている。以前には、地頭下から地蔵峠に上がる谷沿いの岩盤に、断層運動の摩擦で生じた鏡肌を観察することができた（現在はコンクリートで覆われている）。阿部山付近を南北に走る断層の破碎帯が杉谷池から日原方面につながる道路沿いに現れており、泥質岩の連続が断層で絶たれている。阿部山付近には安山岩質の岩脈が、富付近では流紋岩質の岩脈を観察することができる。

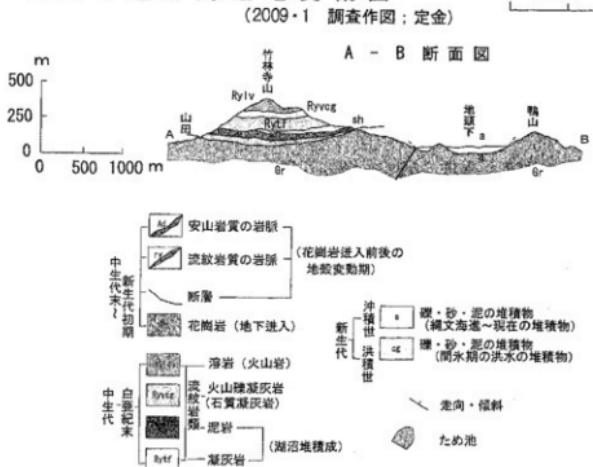
南部の平地部の山陽本線沿いの丘陵地には、洪積世の間氷期に吉備高原から瀬戸内沿岸地域にかけて氾濫した河川の堆積物（山砂利層）が分布しており、本地質図の右下にその一部が掲載されている。

最後のウルム氷期が終わると、玉島から笠岡にかけての低地に海が侵入し、南の竜王山～御嶽山山地を前衛島とした三日月形の入り海が出現していた。江戸時代に入り海の玉島側と笠岡側の入口を堰き止めたり、土手を築いて塞いだため陸地となつた。入り海時代の海底の堆積物（泥や砂）が沖積層であり、現市内の平野部となっている。また六条院小学校校庭（標高10m）のボーリング調査では地下10mで基盤の花崗岩に達している。これらのことから繩文海進時の海面は現在の標高30m前後までに達し、沖積層の層厚は40m位であると考えられる。

3 地形・地質からみた古代人の生活領域

繩文海進時の海面は当該地域では、益坂・地頭下・杉谷の谷部まで達していた。現在の鶴方IC付近は海に面した小高い丘となっていたが、その他の沿岸部は比較的急峻で生活の場としては適していなかった。益坂や地頭下から300m程登った阿部山・遙照山の頂部は見通しもよく、ゆるやかな起伏をしており、また流紋岩類で覆われているために保水性に富み湿原が点在していたために水の確保もできる。生活環境としては海岸部よりは山上の方が有利であったであろう。

竹林寺天文台遺跡周辺の地形・地質



第1図 竹林寺天文台遺跡周辺地質概図

竹林寺天文台遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、弥生時代の竪穴住居2より出土した炭化材1点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

表1 竹林寺天文台遺跡における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）
竪穴住居2	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 国版1

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

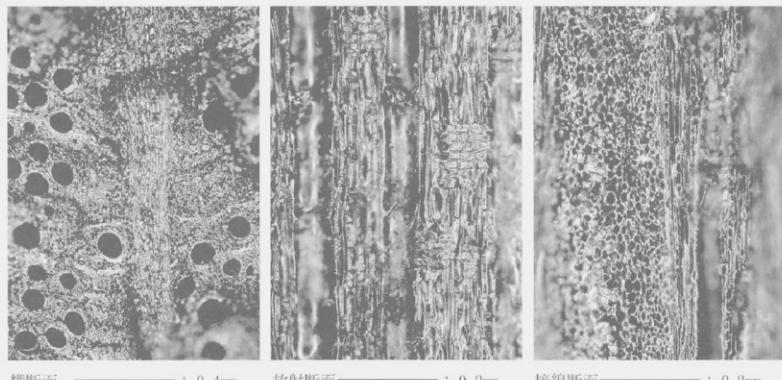
放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径15m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。とくに農耕具に用いられる。

5. 所見

竹林寺天文台遺跡出土の炭化材は、コナラ属アカガシ亜属1点であった。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帶下部の暖温帶の照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。硬堅な材であり、広く用いられる。竹林寺天文台遺跡の炭化材は、当時遺跡の周辺地域に生育し、容易にもたらされたと推定される。



図版1 壇穴住居2 コナラ属アカガシ亜属

II. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した校正曲線により ^{14}C 年代から曆年代に校正する必要がある。

2. 試料と方法

測定試料は、弥生時代の竪穴住居 2 より出土した炭化材 1 点である。測定は、試料を調製後、加速器質量分析計を用いて行った。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年代を算出した。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。測定試料と方法を表 2 にまとめた。

表 2 測定試料及び処理

試料名	地點	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	竪穴住居 2	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

*AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

年代測定結果を表 3 に示す。

表 3 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年BP)	曆年代 (西暦) ⁴⁾	
No. 1	249677	1880 ± 40	-25.4	1870 ± 40	交点: cal	AD 130

1 σ : cal AD 80 ~ 210

2 σ : cal AD 60 ~ 240

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えて算出した年

代。

4) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

歴年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と歴年代較正曲線との交点の歴年代値を意味する。 1σ (68 % 確率) と 2σ (95 % 確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに歴年代較正を行った結果、試料No.1では 1870 ± 40 年BP (同じくAD 60 ~ 240年) の年代値が得られた。

参考文献

- ・佐伯浩、原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
- ・島地謙、伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296
- ・山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242
- ・Paula J Reimer et al. (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
- ・尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ、学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3 - 炭素年代測定による高精度編年体系の構築 -、p.14-15.
- ・中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p.1-36.

遺構一覧表・遺物観察表

凡例

1 遺構一覧表

- ・「平面形」は検出面での形状を示した。「()」は、推定される形状を示した。
- ・「断面形」は壁面の形状を示した。
- ・「規模」の「-」は計測不能を示した。
- ・「時期」の「()」は推定される時期を示した。

2 遺物観察表

土器

- ・「色調（外面）」は『新版標準土色帖（2002年度）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修）を使用した。
- ・「状態」は、主要計測部位である口縁部を「口」、胴部を「胴」、底部を「底」、脚部を「脚」などと表し、残存状況を分数あるいは小破片は「片」と示した。また、復元も含めて全体の残存状況が高いものは、「完形」「ほぼ完形」と表した。

土製品

- ・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。「色調（外面）」の識別基準は土器観察表に準じる。「時期」の「()」は推定される時期を示した。

石器・石製品

- ・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。「時期」の「()」は推定される時期を示した。

金属器

- ・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。

遺構一覧表

壁穴住居

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	床面積(m ²)	柱穴 本数	平面形	中央穴(cm) 長×短	深さ	壁体調	時期
壁穴住居 1a	円	660	(650)	(34.19)	8	台形	62×54	31	○	弥・後
壁穴住居 1b	円	540	(485)	(22.89)	6	不整円	75×73	37	○	弥・後
壁穴住居 2a	円	486	(480)	(18.51)	6	不整倍円	119×82	28	○	弥・後
壁穴住居 2b	円	800	(700)	(50.24)	8	不整倍円	119×82	28	○	弥・後
壁穴住居 2c	円	800	(700)	(50.24)	8	不整倍円	119×82	28	○	弥・後

掘立柱建物

遺構名	規模	柱間距離(cm)		幅行(cm)	横間(cm)	面積(m ²)	棟方向	柱穴		時期
		桁	梁					平圓形	深さ(cm)	
掘立柱建物 1	1×1	283-285	252-269	283-285	252-269	7.29	N-1°-W	円-楕円	29-45	弥・後
掘立柱建物 2	2×1以上	164-181	230	345	230	(7.94)	N-42°-W	円-楕円	8-16	弥・後

土塙墓

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土塙墓 1	扇丸方形	段	231	(103)	(19)	古墳以降	

土塙

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土塙1	不整倍円	楕+段	(102)	(70)	(15)	弥・後	
土塙2	不整倍円	逆台形	(103)	(93)	(12)	弥・後	
土塙3	楕円	段	135	94	19	弥・後	
土塙4	不整	椭	(200)	(105)	9	弥・後	
土塙5	楕円	椭+段	(302)	(110)	74	弥・後	
土塙6	不整倍円	段	100	82	18	弥・後	
土塙7	不整倍円	段	144	50	23	弥・後	
土塙8	楕円	椭	238	103	21	弥・後	
土塙9	不整	椭+段	249	91	12	弥・後	
土塙10	円	椭+段	(70)	(70)	21	弥・後	
土塙11	楕円	逆台形+段	120	80	21	弥・後	
土塙12	不整倍円	椭+段	86	74	32	弥・後	
土塙13	不整倍円	逆台形+段	125	90	10	弥・後	
土塙14	楕円	椭	81	44	10	弥・後	
土塙15	不整円	逆台形	53	(48)	8	弥・後	
土塙16	不整円	椭+段	(105)	(62)	10	弥・後	
土塙17	不整倍円	段	182	65	10	弥・後	
土塙18	不整倍円	椭+段	188	81	32	弥・後	
土塙19	楕円	椭+段	178	114	16	弥・後	
土塙20	不整倍円	椭+段	175	66	16	弥・後	
土塙21	不整倍円	逆台形+段	(256)	130	28	弥・後	
土塙22	不整倍円	段	245	114	4	古墳以降	
土塙23	不整	椭	(207)	200	9	古墳以降	
土塙24	円	逆台形	145	143	21	古墳以降	
土塙25	不整円	椭	144	127	9	古墳以降	
土塙26	長楕円	逆台形	197	48	5	古墳以降	
土塙27	楕円	段?	116	70	9	古墳以降	
土塙28	楕円	椭	119	90	10	古墳以降	
土塙29	不整倍円	逆台形	110	51	6	古墳以降	
土塙30	椭円	段	(280)	185	6	古墳以降	
土塙31	長楕円	段	264	59	10	古墳以降	
土塙32	椭円	椭+段	193	112	19	古墳以降	
土塙33	長楕円	段	170	39	5	古墳以降	

溝

遺構名	断面形	上端幅(cm)	裏面幅(cm)	深さ(cm)	時期	備考
溝1	邊台形	69	65	7	弥・後	
溝2	邊台形	35	30	7	弥・後	
溝3	楕+段	68	23	15	弥・後	
溝4	楕	61	46	3	古墳以降	
溝5	楕	40	32	7	古墳以降	
溝6	楕	54	35	7	古墳以降	
溝7	邊台形	71	47	8	古墳以降	

柱穴

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
柱穴1	円	楕	55	42	28	弥・後	
柱穴2	不整円	楕+段	61	48	45	弥・後	
柱穴3	梢円	楕+段	78	46	25	弥・後	
柱穴4	円	方	40	40	56	弥・後	

新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査年度	調査時No.	報告書遺構名	調査年度	調査時No.
堅穴住居1	H20	33	土塙21	H20	39
堅穴住居2	H20	36	上塙22	H20	7
掘立柱建物1	H20	35	土塙23	H20	17
掘立柱建物2	H20	28	土塙24	H20	11
土壤墓1	H20	8	土塙25	H20	14
土壤1	H20	44	上塙26	H20	6
土壤2	H20	46	土塙27	H20	9
土壤3	H20	42	土塙28	H20	15
土壤4	H20	38	土塙29	H20	18
土壤5	H20	34	土塙30	H20	5
土壤6	H20	45	土塙31	H20	3
土壤7	H20	32	土塙32	H20	1
土壤8	H20	29	土塙33	H20	2
土壤9	H20	21	溝1	H20	47
土壤10	H20	41	溝2	H20	43
土壤11	H20	20	溝3	H20	25
土壤12	H20	19	溝4	H20	10
土壤13	H20	22	溝5	H20	13
土壤14	H20	30	溝6	H20	4
土壤15	H20	31	溝7	H20	12
土壤16	H20	27	柱穴1	H20	YP19
土壤17	H20	28	柱穴2	H20	YP23
土壤18	H20	40	柱穴3	H20	24
土壤19	H20	23	柱穴4	H20	YP5
土壤20	H20	37			

土器観察表

記載番号	遺構名	種別	部種	外觀色調	残存状況	計測値 (cm)		特徴・備考	
						口径	底径		
1	壁穴住居 1	弥生土器	甌	赤褐色	口～底1/6	14.5	5.0		
2	壁穴住居 1	弥生土器	甌	赤	口1/6	14.8	4.3	内外面に赤色顔料	
3	壁穴住居 1	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底～腹1/2以下	6.2	9.8	外面に赤色顔料	
4	壁穴住居 1	弥生土器	甌	褐色	口～底1/8		5.5		
5	壁穴住居 1	弥生土器	甌	明褐色	口～底1/4	13.4	9.2		
6	壁穴住居 1	弥生土器	甌	明褐色	口1/7以下	9.9	2.7		
7	壁穴住居 1	弥生土器	甌	赤褐色	口1/5以下	14.2	1.9		
8	壁穴住居 1	弥生土器	甌	橙	口1/8以下	16.0	3.0		
9	壁穴住居 1	弥生土器	甌	明褐色	口1/5	15.0	3.1	内外面とも赤色顔料	
10	壁穴住居 1	弥生土器	甌	褐	口～底1/10以下		2.4		
11	壁穴住居 1	弥生土器	甌	褐	口～底1/12	13.5	3.1		
12	壁穴住居 1	弥生土器	甌	に赤い赤褐色	口～底1/7以下	14.4	3.6		
13	壁穴住居 1	弥生土器	甌	明褐色	底～腹1/4以下	9.8	6.0	外面に黒斑	
14	壁穴住居 1	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底1/5	8.2	4.8		
15	壁穴住居 1	弥生土器	甌	明褐色	底1/4以下	7.6	4.0	外面に黒斑	
16	壁穴住居 1	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底1/8	13.8	3.0		
17	壁穴住居 1	弥生土器	甌	褐色	底1/5	8.6	2.2		
18	壁穴住居 1	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底1/6	7.2	2.5		
19	壁穴住居 1	弥生土器	甌	青灰	底1/6	6.6	3.2		
20	壁穴住居 1	弥生土器	高杯	に赤い黄褐色	口1/15以下	20.2	2.1	内外面とも赤色顔料	
21	壁穴住居 1	弥生土器	高杯	に赤い黄褐色	底1/5以下		3.8		
22	壁穴住居 1	弥生土器	高杯	に赤い黄褐色	底1/6		2.4		
23	壁穴住居 1	弥生土器	高杯	赤褐色	底1/4	18.8	6.5		
24	壁穴住居 1	弥生土器	高杯	明褐色	脚1/4		11.8	2.4	外面に赤色顔料
25	壁穴住居 1	弥生土器	高杯	明褐色	脚1/4		12.2	1.9	外面に赤色顔料
26	壁穴住居 1	弥生土器	高杯	明褐色	脚1/4		5.1	内外面とも赤色顔料	
27	壁穴住居 1	弥生土器	器台	に赤い黄褐色	底1/12	29.0	2.0		
28	壁穴住居 1	弥生土器	甌	明褐色	口～底1/12以下	30.0	5.5	外面に黒斑	
29	壁穴住居 1	弥生土器	甌	口	口～底1/3	37.8	8.5	17.7	
30	壁穴住居 1	弥生土器	製塙土器	に赤い黄褐色	脚1/4	4.4	2.1		
31	壁穴住居 2	弥生土器	甌	明褐色	口1/11以下	21.0	2.4		
32	壁穴住居 2	弥生土器	甌	明褐色	底～腹1/3		9.0	外面に赤色顔料	
33	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底1/3	9.4	6.2		
34	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底1/4以下	8.8	3.5		
35	壁穴住居 2	弥生土器	甌	灰黃褐色	口1/12	17.8	2.0	外面に赤色顔料	
36	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	口1/10	16.0	2.0		
37	壁穴住居 2	弥生土器	甌	褐色	口1/10	18.2	2.8		
38	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	口～底1/10	18.7	2.6		
39	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底1/8	11.9	2.6	外面に揮発着	
40	壁穴住居 2	弥生土器	甌	明褐色	底1/5以下	14.0	2.3		
41	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	口1/8	13.8	1.9		
42	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	口～底1/8	15.0	2.5		
43	壁穴住居 2	弥生土器	甌	明褐色	底1/8	12.8	1.5		
44	壁穴住居 2	弥生土器	甌	明褐色	底1/6	12.4	2.4		
45	壁穴住居 2	弥生土器	甌	に赤い黄褐色	底1/8	15.0	2.7	外面に黒斑	
46	壁穴住居 2	弥生土器	甌	褐色	底1/8	16.5	2.7		

標識番号	種類名	種別	型様	外觀色調	残存状況	計測値(cm)			特徴・備考
						口径	底径	髙さ	
47	豎穴住居2	弥生土器	丸	に赤い黄褐色	口1.8	15.8	3.2		
48	豎穴住居2	弥生土器	丸	に赤い黄褐色	口1.8以下	17.2	2.2		
49	豎穴住居2	弥生土器	丸	黄褐色	底1.5		3.3		
50	豎穴住居2	弥生土器	丸	に赤い黄褐色	底1.5		5.4		
51	豎穴住居2	弥生土器	丸	に赤い黄褐色	底1.4	9.0	4.7		外観に黒斑
52	豎穴住居2	弥生土器	丸	黒	底1.3	9.2	3.7		外観に黒斑
53	豎穴住居2	弥生土器	丸	に赤い赤褐色	底1.2	4.8	2.5		外観に黒斑
54	豎穴住居2	弥生土器	丸	明赤褐色	底1.4	8.0	2.7		外観に黒斑
55	豎穴住居2	弥生土器	丸	穀	底1.4	4.1	2.6		
56	豎穴住居2	弥生土器	高杯	穀	口～底1.6	21.7	2.2		
57	豎穴住居2	弥生土器	高杯	赤褐色	口～底1.6	20.9	2.4		外観面とも赤色顔料
58	豎穴住居2	弥生土器	高杯	に赤い黄褐色	口～底1.2	23.6	2.5		内面に赤色顔料
59	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口1.4～底1.6以下	13.6	3.0		内外面とも赤色顔料
60	豎穴住居2	弥生土器	高杯	灰褐色	口1.2	13.0	1.5		
61	豎穴住居2	弥生土器	高杯	馬	口～底1.4	20.2	2.7		外観面とも赤色顔料
62	豎穴住居2	弥生土器	高杯	赤	口～底1.2以下	22.6	2.5		外観面とも赤色顔料
63	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口～底1.4～F	17.2	3.8		外観面とも赤色顔料
64	豎穴住居2	弥生土器	高杯	赤	口～底1.4以下	19.6	3.5		内面に赤色顔料
65	豎穴住居2	弥生土器	高杯	穀	口～底1.8	15.8	3.6		外観面とも赤色顔料
66	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口～底1.2	19.2	2.0		外観面とも赤色顔料
67	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口～底1.6	15.8	3.1		外観面とも赤色顔料
68	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口1.8	17.6	3.3		外観面とも赤色顔料
69	豎穴住居2	弥生土器	高杯	赤	口1.7	14.2	2.7		外観面とも赤色顔料
70	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口1.10	13.5	2.4		外観面とも赤色顔料
71	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口1.4	14.8	3.9		外観面とも赤色顔料
72	豎穴住居2	弥生土器	高杯	暗褐色	口1.8	11.4	2.0		外観面とも赤色顔料
73	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口1.12	12.3	3.7		外観面とも赤色顔料
74	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口1.8	17.6	2.3		外観面とも赤色顔料
75	豎穴住居2	弥生土器	高杯	明赤褐色	口1.6	14.2	2.3		外観面とも赤色顔料
76	豎穴住居2	弥生土器	鉢	明黄褐色	口～柄1.15以下	24.2	4.4		外観面に赤色顔料・外観に底付する
77	豎穴住居2	弥生土器	鉢	明黄褐色	口～柄1.8以F	26.4	5.8		外観面とも赤色顔料
78	豎穴住居2	弥生土器	鉢	穀	口～柄1.10	25.6	6.1		
79	豎穴住居2	弥生土器	鉢	明黄褐色	口1.7	31.6	8.8		
80	豎穴住居2	弥生土器	鉢	黒	口～柄1.8	34.0	8.5		
81	豎穴住居2	弥生土器	有孔鉢	暗灰褐色	底～底1.4		3.9		
82	豎穴住居2	弥生土器	台付点口壺	明黄褐色	底下方～脚柱1.3		7.7		
83	豎穴住居2	弥生土器	台付壺	明赤褐色	底は付定存		8.5		
84	豎穴住居2	弥生土器	ミニチュア土器	に赤い黄褐色	底定存		1.5	2.1	外観に黒斑
85	豎穴住居2	弥生土器	ミニチュア土器	灰	底は付定存		1.8	2.5	
86	圓柱形混物1	弥生土器	高杯	に赤い黄褐色	口1.8	11.4	2.5		外観に黒斑、内面に赤色顔料
87	土壤5	弥生土器	丸	明赤褐色	口1.6	17.6	1.7		外観面に赤色顔料
88	土壤8	弥生土器	丸	穀	口1.12以下	25.0	3.0		
89	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	灰	口1.8以下	21.0	2.5		内面に赤色顔料
90	遺構に伴わない遺物	弥生土器	細底壺	暗灰褐色	口1.4以F		5.3		外観面に赤色顔料
91	遺構に伴わない遺物	弥生土器	丸	暗灰褐色	口1.7	15.8	3.0		
92	遺構に伴わない遺物	弥生土器	丸	に赤い黒	口1.6以下	13.2	3.4		

器皿番号	道標名	種別	器種	外側色調	残存状況	計測値(cm)			特徴・備考
						口径	底径	高さ	
93	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	褐色	口11/7	12.8	2.1		
94	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	褐灰	底1/6	5.4	3.3		
95	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	黄灰	底4/5	6.5	2.6		
96	道標に伴わない遺物	弥生土器	高杯	に赤い斑	口11/14	20.4	2.6	外側に赤色顔料	
97	道標に伴わない遺物	弥生土器	高杯	壺	口～柄1/8以下	21.8	2.4		
98	道標に伴わない遺物	弥生土器	高杯	明黄褐	口11/8	18.4	2.1	外側面に赤色顔料	
99	道標に伴わない遺物	弥生土器	高杯	に赤い黄褐	柄～脚柱1/5	4.7			
100	道標に伴わない遺物	弥生土器	高杯	壺	脚1/8以下	13.8	3.3	外側に赤色顔料	
101	道標に伴わない遺物	弥生土器	高杯	壺	脚1/5	14.4	2.7	外側に赤色顔料	
102	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺台	に赤い黄褐	脚1/4	8.2		外側に赤色顔料	
103	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い赤茶	脚1/8以下	6.4	2.3		
104	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	壺	口	15.4	1.8		
105	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	壺	口～脚柱1/7	14.6	4.0	外側面に赤色顔料	
106	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口11/7	15.6	1.4	内側面に赤色顔料	
107	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	口11/6	16.0	2.3		
108	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口～肩足存	19.0	8.6	外側面に赤色顔料	
109	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	底1/5以下	11.4	5.0		
110	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	口11/8	18.5	3.4	外側面に赤色顔料	
111	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	褐灰	口11/8	16.2	3.7	外側面に赤色顔料	
112	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	灰黄褐	口11/7	14.6	1.6	外側面に赤色顔料	
113	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口～脚柱1/4	21.8	5.8	外側面に赤色顔料	
114	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口～脚柱1/4	16.2	5.2		
115	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口～脚柱1/8	14.4	2.9		
116	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	壺	口11/8	15.4	2.2	外側面に赤色顔料	
117	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口～脚柱1/6	14.0	3.0		
118	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口11/6	16.6	1.8		
119	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	黄褐	口11/6	13.0	3.0		
120	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	口11/5	16.0	3.3	外側面に赤色顔料	
121	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	口11/8	12.6	3.8	外側面に赤色顔料	
122	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	口～脚柱1/4	17.0	4.3		
123	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口～脚柱1/4	15.0	4.5		
124	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	口11/4	17.6	2.7		
125	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	壺	口～脚柱1/6	16.8	3.1		
126	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	壺	口11/5	12.6	3.4		
127	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	オリーブ壺	口～脚柱1/13以下	12.4	4.5		
128	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い壺	口11/10	14.4	1.9		
129	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	肩～脚柱1/5	8.4		外側面に赤色顔料・黒斑	
130	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄	底1/4	11.6	5.2	外側面に黒斑	
131	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	開紙	底1/4	7.0	3.0	外側面に赤色顔料・黒斑	
132	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	暗灰	底ほぼ完全	5.5	2.1	外側面に黒斑	
133	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	オリーブ壺	底1/4	8.6	4.0	外側面に黒斑	
134	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	明黄褐	底1/4	7.0	3.3	外側面に黒斑	
135	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	底1/4	6.4	2.3		
136	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	暗灰	底1/5	4.5	3.0		
137	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	底完全	5.2	2.4		
138	道標に伴わない遺物	弥生土器	壺	に赤い黄褐	底1/4	4.8	1.8		

規範 番号	品種名	種別	器種	外観色調	残存状況	計測値 (cm)			特徴・備考
						口径	底径	高さ	
149	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底剥離、明漆剥離	底1/4	4.6	2.1	外側に赤色顔料
150	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1/3	5.6	1.9	
151	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1/3	5.8	2.3	外側に黒漆
152	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1/3	6.2	3.1	外側に黒漆
153	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1/4	5.4	3.6	外側に黒漆
154	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	黄灰	底	底1/2	3.6	2.0	
155	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底剥離	底完全	6.9	2.0	外側に黒漆
156	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1~4/8	21.6	2.8	内側に赤色顔料
157	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1~4/7	19.8	3.2	内側に赤色顔料
158	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	底1~4/7	22.2	3.8	内側に赤色顔料
159	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	底1~4/8以下	17.4	3.0	内側に赤色顔料
160	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1~4/8以下	22.5	2.4	内側に赤色顔料
161	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	底1/4	20.4	1.7	内側に赤色顔料
162	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	底1~4/4	32.9	5.5	内側に赤色顔料
163	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	赤~脚柱~	3.5		内側に赤色顔料
164	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	赤~脚柱1/4	3.2		内側に赤色顔料
165	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	赤~脚柱1/4以下	3.1		内側に赤色顔料
166	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	赤~脚柱1/4	3.7		外側に赤色顔料
167	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	赤~脚柱3/4	2.9		外側に赤色顔料
168	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	赤~脚柱1/4	6.0		外側に赤色顔料
169	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	脚柱は完全	7.8		外側に赤色顔料
170	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	脚柱は完全	7.6	8.9	内側に赤色顔料
171	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	底	底1/6以下	14.2	4.0	外側に赤色顔料、内側に黒漆
172	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	脚	脚1/8	17.0	3.2	外側に赤色顔料
173	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	脚1/6	16.8	3.1	外側に赤色顔料
174	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	脚1/5	14.6	7.3	外側に赤色顔料
175	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	脚1/6	18.4	2.9	外側に赤色顔料
176	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	底1~4/4	18.8	3.4	内側に赤色顔料
177	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	赤	赤~脚柱	29.6	5.1	
178	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	底1~4/12	28.0	4.5	内側に赤色顔料
179	造形に伴わない造物	弥生土器	糸	灰	明漆	底1/9	13.6	2.2	
180	造形に伴わない造物	須恵器	灰	灰	底	底1/4	7.4	1.2	底部へラ切り
181	造形に伴わない造物	須恵器	灰	灰	底	底5/6	8.0	1.9	底部へラ切り
182	造形に伴わない造物	須恵器	灰	灰	底	底1/2	9.0	1.6	底部へラ切り
183	造形に伴わない造物	須恵器	灰	灰	底	底1/20	16.1	1.7	
184	造形に伴わない造物	須恵器	灰	灰	底	底1/4	7.4	6.0	1.2
185	造形に伴わない造物	瓦質土器	灰	灰	明灰	底1/16	17.0	2.4	
186	造形に伴わない造物	須山焼	灰	灰	-	-	-	6.3	

金属製品観察表

規範 番号	品種名	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	鍍金仕上2	鉢	銀	26.0	18.0	6.0	205	万能のみ	
M2	鍍金仕上2	鉢	銀	32.0	23.0	12.0	704	万能のみ	

石器・石製品観察表

記載番号	遺構名	種類	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	保存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	壁穴住居1	石斧	35.0	14.0	6.0	300	サスカイト	完形	
S2	壁穴住居1	石斧	127.0	51.0	31.0	2300	流紋岩	ほぼ完形	
S3	壁穴住居1	石斧	90.0	43.5	26.0	144.50	流紋岩		
S4	壁穴住居1	石斧	49.0	47.0	39.0	96.00	流紋岩	完形	
S5	壁穴住居1	石斧	44.0	43.0	29.0	33.50	流紋岩		
S6	壁穴住居1	石斧	49.0	43.5	31.0	61.50	流紋岩	完形	
S7	壁穴住居1	石斧	51.5	42.0	39.5	77.50	流紋岩	完形	
S8	壁穴住居1	石斧	50.0	39.0	28.0	49.00	流紋岩	完形	
S9	壁穴住居1	石斧	234.0	212.0	106.0	6800.0	流紋岩	完形	
S10	壁穴住居1	石斧	216.0	216.0	105.0	5600.0	流紋岩	完形	
S11	壁穴住居1	石斧	366.0	312.0	152.0	19400.0	流紋岩	完形	
S12	壁穴住居2	石斧	43.5	16.5	5.0	3.50	サスカイト	完形	
S13	壁穴住居2	石斧	38.0	16.0	5.0	2.50	サスカイト	完形	
S14	壁穴住居2	石斧	40.5	14.0	5.5	3.50	サスカイト	ほぼ完形	
S15	壁穴住居2	石斧	87.0	46.0	18.0	130.50	流紋岩	41/2完形	
S16	壁穴住居2	石斧	139.0	38.5	76.0	477.00	流紋岩	1/2	
S17	壁穴住居2	石斧	49.0	21.5	28.0	25.00	流紋岩		
S18	壁穴住居2	石斧	81.0	68.5	53.0	444.00	流紋岩		薄い板状石と並列
S19	壁穴住居2	石斧	143.0	68.0	44.0	553.00	石斧		
S20	壁穴住居2	石斧	72.0	63.0	54.0	289.00	流紋岩		
S21	無立柱建物1	石斧	59.0	29.5	23.0	42.00	流紋岩質凝灰岩		
S22	造構に伴わない遺物	石鍬	36.0	19.0	4.0	3.00	サスカイト	完形	
S23	造構に伴わない遺物	石臼丁	60.0	35.0	9.0	21.50	流紋岩	ほぼ完形	
S24	造構に伴わない遺物	石斧	89.5	39.0	23.0	119.50	安山岩	完形	
S25	造構に伴わない遺物	石製品	79.0	41.0	9.0	32.50	斑紋岩(千枚岩)	完形	
S26	造構に伴わない遺物	石鍬	41.0	36.5	31.0	66.50	流紋岩	完形	山野利層の円窓
S27	造構に伴わない遺物	石鍬	86.5	43.0	19.0	62.00	流紋岩	1/2	山野利層の円窓
S28	造構に伴わない遺物	石鍬	104.0	81.5	44.0	555.00	花崗岩	完形	新鮮な円窓、河原石
S29	造構に伴わない遺物	石鍬	59.0	39.0	25.0	86.50	流紋岩		
S30	造構に伴わない遺物	石鍬	71.0	31.0	29.0	95.00	砂岩		
S31	造構に伴わない遺物	石鍬	104.5	68.0	28.0	250.00	花崗岩		

土製品観察表

記載番号	遺構名	種類	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	保存状況	備考
			最大長	最大幅	孔径				
C1	壁穴住居1	土鍬	53.0	45.0	11.0	87.00	にぶい黄褐色 (10YR8/3)	3/4	
C2	壁穴住居2	勾玉	82.5	19.0	5.0	18.00	褐色 (10YR4/1)	ほぼ完形	
C3	造構に伴わない遺物	土玉	27.5	33.0	6.0	24.00	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	完形	斜文



1 天文台から備讃瀬戸を望む

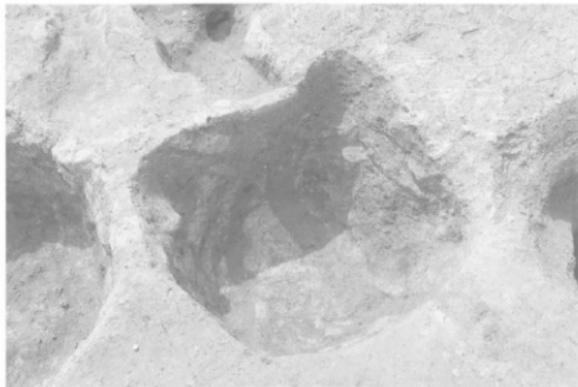


2 弥生時代の遺構全景（上が北）

図版2



1 積穴住居 1
(南から)



2 積穴住居 1a
中央穴
(南東から)



3 積穴住居 1
壁体溝断面
(東から)

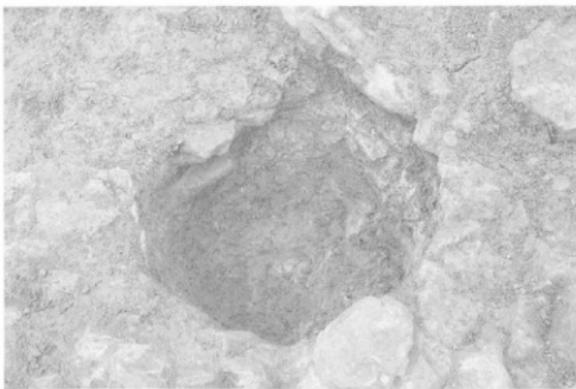
1 竪穴住居 1
壁体溝 工具痕
(南西から)



2 竪穴住居 1
中央穴
切り合ひ状況
(北から)



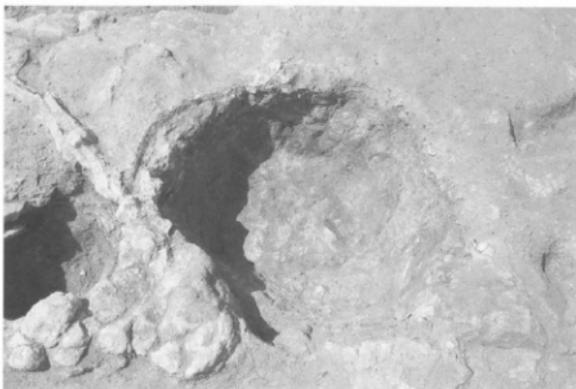
3 竪穴住居 1
柱穴
(南から)



図版4



1 竪穴住居 1b
中央穴
遺物出土状況
(西から)



2 竪穴住居 1b
中央穴 完掘状況
(南から)



3 竪穴住居 1b
排水溝 断面
(南西から)



1 竪穴住居 1b
土器出土状況
(西から)

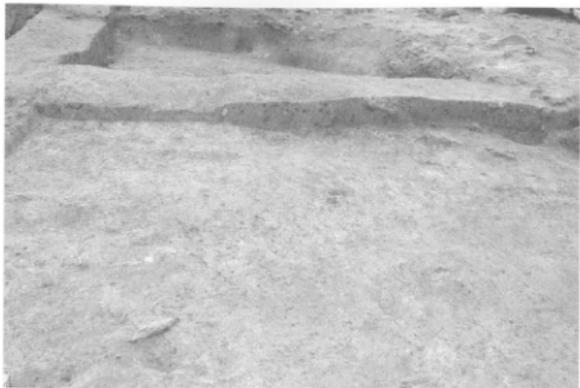


2 竪穴住居 2
(北西から)

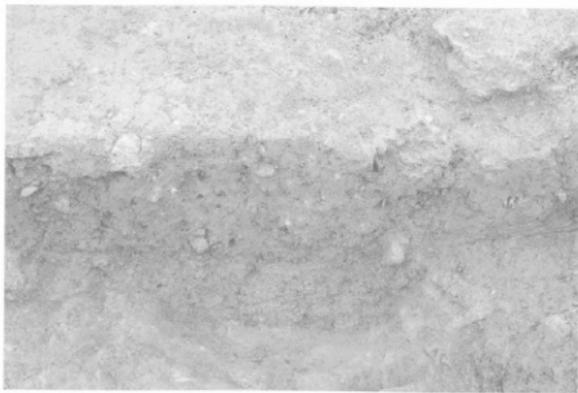


3 竪穴住居 2
土層断面
(南西から)

図版6



1 穹穴住居2
土層断面
(西から)



2 穹穴住居2b·c
壁体溝 断面1
(西から)



3 穹穴住居2b·c
壁体溝 断面2
(西から)

1 竪穴住居2
中央穴 断面
(南から)



2 竪穴住居2
中央穴
(南から)



3 竪穴住居2
P12 断面
(南東から)



図版8



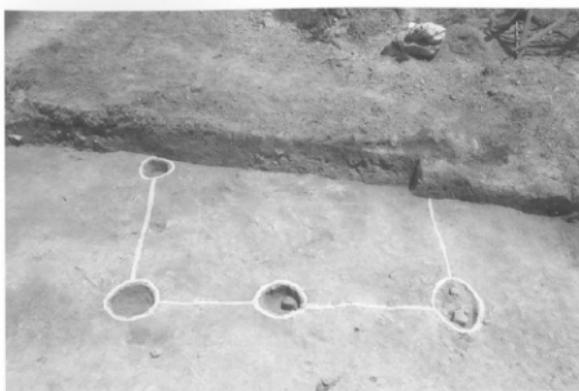
1 竪穴住居2
P15
(北から)



2 堀立柱建物1
(北から)



3 堀立柱建物1
P2
(北東から)



1 掘立柱建物2
(北から)



2 土壙7
(南西から)

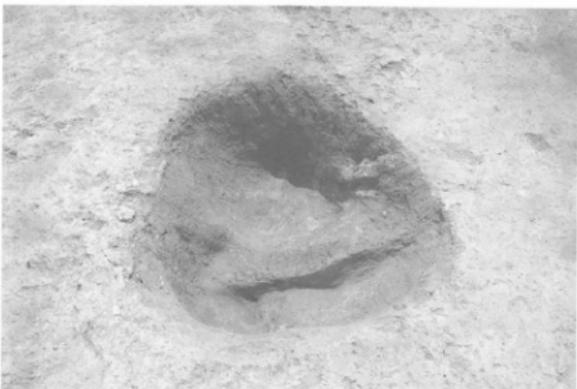


3 土壙8
(南東から)

図版10



1 土壌11
(南から)



2 土壌12
(西から)



3 土壌14
(西から)

1 土壌18
(南から)



2 土壌20
(北東から)



3 溝1
(南西から)



図版12



1 溝3

(西から)



2 包含層

土器(108)出土状況

(北から)



3 包含層

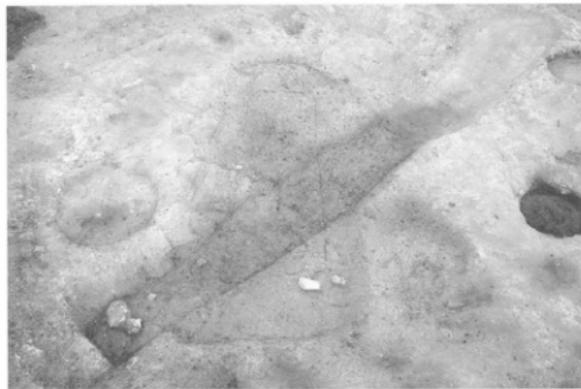
土器(160)出土状況

(東から)

1 古墳時代以降の
遺構 全景
(北西から)



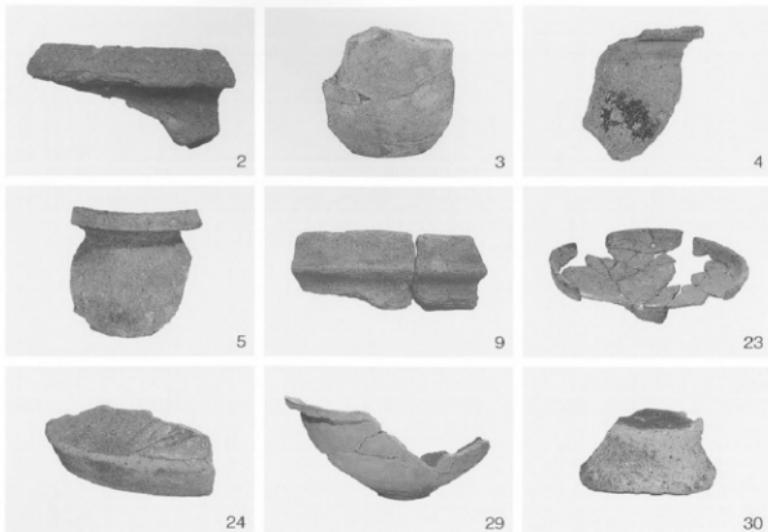
2 土壌墓1
検出状況
(南西から)



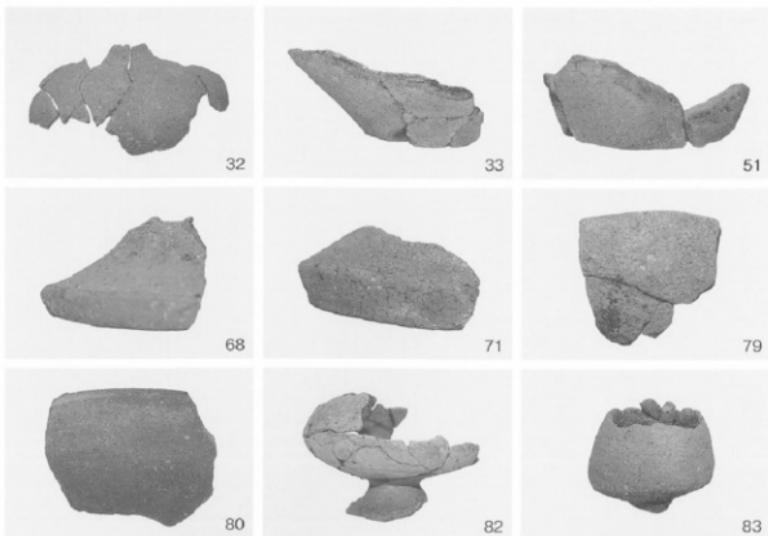
3 土壌23
(南から)



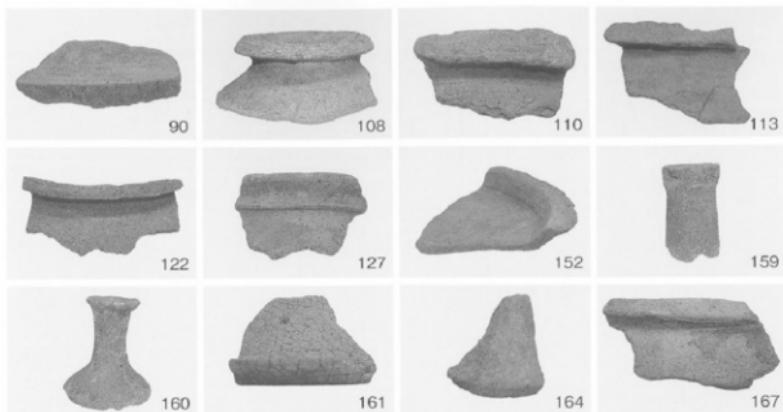
図版14



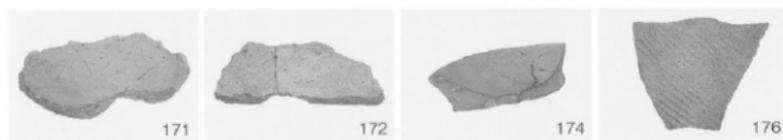
1 竪穴住居 1 出土遺物



2 竪穴住居 2 出土遺物



1 弥生時代 遺構に伴わない遺物

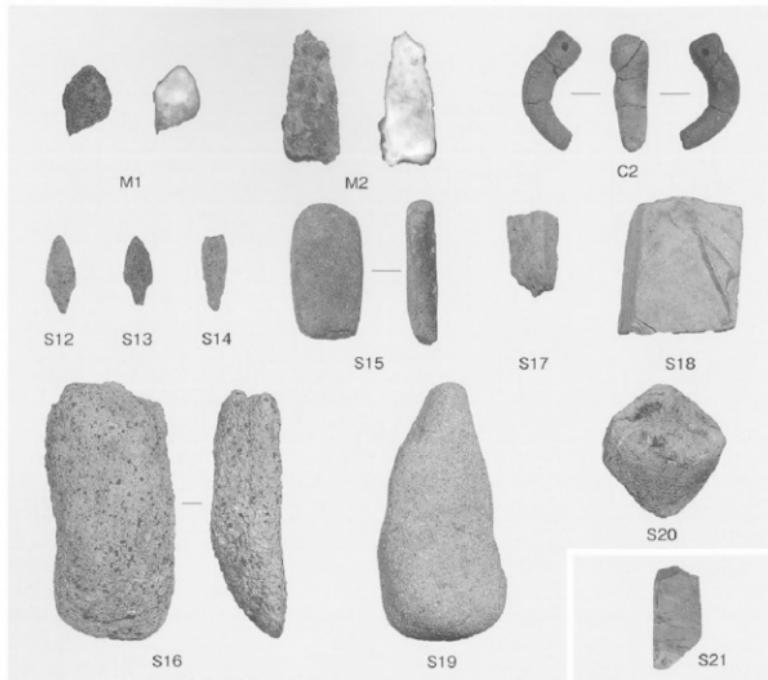


2 古墳時代以降 遺構に伴わない遺物



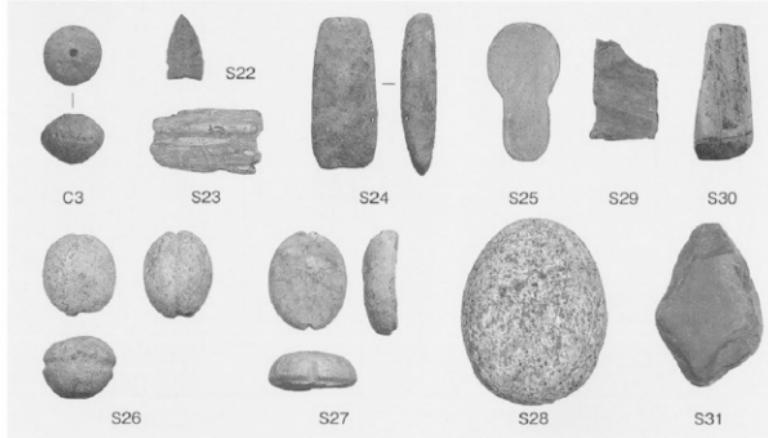
3 竪穴住居1 土製品・石器・石製品

図版16



1 壺穴住居2 鉄器・土製品・石器・石製品

2 挖立柱建物1 石器



3 遺構に伴わない遺物 土製品・石器・石製品

報告書抄録

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 2

竹林寺天文台遺跡
国立天文台新観測所建設に伴う発掘調査

平成21年3月19日 印刷

平成21年3月19日 発行

編集 浅口市教育委員会
岡山県浅口市鶴方町鶴方2244-2

発行 大学共同利用機関法人自然科学研究機構
東京都三鷹市大沢2-21-1
浅口市教育委員会

印刷 條玉島活版所
岡山県倉敷市玉島中央町1-20-8

(